ISSN　0285-5712

紀　要　第39号

（論文）
東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物（5）　1～24
金子　昭彦

江戸の南部屋敷（3）　25～46
－盛岡藩南部家江戸下屋敷の研究－　中村　隼人・滝尻　侑貴・野田　尚志

（研究ノート）
竪穴建物に伴う外延溝（4）　47～58
－古代陸奥国磐手・幣伊郡域の在り方－　山川　純一

古写真の研究資源化　59～74
－久田佐助関連古写真を事例として－　吉岡　由哲

（資料紹介）
一関市河崎の柵擬定地出土緑釉陶器の再検討　75～80
村田　淳

花巻市中嶋遺跡の白磁ピロースク碗　81～86
福島　正和

宮古市根井沢穴田Ⅳ遺跡出土のサイダー瓶　87～90
河本　純一

令和2年3月
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

序

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、出土資料の整理と記録保存を目的として調査報告書を刊行してまいりました。

また、これら資料の活用を図るため普及啓発事業や考古学関連分野の調査研究にも努めております。昭和56年以降、研鑽の成果を広く公開するために紀要を刊行しており、このたび第39号を発刊する運びとなりました。

本紀要には、論文等７編を収録いたしました。本書が学術研究の基礎資料として、また地域史や文化財活用の資料として広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、紀要の作成にあたり、ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和２年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　高　橋　嘉　行

例　　言

1　この紀要は、埋蔵文化財の調査及び研究事業の一環として、考古学及び考古学関連分野の研究を推奨し、考古学をはじめとする学術振興に寄与するとともに、埋蔵文化財保護思想の普及を図ることを目的として作成したものである。

2　本紀要には、論文２編、研究ノート２編、資料紹介３編を収録している。

3　引用図面は、各執筆者がそれぞれ許可を得て掲載している。

4　本年度の編集委員の構成は、次のとおりである。

編集委員　主任文化財専門員　　阿　部　勝　則
編集委員　文化財専門員　　村　田　　淳
編集委員　期限付調査員　　酒　井　野々子

東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物（5）

金子昭彦

東北地方・縄文時代晩期における土偶関連遺物のデータ・ベース化の続きである。今回は、関連遺物多出遺跡遺漏分を補った後（第8表）、悉皆的な収集を開始し、手始めとして青森県を取り上げた（第9表）。第8表で取り上げた青森県五所川原市五月女萢遺跡では、大洞C2～A式期の土偶が多出し、第9表の旧金木町千苅（1）遺跡や本稿（3）第6表で取り上げた青森県旧大畑町二枚橋（2）遺跡と共に、津軽、下北半島の北部で顕著なのが注目される。また、第8表で取り上げた秋田県旧琴丘町高石野遺跡や岩手県旧大迫町星敷遺跡で、美々4型中空動物形土製品が顕著に出土している。

1．はじめに

本稿は、土偶関連遺物として、"顔・人体らしきものを持つ遺物"、具体的には、土面、人体・人面付土器、岩偶、岩版・線刻礫、土版、正中線中空土版、美々4型中空動物形土製品、動物形土製品、動物形突起を悉皆的に収集することを目的とし、（1）は『岩手県立博物館研究報告』第33号（2016年）に掲載したが、(2)以降は本誌に掲載していただいている（(2)＝2017、(3)＝2018、(4)＝2019年）。

各関連遺物の時期ごとの違いも明らかにしようと考えているため、その見通しを付けやすいものから順に収集を行ってきたが、いよいよ悉皆的な収集を開始する。しかし、青森県五月女萢遺跡の報告書が刊行されたため、（4）第7表は大きな遺漏を残すことになった。ただ、今後もこのような遺漏は見つかることと思われ、最後に補った方が無駄ない。そうは考えたが、やはり時期の見通しの付けやすいものを先に収集しておいた方が、その後の判断に誤りが少なくなることも確かであろう。そこで、先に関連遺物多出遺跡遺漏分を補うこととした（第8表）。そのため、本稿での悉皆収集は青森県分に留まり（第9表）、それ以外は次稿となる。ちなみに「多出遺跡」は3点以上出土遺跡である。

これまで主として調査による出土資料を扱ってきて、文脈（関連遺物の組成）という当初意図としてなかった目的も意識し始め、悉皆収集で、コレクション等の類の資料を扱うことに違和感を持ち始めている。しかし、調査資料の参考になることは確実なので、実測図のあるものについては、やはり取り上げることとした。そこで、資料報告の掲載されている雑誌類も周囲の機関等で検索したが、意外に欠号が多い。遺漏を御教示くだされば幸いである。以下、青森県悉皆収集作業の注釈である。

青森市沢山（1）遺跡で、「動物の土製品か土器の把手の一部のいずれか」とされる土製品が出土しているが（青森山田高校　1995：p.58）、動物形土製品には見えないので本稿では割愛した。

『岩木山』（岩木山刊行会　1968）掲載遺跡で関連遺物が図示されているのは、小森山東部遺跡の「犬形土製品」のみだが（同：Fig.72の16＝PL.25の74）、写真を見る限り、縄文時代の産物とするには違和感を持つ。表土下15cmで出土した点も気になる（同：p.183）。本稿では割愛することにしたい。

根岸洋氏の労作「新谷雄蔵氏収集資料の報告」（国際教養大学　2016）に、砂沢式期の土版と動物形突起が掲載されているが、出土遺跡が不明なため（鰺ヶ沢町大曲遺跡か弘前市砂沢遺跡のどちらか？）残念ながら割愛することにした。

稲野彰子氏が、氏の第1～2類の細分を検討する中で各地の未報告の岩版類を扱っているが（稲野2005、2009）、資料紹介はあくまで副次的で石質も不明なため、本稿では割愛した。

2．表の見方（補足）

収集要領、記載要綱は、（1）、（2）と同じである。これまで扱わなかった点を中心に補足しておく。"★" は、特筆すべきものを示す。

番号（No.）は、第1表からの通し番号である。表内の遺跡は、概ね北～南に並べている。

時期の欄。アルファベットは、土器型式名の略記である。晩期は、"初"、"前葉" 等で示し、他の時期は、"後末"（後期末の意）、"弥中"（弥生時代中期の意）のように二文字の組み合わせで示している。"～○○" は "○○までの時期"、"○○～" は "○○以降の時期" である。

残存率は、分数で示していても大雑把で、参考程度にお考えいただきたい。概ね1/10以下を小片、それより小さなものを細片としている。完形時の状態（大きさ）を推測できないものは、"欠損" か "破片" で示している。

接合の欄。同一個体片が出土している場合は、"同" と記すことにした。この場合の残存率は、全て足したものとなる。接合欄の記号。△は、詳細は不明だが、接合していると思われるもの。○は、すぐそばの破片が接合したのではなく、廃棄後に割れたとは考えられないもの。◎は、それが3片以上接合したもの。●は、接合によって完形に近く復元されたもの。★は、遠距離（20m以上）接合。■は、以上が複合した特筆すべき接合で、詳細は備考欄に記した。

付着物の欄。表面に塗布する赤色付着物は、痕跡的なもの（不明含む）を○、多いものを◎、全面塗布のものを●とし、漆とされているものなど特別な場合は★で記した。黒色付着物は、塗布箇所が割口か否かに注意した。

出土位置。原則として遺構出土の場合のみ記し、捨場や遺物包含層は基本的に割愛した。遺構出土でも、混入の可能性が高いと判断されたものは割愛した場合がある。竪穴住居跡の床の場合は、"住床"、覆土は "住覆"、不明の場合はただ "住居"、石囲炉は "石炉" などと略した。

遺跡の立地は、河岸段丘を "段" と略し、高位、中位、低位を、それぞれ "高"、"中"、"低" と略し、"高段" などと称す。海岸段丘は "海段" とした。扇状地は "扇状"、自然堤防は "堤防"、沖積平野は "沖積" である。

遺跡の評価・分類は、拠点、小規模（"小規" と略）、遺物散布地（"散布"）の三つに分けたが、多量の遺物が出土するが時期が限られる場合は、半拠点（"半拠"）とした。"拠？" は、"拠点？"、"小？" は "小規模？" の略である。

掲載箇所欄で文献名を引用する際、発行機関・発行年（西暦）で示しているが、発行年は下二桁のみを記し、発行機関は、次のように略称している。○○県の教育委員会→県教、○○県の埋蔵文化財センター→県埋、○○県立博物館（青森県立郷土館含む）→県博、○○市町村の教育委員会→○○（市町村名）、二文字以上の市町村教育委員会、それ以外の機関→機関名の最初の二文字（財団法人等は除いて）。例えば、五所川原市→五所である。ただし、国立歴史民俗博物館は歴博、弘前大学は弘大と略した。

図番号は、通しで示されている場合には、「○図△」の「○図」は原則として省略し、そうでなくても枠をはみ出す場合は略記した。備考欄で類例を引用した際の数字は、本稿（1）～の表番号である。

3．多出遺跡補遺

・青森県旧平館村今津遺跡（第8表1555）（鈴木　1980）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩版・土版の資料紹介である。本稿では原則として稲野（1983）で取り上げられている確実に晩期である狭義の

「岩版・土版」（ＫＯ類）に限って資料とした。

なお、今津遺跡の発掘調査による出土資料については、本稿（1）第３表で扱っている。

・青森県五所川原市五月女萢遺跡（第８表1556～1585）（五所川原市教育委員会　2017）

市名と報告書の図版番号が長いため、表の掲載箇所欄は略記せざるを得ず、分かりにくくなっていることをお詫びする。第９表1556の場合は、“五所川原17→図Ⅲ-2-33の16”の略である。なお、“１集”等は、“第１遺物集中区”等の略で、“２東”等は“第２東遺物集中区”等の略である。

遺構外出土で「土版」とされた図Ⅲ-4-3-13の173と174は、土版でないと判断して割愛した。土面について補足する。出土位置は比較的偏っているそうである（報告書第２分冊：p.298、図Ⅳ-3-3）。「裏面は丁寧に磨きがかけられた無文のものと、渦巻文を伴う二者が存在する」（報告書第２分冊：p.425）。大洞A1式期になると土版型に変化すると考えていたが、第１図12、13のような比較的大型の土面然としたものも存続することを知った。

土砂採取に伴って8,200㎡調査され、その後保存目的のため1,790㎡確認調査された。縄文時代後期後葉～晩期後葉の集落跡が主として発見され、墓地（人骨７体出土）と捨て場等が検出されている。石製玉の製作ほか、ベンガラ生産や漆器製作も行われている。黄褐色粘土のマウンドを持つ墓等により保存されることとなった。奈良時代の竪穴住居跡１棟、平安時代の畠跡も検出され、弥生時代中期後葉、古墳時代初頭（後北C2-D式）の土器片、中世の陶磁器片も出土している。

縄文土器は、僅かな中期前葉のほか、後期中葉（十腰内Ⅱ～Ⅲ式）、後期後葉（瘤付土器第Ⅱ段階）～晩期後葉（大洞A1式）が出土し、大洞Ｃ２式が最も多く、次いでその前後で、晩期初頭以前は比較的少ないが瘤付土器第Ⅱ段階は比較的多い。位置的に北海道系土器も各時期存在する。

関連遺物は、土面16点（「浅鉢」とされた１点も追加）、人面付土器３点、人面形突起１点、岩偶２点？、岩版２点？、土版３点、動物形突起２点、動物形土製品１点出土し、大洞Ｃ２～A1式期と後期後葉～末に偏っている。晩期前葉は、土器の出土は多いのに岩版に代表される関連遺物は少ない。

土偶は322点出土したそうだが、掲載は240点に留まっていて（報告書第２分冊：p.420）。掲載品で判断する。報告書第２分冊図Ⅲ-4-4-4の70は扁平な壺形土器ではないだろうか。土偶は、概ね出土土器の傾向に比例しているようである。大型遮光器系列土偶やｘ字形土偶、結髪土偶も存在するが、優品は少なく、独特のものも多い（第１図１）。第１図２の脚の屈曲の極めて弱い屈折像土偶は、北海道系であろう（註１）。第１図３は、出土状況と文様から大洞B2式期と判断される（報告書第２分冊：p.422）大型遮光器系列でない土偶である。大洞A1式期の肩パット土偶も出土している（報告書第２分冊：図Ⅲ-4-4-5の112、113）。

石剣類は129点出土したそうだが、石棒・石刀が多く、いわゆる石剣は少ないそうである（報告書第２分冊：p.313）。石冠９点、土冠２点出土した。内面渦状土製品が３点出土し、全て椀形で晩期前半の可能性が高い（金子　2011a）。

土製耳飾は58点出土し、掲載品を見る限り、土器、土偶、土面の出土が多い大洞Ｃ２～A1式期でほとんどを占めるはずのC2ネジ形（金子　2009a）が非常に少ない。大型のクラゲ状や鼓状、蓋状に代表される極小の片端大系列が多く、土製耳飾に関しては晩期前半が主体を占めていると考える（金子　2009a）。弧状土製品は２点出土し、報告書第２分冊図Ⅲ-3-2-33の１は第二段階（大洞BC1～２式期）、同図Ⅲ-4-3-8の97は第四段階（大洞Ｃ２式前半期）か（金子　2009b）。菱形環状土製品は２点出土し（報告書第２分冊図Ⅲ-4-3-10の118、121）、両方とも第Ⅰａ段階か（金子　2010c）。ボタン状石製品１点（報告書第２分冊図Ⅲ-3-1-62の17）は、第Ⅲｂ段階で大洞Ｃ２式古期か（金子　2010b）。その他、玉象嵌土製品、菱形環状土製品類似品（報告書第２分冊図Ⅲ-4-3-10の120）や鐸形

第８表　多出遺跡補足（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	県	遺跡名	種別	時期	形態・系列・形状	残存率	現長cm	接合	付着物 赤	付着物 黒	材質（つくり製作）	出土位置	遺跡 立地	遺跡 評価	掲載箇所	備考
1555	青	今津	岩版	C2後?	楕円形・4-5類	1/3	11.5				泥質凝灰岩		扇状	半拠	鈴木80→図６の75	表正中線多重弧線。裏入組文。厚6.5㎝
1556	青	五月女萢	土面	C2新～	土版型・断面平ら	1/2?	4.4				厚1.3㎝	２束	砂丘	拠点	五17Ⅲ3-2-33-16	「有孔（途中）」。眉鼻Y字。額部位貼付
1557	青	五月女萢	土面	C2前?	?・断面平ら	1/6?	4.4		○		厚1.9㎝	４集	砂丘	拠点	五17Ⅲ3-4-36-5	鼻大。貼付鼻口刺突。裏縁肥厚。註4
1558	青	五月女萢	土面	C2古	「浅鉢」底鼻突出	3/5	12		○			６束	砂丘	拠点	五17Ⅲ3-6-25-87	浅鉢とのキメラで口唇頸部文様。註5
1559	青	五月女萢	土面	C2新?	土版型・断面略平	3/4	7.5		○		眉鼻Y字		砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-14-186	側頭突起列。頬工字文。裏面雲形文二段
1560	青	五月女萢	土面	A1?	断面弱い弧	1/4	10		○		眉鼻T字		砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-14-187	側頭突起列。口横貼付。顎工字文
1561	青	五月女萢	土面	A1	断面弱い弧	1/3	8						砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-14-188	1560類似。目口縄文。顎工字文
1562	青	五月女萢	土面	C2新?	土版型?・断面略平	1/3	4				眉鼻Y字		砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-14-189	眉刺突多
1563	青	五月女萢	土面	A1?	土版型?・断面平	1/6	2.3		○		眉鼻T字		砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-14-190	眉縄文
1564	青	五月女萢	土面	A1??	土版型?・断面平	1/4	5.6		○		眉鼻T字		砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-15-191	眉縄文。厚さ1.6㎝以上？
1565	青	五月女萢	土面	C2～	断面平ら	小片	6.4						砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-15-192	口横貼付
1566	青	五月女萢	土面	A1??	土版型・断面弱弧	3/7	4.2						砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-15-193	口横貼付。裏面渦巻文。眉鼻剥離
1567	青	五月女萢	土面	C2古	遮光器型。鼻右目	1/5	3.5				眉弧状		砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-15-194	貼付遮光器眼横線溝底刺突。人中表現
1568	青	五月女萢	土面	C2～	土版型?・断面平	小片	5				側頭突起列		砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-15-195	1559からの変遷？天地逆？裏工字文系入組文
1569	青	五月女萢	土面	A1??	土版型・断面平ら	3/10	4.8						砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-15-196	裏渦巻文
1570	青	五月女萢	土面	A1??	土版型?・断面平	小片	4						砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-15-197	裏多重線。「端部穿孔」←報告書２分冊p.425
1571	青	五月女萢	土面?	A1??	土版型?・断面平	不明	5.3						砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-15-198	長楕円形。表多重円、裏無文
1572	青	五月女萢	人面土器	「亀Ⅱ」	「香炉」・「体部」	細片	4					５集	砂丘	拠点	五17Ⅲ3-5-4-19	顔右下破片。目鼻口貼付。顎縄文
1573	青	五月女萢	人面土器	「亀Ⅱ」	注口・注口基部裏	細片	6.2						砂丘	拠点	五17Ⅲ4-1-4-38	眉～鼻Ｔ字隆帯縄文
1574	青	五月女萢	人面土器	「亀Ⅱ」	香炉・頂部	細片	5.2						砂丘	拠点	五17Ⅲ4-1-4-39	頭頂尖る。弧状眉貼付。目口沈線
1575	青	五月女萢	人面突起	「亀Ⅲ」	香炉・頂部	細片	5.6				突起中空		砂丘	拠点	五17Ⅲ4-1-4-55	人面？　縄文
1576	青	五月女萢	岩偶	～C2古	馬淵川型・上半身	3/8	4.4		○		石質不明	６西	砂丘	拠点	五17Ⅲ3-6-7-2	遮光器眼。背中雲形文。註6
1577	青	五月女萢	「岩偶」?	不明	腰?「左腕?」	小片	4.7				凝灰岩		砂丘	拠点	〃Ⅲ4-5-9-122	腰？多重円。股？表裏条線
1578	青	五月女萢	岩版	B?	隅丸長方形・１類?	3/5?	12.7			割口	凝灰岩	１集	砂丘	拠点	五17Ⅲ3-1-62-27	下描状浅い沈線。Ｓ字入組文。厚1.2㎝
1579	青	五月女萢	岩版?	不明	隅丸長方形・非KO	欠損	6.3				凝灰岩	２束	砂丘	拠点	五17Ⅲ3-2-33-17	逆三角形、工字状陰刻。註7。厚１㎝
1580	青	五月女萢	土版	A1?	胴張方形・５類	1/6	5.9				厚1.7㎝		砂丘	拠点	五17Ⅲ3-5-7-6	片面多重弧線。片面側面工字文系三叉文
1581	青	五月女萢	土版	Ｃ２?	長楕円形・４類?	2/5?	6						砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-13-171	片面渦巻文多。片面剥落？無文
1582	青	五月女萢	土版	Ａ?	楕円形・５類	1/2	6.1				厚1.5㎝		砂丘	拠点	〃Ⅲ4-3-13-172	表裏対向多重弧線。片面正中線。側面刺突
1583	青	五月女萢	動物突起	「亀Ⅲ」	香炉・頂部	細片	3.9						砂丘	拠点	五17Ⅲ4-1-4-53	イノシシ？　無文。両眼刺突
1584	青	五月女萢	動物突起	「亀Ⅲ」	香炉・頂部	細片	5.4						砂丘	拠点	五17Ⅲ4-1-4-54	イノシシ？　縄文
1585	青	五月女萢	動物形	不明	イノシシ?・頭片	破片	4.3					集石	砂丘	拠点	五17Ⅲ2-4-19-19	頭細長い。豚鼻。両耳突起。目鼻孔刺突
1586	青	五月女萢	土面	C2新?	土版型・断面略平	略完	5.8						砂丘	拠点	藤沼02→図26	眉鼻Y字。頭頂側頭突起。裏面文様
1587	青	亀ヶ岡	土版	A'?	長楕円形?・６類	1/4?	6.5?						砂丘	拠点	県教74→48図12	表裏多重コ字文二段。縮尺不明。厚1.6㎝？
1588	青	亀ヶ岡	土版	A'?	隅丸方形・６類	2/5?	4.8						砂丘	拠点	県博84→図12の３	多重コ字文。「有孔？」。厚2.8㎝
1589	青	亀ヶ岡	土版	A'?	隅丸方?・６類?	小片	3.5						砂丘	拠点	つが19図4・70・105	表裏多重コ字文？側面沈線。厚２㎝
1590	青	亀ヶ岡	正中中空	BC?	頭突起楕円	一欠	8.3		○		貫通孔		砂丘	拠点	鈴木79図17の36	光沢。正中線隆帯。表菱形文。裏Ｃ字文
1591	青	亀ヶ岡	岩版	BC?	長方形?・２類?	不明	8.4				泥岩		砂丘	拠点	鈴木80→図5-73	遮光器眼？→特大？　Ｓ字文。厚1.9㎝
1592	青	亀ヶ岡	岩版	A1?	胴張角突出・５類	1/2	5.7				泥岩		砂丘	拠点	鈴木80→図5-74	表多重弧線。裏流水工字文。厚0.9㎝
1593	青	亀ヶ岡	岩版	Ｃ２?	長楕円?・４類?	1/3?	5				凝灰岩		砂丘	拠点	歴博15→図101下	表裏正中線。多重弧線。厚さ1.2㎝
1594	青	亀ヶ岡	岩版	BC2?	隅丸方形?・2b類	2/5?	10.3				凝灰岩		砂丘	拠点	歴博15→図102	表正中線に弧線付く。渦巻文。厚2.8㎝
1595	青	土井Ⅰ号	岩偶?	～B1?	非馬淵川型	略完	29				凝灰岩?		堤防	拠点	板柳93→14図47	頭作り出し。その下も突出。註8
1596	青	土井Ⅰ号	岩版	BC2?	長楕円形・2b類	1/3	9				凝灰岩		堤防	拠点	板柳93→15図53	表、正中線、パンツ？　Ｓ字文。厚1.7㎝
1597	青	土井Ⅰ号	線刻礫	不明	自然礫に人体?	完形	6.7				石質不明		堤防	拠点	板柳93→16図60	表、正中線、パンツ？　厚1.6㎝。註9
1598	青	（宮田）	岩版	BC2?	長楕円?・2a類?	欠損	11.4		○		泥岩		段?	拠?	鈴木80→図5-65	パンツ。入組三叉文。方形文。厚2.4㎝
1599	青	（宮田）	土版	Ｃ１?	隅丸長方形・３類?	完?	8.3		○		63ｇ		段?	拠?	鈴木80→図11-11	正中線。遮光器眼？　蓑状文。厚1.2㎝
1600	青	（宮田）	土版	不明	楕円形・非KO?	5/9	5.9		○		厚1.2㎝		段?	拠?	鈴木80→図11-12	正中線貫通孔。★刺突多。蓑状文
1601	青	（宮田）	土版	BC2?	不整形?・2b類??	不明	8.5				厚1.2㎝		段?	拠?	鈴木80→図11-15	楕円形？　表裏磨耗？　蓑状文
1602	青	玉清水	岩版	Ｃ１?	楕円形・3類	2/5	6.5		○		泥質凝灰岩		丘陵	半?	鈴木80→図1-2	先端丸まるＣ字文。火熱変色。厚3.4㎝
1603	青	玉清水	岩版	Ｃ１?	隅丸方形・3類	1/3	12.4				泥岩		丘陵	半?	鈴木80→図1-3	正中線。多重Ｃ字文。タール？厚さ2.8㎝
1604	青	玉清水	岩版	Ｃ２?	不明・４類?	3/8	5.9				泥岩		丘陵	半?	鈴木80→図1-7	渦巻文。縁辺欠損。火熱変色。厚3.7㎝
1605	青	玉清水	岩版	Ｃ１?	楕円形?・３類	2/5	6.9				泥岩		丘陵	半?	鈴木80→図2-25	表裏利対向Ｃ字文？　厚さ1.8㎝
1606	青	玉清水	岩版	Ｃ１?	楕円形・3類	一欠	5				泥質凝灰岩		丘陵	半?	鈴木80→図2-26	不整形？（側面も）。表裏Ｃ字文。厚1.3㎝
1607	青	玉清水	岩版	Ｃ１?	楕円形?・３類	2/5?	10.6				泥岩		丘陵	半?	鈴木80→図2-32	表、正中線Ｃ字文向き逆。裏不明。厚3.2㎝
1608	秋	高石野	土面	C2前半	遮光器型。右半分	3/8	7.5		○	?	細遮光器眼		段丘	拠点	琴丘83→15図	顔周囲文様→地方遺跡に類例（次稿）
1609	秋	高石野	岩版?	後後?	長楕円形・非KO類	3/4	9		○		註10		段丘	拠点	琴丘83→20図	表正中線円弧線文。★裏入組文。厚2.6㎝
1610	秋	高石野	線刻礫	不明	不整六角形	完?	8				註11		段丘	拠点	琴丘83→20図	自然礫に線刻？　パンツ状区画上下二段
1611	秋	高石野	線刻礫?	不明	不整台形	完?	7?				註11		段丘	拠点	〃裏表紙裏下	斜線二単位。自然礫に線刻？砥石？
1612	秋	高石野	土版	Ｃ１?	隅丸方形・３類?	1/6	7				厚２ｃｍ		段丘	拠点	琴丘83→16図	表先端丸くなる多重Ｃ字文。裏意匠不明
1613	秋	高石野	美々中空	B2?	紡錘形ヒレ大	一欠	12			割口	中空		段丘	拠点	〃16図6-GⅡ	「土面」。貫通孔。表裏文様
1614	秋	高石野	美々中空	～初?	楕円形ヒレ大	4/5	6			割口	中空		段丘	拠点	〃16図9-J	ラグビーボール状。無文
1615	秋	高石野	美々中?	～初?	円～楕円形	不明	5				中空		段丘	拠点	〃16図4-H	無文。ヒレ付
1616	秋	高石野	美々??	ＢＣ?	長楕円形全面文様	略完	7.2						段丘	拠点	〃16図8-GⅡ	貫通孔でなく刺突？岩版２類と同じ文様？
1617	青	是川中居	土版	Ｃ１?	不整楕円・３類	一欠	7.6				厚1.4㎝		低?	拠?	鈴木80→図12-18	表裏対向多重Ｃ字文、間△多重
1618	青	是川	岩版	A'?	台形?・6類	欠損	6.2				凝灰岩		低?	拠?	歴博15→図116上	表正中線盲孔、多重コ字文。厚さ1.2㎝
1619	青	虚空蔵	岩版	BC2?	長楕円形・２類?	1/3	4.6				泥岩。摩滅		中?	拠点	名川78→29図16	表正中線？、裏Ｓ字文。厚さ1.2㎝
1620	青	虚空蔵	土版	A1	隅丸方形?・５類	1/5	7						中?	拠点	名川78→29図29	表多重弧線、裏工字文。厚さ1.4㎝
1621	青	虚空蔵	岩偶	BC2?	馬淵川型・左胸	1/5	11.7		○		泥岩?		中?	拠点	県博97図72-209	Ｓ字入組文。三叉文
1622	青	虚空蔵	岩版	不明	長楕円形・非KO類	一欠	9.5				シルト岩?		中?	拠点	県博97図73-224	片面片端盲孔、正中線なぞり。厚3.2㎝
1623	青	虚空蔵	土面	Ｃ２?	鼻曲り型目横楕孔	2/3	10.5						中?	拠点	福田88→図２の２	遺跡不確実。眉鼻剥落。貫通眼楕円水平
1624	青	（平）	正中中空	Ｃ１?	寸詰まり頭突起	4/5	6				中空貫通孔		中?	拠点	鈴木82→図2-3	正中線対向山字文。鋸歯列？
1625	青	（平）	美々??	不明	寸詰まり側面波状	不明	4.9				貫通孔		中?	拠点	鈴木82→図2-4	無文
1626	青	杉沢	美々中?	不明	片面のみ。無文	2/5?	6.9				中空貫通孔		低段	拠?	県博97図27-178	正中線中空土版？
1627	青	右ェ門次郎窪	土版	Ｃ２	?・４類	細片	3.2						丘陵	小?	県教82→165図5	表裏延びた渦巻文
1628	青	右ェ門次郎窪	土版	Ｃ２	楕円形・４類	2/3	8.6	△					丘陵	小?	県教82→165図6	４片接合。煤付着。表正中線。側面沈線
1629	青	右ェ門次郎窪	正中中空	Ｃ２?	頭突起甲虫型	1/2	7.7	△			肉厚中空		丘陵	小?	県教82→165図2	厚い5.5㎝。頭欠。表、胸隆帯、渦巻文対称
1630	青	野面平	岩偶	Ｃ２?	馬淵川型・胸	2/7	8.9				泥岩		低段	拠点	県博97図95-63	背中中央ワンポイントS字文。前無文？
1631	青	野面平	岩偶	Ｃ２?	馬淵川型・頭右足欠	4/5	6.4				泥岩		低段	拠点	県博97図95-64	小型無文
1632	青	野面平	岩偶	Ｃ１?	馬淵川型・上半身	2/5	10.2				緑色凝灰岩		低段	拠点	県博97図95-65	遮光器眼。胸▽文。背中雲形文
1633	青	野面平	岩偶	BC1?	馬淵川型・下半身	1/2	11.4				泥岩		低段	拠点	県博97図95-66	パンツ。脚表裏入組三叉文
1634	青	野面平	岩版	BC1?	隅丸方形?・1b類	破片	8				泥岩		低段	拠点	県博97図95-67	大ぶりなＳ字文。厚さ1.9㎝

No.	県	遺跡名	種 別	時 期	形態・系列・形状	残存率	現長 cm	接合	付着物 赤	付着物 黒	材 質（つくり製作）	出土位置	遺 跡 立地	遺 跡 評価	掲載箇所	備 考
1635	青	野面平	岩版	不明	長台形・非KO類	略完	6.8				細粒凝灰岩		低段	拠点	県博97図95-68	片面盲孔2、片面無文。厚さ1.3㎝。47ｇ
1636	青	野面平	岩版	B？	隅丸方形・1a類	破片	12.2				泥岩		低段	拠点	県博97図95-69	S字入組文「片面浅く未成品？」。厚2㎝
1637	青	野面平	岩版	BC1?	隅丸方形・1b類	破片	11.2				泥岩		低段	拠点	県博97図95-70	「細沈線（未成品？）」。厚さ2.1㎝
1638	青	野面平	美々??	不明	側面L字状	完形	6.7				中実		低段	拠点	県博97図94-49	平面長方形に頭突起。円文。第2図4
1639	岩	屋敷	土面?	～B1?	小型・眉弧状	一欠	5.7				裏下部欠損		低？	拠？	大迫88→27図1	眉端下貫通孔。頭頂両側突起。目楕円線
1640	岩	屋敷	人面突?	～B1?	香炉頂部?	破片	3.7						低？	拠？	大迫88→27図2	「動物把手」？ 眉弧状
1641	岩	屋敷	正中??	C2??	胸破片??特大？	不明	7				中空		低？	拠？	大迫88→27図7	正中線隆帯刺突列両脇渦巻文？
1642	岩	屋敷	美々中空	B1？	楕円形ヒレ大	2/5	7.4				中空		低？	拠？	大迫88→27図5	頭横ヒレ文。正中線隆帯刻目列。貫通孔
1643	岩	屋敷	美々中空	不明	大。尾のみ	破片	5.5				中空		低？	拠？	大迫88→27図6	尾ヒレ刻目列。縄文。貫通孔
1644	岩	東裏	岩版?	BC？	?・2類?	小片	6				凝灰岩		低段	拠点	県教81→135図1	方形文？ 厚さ2.8㎝
1645	岩	東裏	岩版??	不明	?・?	小片	4.7				凝灰岩		低段	拠点	県教81→135図2	不整貫通孔。平行線。厚さ1.9㎝
1646	岩	東裏	岩版	C1？	隅丸長方形・3類	3/10	9.4	△			凝灰岩		低段	拠点	県教81→135図3	3片接合。「彩色」？ 対称C字文。△剥去
1647	岩	東裏	岩版?	不明	?・?	小片	4.2				凝灰岩		低段	拠点	県教81→135図4	沈線文意匠不明。厚さ1.3㎝
1648	岩	東裏	土版	不明	胴張方形・非KO？	2/5	4.6				隅貫通孔		低段	拠点	県教81→70図1	貫通孔結ぶ沈線ほか無文。側面沈線。厚1.1㎝

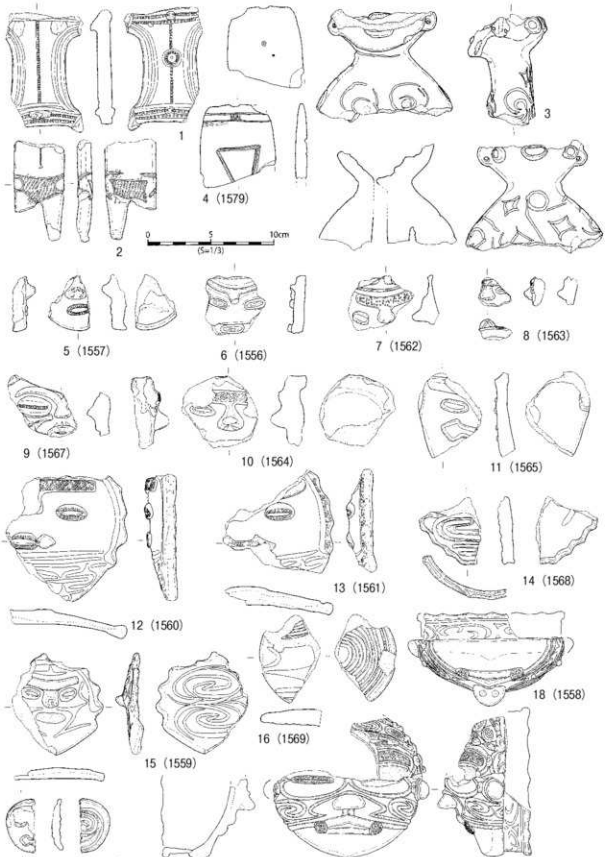
第９表　悉皆収集（1）　（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	県	遺跡名	種 別	時 期	形態・系列・形状	残存率	現長 cm	接合	付着物 赤	付着物 黒	材 質（つくり製作）	出土位置	遺 跡 立地	遺 跡 評価	掲載箇所	備 考
1649	青	宇鉄	岩版？	A？	小楕円形・非KO	略完	3.8				石質不明		海段	半？	宇鉄96→114図46	自然石。表～側～裏鋸歯文。軟質。厚1.4㎝
1650	青	宇鉄	土版	A？	胴張方形・非KO	3/10	3.7						海段	半？	宇鉄96→111図43	表裏変形工字文。側面沈線。厚1.2㎝
1651	青	千刈(1)	土面	C2中?	土版型・断面弱弧	2/5	7.3				内面文様		低段	小？	県教95→89図2	頬対向△文。裏聖山系入組文。註12
1652	青	観音林	岩偶	C2古？	馬淵川型・右腕欠	一欠	10.2		○		石質不明		段丘	拠？	弘大04→22図21	遮光器眼。背文様岩版4類。第2図1。註13
1653	青	（沼ノ沢）	岩版	A？	隅丸長方形・5類	略完	25.5		○		凝灰岩		？	？	鈴木84→図1	★特大。正中線両端円文。炭化物付着
1654	青	大曲	土版	砂沢？	小判形？・6類	1/5?	3.6				厚1.7㎝		丘陵	半？	木村89→13図2	多重コ字文。刺突。図90゜左になっている
1655	青	大曲	動物突起	砂沢？	クマ・壺口唇	完形	2.6				三単位		丘陵	半？	木村89→4図5	土器口～胴上1/4周以下破片。刺突多
1656	青	沢山	岩版	BC1?	隅丸長方形・1b類	1/2	8				凝灰岩		丘？	半拠	鈴木80→図3-46	表正中線。表裏方形文。厚さ2.6㎝
1657	青	沢山	岩版	不明	楕円形・非KO？	一欠	8.2				泥岩		丘？	半拠	鈴木80→図3-56	表正中線。表裏浅い雑線。厚さ2.2㎝
1658	青	三内	土版	BC2?	長楕円形・2b類	不明	4.6						？	？	鈴木80→図11-6	正中線盲孔遮光器眼。C字文。厚1㎝
1659	青	細越	美々中空	～C2?	長楕円・薄め・無文	一欠	7.2				口尻？貫孔		沖積	拠？	県教79→図35-6	「土笛」。ヒレ欠損？
1660	青	朝日山(1)	動物形	不明	イヌ？・全身	略完	4.4				14ｇ		丘陵	墓地	県教94→110図1	★脚尾差込式？（孔）。目無。耳有。口線
1661	青	羽黒平	土面	C2古	遮光器型断面台形	一欠	9.9		○		眉弧		？	？	藤沼02→図31	頂部突起下紐孔2。頬膨らむ。人中。註14
1662	青	石名坂	岩版	BC2?	隅丸方形?・2類？	2/5?	4.8				石質不明		扇？	拠？	黒石87→40図1	表正中線。表裏C字文。厚さ1.4㎝
1663	青	槻の木	土版	A？	胴張角突出・6類	不明	5.2						？	？	鈴木80→図11-17	正中線。多重線。厚1.8㎝
1664	青	大森勝山	岩版	C2？	隅丸方形？・4類	1/4?	6.7				石質不明		扇？	拠？	弘前10図60整35	正中線対向（文。多重S字入組文。厚2.3㎝）
1665	青	小森山東部	岩版	BC2?	隅丸方形・2b類？	破片	7.6				凝灰岩質砂岩		山麓	半？	福田80→図1-1	三叉文、S字、C字文。厚さ1㎝
1666	青	石郷	人面土器	B1?	頸外反浅鉢口縁	欠損	6.2				口縁内面		扇端	拠？	平賀79→23図57	弧状眉鼻、目下貼付。透彫あり。突起列
1667	青	石郷	岩版？	B1?	長方形?・非KO	欠損	3.9				凝灰岩？		扇端	拠？	平賀79→223	表側面文様。裏無文。正中線。厚1.6㎝
1668	青	石郷	線刻礫	不明	三角形の自然石	完形	4.5				安山岩		扇端	拠？	平賀79→224	表裏不整線刻。厚0.7㎝
1669	青	石郷(1)	岩偶？	～前?	「岩版」	破片	8.4				凝灰岩		堤？	拠？	平賀95→11図3	厚3.5㎝。正中線上に口？　註15
1670	青	瀬野	岩偶？	弥中?	自然礫に線刻	完？	15.8				凝灰岩	住	低段	半？	脇野98→545	縄文前期末住居出土。「前～中期」。註16
1671	青	桧木	土版？	？	長楕円形・非KO類	欠損	5.1						段丘	拠？	横浜83→図23-4	表裏正中線挟んで連続刺突2列。厚1.2㎝
1672	青	向田(18)	土版	C2？	楕円形・4類？	4/5?	7						低段	小？	野辺04→106図6	摩耗。多重入組文渦巻文。厚さ1.2㎝
1673	青	槻ノ木	美々中空	不明	楕円？ヒレ大	一欠	7.9						段丘	拠？	鈴木82→図2-1	口尻？貫通孔。長楕円突起上に刻目列
1674	青	田向冷水	動物形	二枚?	「クマ」・頭のみ	不明	2.8				両耳表現	土坑	低？	半？	八戸06→935	馬に見える。首側面に貫通孔。目鼻孔
1675	青	田向冷水	動物形	二枚?	「クマ」・頭のみ	不明	4.3				「中空」？		低？	半？	八戸06→1067	首側面貫通孔。目鼻孔。全面刺突
1676	青	野場(1)	土版	C1	楕円形?・3類	破片	6.4						丘陵	小？	階上01→47図5	裏面剥落。目口沈線。正中線。渦巻文
1677	青	道仏鹿糠	土版	A2～?	小判形・6類	2/3?	5.3	△					中？	小？	県教11→図42-6	表裏、正中線挟んで多重平行線
1678	青	荒谷	土版	A？	小判形・5類	3/4	3.6				厚0.7㎝		低段	拠？	八戸07→12021	記載なく不明。正中線多重弧線。裏工字文
1679	青	荒谷	土版	A？	楕円形・非KO類	2/5?	6.4				厚1.5㎝		低段	拠？	八戸07→11998	記載なく不明。裏不明。正中線多重弧線逆向き
1680	青	（鳥舌内）	土面	C2古	遮光器型・断面楕	1/8	6.2		○	割口			？	？	藤沼02→図30	目横線上下刻目列。耳上刻目帯。註17
1681	青	広場	岩版	C1？	楕円形・3類	完？	5.9				泥岩		？	？	鈴木80→図6-76	側面刻目？正中線。対向C字文。厚1㎝
1682	青	寺下	正中中空	C1？	楕円形頭突起	一欠	8				側面刻目列		丘？	拠？	鈴木82→図2の5	正中線両端貫通孔。蔓状入組文
1683	青	道前	岩偶	C2？	馬淵川型・頭～胸	1/10	7.2				凝灰岩		？	？	鈴木82→図1の2	無文。首に沈線。背面削裁
1684	青	（熊原川）	岩偶	B2？	馬淵川型・頭	1/10	7				泥岩		？	？	県博97/103-195	眉3字状。顎弧線。目横線無
1685	青	（熊原川）	岩偶	BC2?	馬淵川型・右胸	1/4	7.5				泥岩		？	？	県博97/103-196	S字入組文。「沈刻浅い（未成品）」

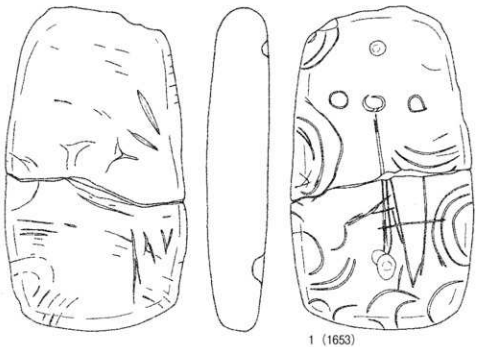
土製品類似品（報告書第２分冊図Ⅲ-4-3-10の111～113）（金子　2011a）、環状や貫通孔を持ち装身具と考えられる出土品が多数ある。

玉類の出土も多く、土製玉類は385点出土し（丸玉187、管玉62、勾玉51）（報告書第２分冊：p.326）、大洞Ｃ２～A1式期に特徴的な瓢箪小玉（金子　2006）も51点掲載されている。同じ頃の可能性が高い両端刻目長形土製勾玉（金子　2016c：p.238）も20点ほど掲載され、二点掲載されている三角玉（報告書第２分冊図Ⅲ-4-6-5の84、85）は、弧型で大洞Ｃ１～２式古期か（金子　2011a）。その他の類型も含め土製玉類が多いこと自体が、大洞Ｃ２～A1式期の出土品が多いことを示唆する可能性が高い。石製玉類は784点出土しており（丸玉759、管玉21、勾玉４）（報告書第２分冊：p.332）、未成品を加えると6,392点に及び、遺跡内で緑色凝灰岩製丸玉を中心に製作が行われていたが、ヒスイ製品も多い（100点以上）（報告書第２分冊：p.540）。

その他、漆櫛１点、サメ歯（アオザメ）８点、貝輪や骨角製装身具などが出土している。



第１図　青森県五月女萢遺跡出土品（括弧内は表の番号）
（五所川原市埋蔵文化財調査報告書第34集より）



図版出典

5：福野（1983）、6：東北考古学会（1982）、
9：和賀町教育委員会（1979）、
※その他は、表参照。

第２図　関連遺物ほか（括弧内は表の番号）

（1・5は岩版、2・7は岩偶、3は動物形、4は美々中空、6は土偶、8は土面？、9は人面付土器）

集落は、大洞A1式期の出土遺物が比較的多いのにも関わらず、ここで突然途絶しており、「大洞A´式の良好な遺物包含層が検出された内陸部にある岩井・大沼遺跡（本稿（2）第5表601－引用者註）へ集落が移動した可能性」（報告書第1分冊：p.2）は十分首肯できる。

今回の調査の前に内容確認調査が二度行われ（報告書第1分冊：p.3）、二度目の調査報告書（五所川原市教育委員会　2006）を見ることができた。土器、石器以外では、x字形土偶1点、土製勾玉（両端刻目長形）1点、有孔土製品、動物遺存体などが出土し、縄文土器の出土時期は、今回の調査と変わらないようである。

・青森県五所川原市五月女萢遺跡（第8表1586）（藤沼ほか　2002）

上に記した最初の確認調査で出土したもので、藤沼邦彦氏ほかの青森県出土土面集成によって図化報告された。

・青森県旧木造町亀ヶ岡遺跡（三田史学会　1959）

亀ヶ岡遺跡からは、実は報告書が刊行されているいずれの調査でも関連遺物が3点以上出土したことはなく、多出遺跡に含めることにはやや問題もあるが、合算すれば3点以上あり、何より紹介されている夥しい優品から、ここに含めた。

慶応義塾大学の調査は、青森市在住の医師成田彦栄氏から未発掘地点の調査を勧められたことにより行われた、一週間程度のトレンチ調査である。千葉県加茂遺跡における泥炭層との比較研究を目的としたため、丘陵裾および低地を主体とした。

掲載土器は、十腰内Ⅲ式、大洞BC2～A1式で、大洞C2式古期が最も多い。関連遺物の掲載はなく、5点の土偶は、刺突文土偶1（報告書：第61図101）、結髪土偶1（同：第62図151）、大型（遮光器系列？）土偶の足1（同：第62図152）、x字形土偶1（同：第62図102）点ほかである。概ね出土土器の傾向に一致するが、刺突文土偶は砂沢式古期である。土製耳飾1点は蓋状系列で、土器の出土傾向に合致する（金子2009a：p.178）。その他、石剣類5点、石製玉未成品含み13点（ヒスイは1点のみ。丸玉主）、木製漆塗櫛2点、玉砥石、漆器、骨角製品、木製品などが出土している。

・青森県旧木造町亀ヶ岡遺跡（第8表1587）（青森県教育委員会　1974）

バイパス建設に伴って472㎡調査された。調査地点は、慶応義塾大学調査地点より東方に約十数メートルとのことだが（報告書：p.42）、報告書では調査地点が不明瞭である（報告書：第8図）。史跡指定範囲隣接地で、低湿地である。晩期の包含層の下から後期の遺物が出土し、最下層からは前・中期の円筒土器が出土している（報告書：p.42）。後期の土器は、十腰内Ⅰ～Ⅳ式だが、ほとんどがⅢ式のようである。弥生時代中期前半の土器片も出土している。丘陵先端に近いN地点（面積164㎡）では、泥炭層は生成されず、僅かであるが、古代・中世の土坑、遺物が検出されている。縄文時代中～後期、弥生時代後半以降の遺物は出土したが、晩期の土器は出土しなかったようである（報告書：pp.28～29）。

晩期の土器は、大洞B1式が僅かに出土しているが、慶応義塾大学調査地点同様なぜか大洞B2式が見られない。やはり大洞BC2～A1式を主体とするが、砂沢式も比較的顕著に出土している。ただし、大洞A2式は見られず、大洞A´式古期もはっきりしない。

関連遺物は、土版1点のみである。3点掲載された土偶は、写真掲載が1点しかないので、不明瞭だが、結髪土偶の頭部1点（報告書：第49図3）（大洞A2～A´式古期？）（金子　2004）、大洞C2式期の小型土偶2点である。小型土偶のうち1点（報告書：第49図3）は、個頭部に突起列が並ぶ特徴等北海道出土土偶に似る（金子　2012a：p.7）。石剣類は3点出土したそうである。

その他、総数は不明だが（完成品は3点）、未成品を中心に石製玉類が多数出土している（丸玉主

体。ヒスイはない？）。特筆すべきことにガラス玉１点が発見され、「伴出土器から大洞A´式期と考えられる」（報告書：p.163）（今で言う砂沢式期であろう）。

・青森県旧木造町亀ヶ岡遺跡（第８表1588）（青森県立郷土館　1984）

学術調査で、低湿地（沢根地区）40㎡、丘陵部（雷電宮地区）54㎡調査した。低湿地では、他に近江野沢地区も調査したが湧水著しく中止している。ただし、出土品は報告され土器の拓影図が掲載されている。沢根地区と近江野沢地区は、上記慶應義塾大学の調査区である。雷電宮地区では、縄文時代晩期の土坑墓群が検出された。

関連遺物は、土版１点のみで沢根地区から出土している。沢根地区の出土土器には大洞Ｃ１～A´式が見られ、大洞Ｃ１～A1式が主体で、晩期前葉と思われるものは僅かである。沢根地区からは、土偶４点、石剣類３点、石冠１点出土している。土偶は３点が刺突文系だが、大洞A2式期までに収まりそうである。その他、緑色凝灰岩製の玉４点、その未成品や原石、木製櫛１点が出土している。

雷電宮地区では、十腰内Ｉ（大津？）式、大洞BC2～A1式土器が見られ、大洞Ｃ１式が最も多い。土坑から、ヒスイ製丸玉１点、大型遮光器土偶の乳房片１点、ｘ字形土偶１点出土し、遺構外から、土偶１点、弧状土製品１点、五月女萢遺跡出土品に似た菱形環状土製品類似品１点、石製玉類未成品、原石が出土している。弧状土製品は第六段階（大洞A1式期）か（金子　2009b）。

・青森県つがる市亀ヶ岡遺跡（第８表1589）（つがる市教育委員会　2019）

水道管敷設工事や耕作深度等の各種開発行為に備え、また将来の史跡追加指定も目指し、丘陵上を中心に1,535㎡確認調査された。丘陵上でまた土坑墓群は検出されたが（これまでの総数110基）、竪穴住居跡は晩期前半の１～２棟に留まっている。なお、「総括報告書」として、これまでの調査結果もまとめられている。

土版が出土した亀山49-1・49-2地点（157㎡）では、大洞A1式～砂沢式土器、土偶１点（足のみ）、緑色珪質凝灰岩製の丸玉１点、同勾玉未成品１点、ヒスイ原石１点が出土している。

その他の調査地点では、関連遺物の出土はなく、土坑墓を中心に石製丸玉（ヒスイ２点、その他は緑色珪質凝灰岩）が出土している程度である。

・青森県旧木造町亀ヶ岡遺跡（第８表1590）（鈴木　1979）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、青森県の「県重宝」に指定された60点の紹介である。35点の土器は、大洞BC2～A1式で、正中線中空土版１点のほかに、ｘ字形土偶１点、石剣類２点、独鈷石１点、石製勾玉３点（ヒスイ２、メノウ１）、石製丸玉８点（全てヒスイ）、木製漆塗櫛の破片１点、ボタン状貝製品１点、札状垂飾品２点（素材？）、ヘアピン等骨角製品５点が紹介されている。

・青森県旧木造町亀ヶ岡遺跡（第８表1591～1592）（鈴木　1980）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩版・土版の資料紹介である。本稿では原則として稲野（1983）で取り上げられている確実に晩期である狭義の「岩版・土版」（ＫＯ類）に限って資料とした。

・青森県つがる市亀ヶ岡遺跡（第８表1593～1594）（国立歴史民俗博物館　2015）

青森市在住だった田中忠三郎氏から購入もしくは入手したコレクションの一部の報告である。

亀ヶ岡遺跡出土品のうちの関連遺物は、岩版２点である。もう１点「岩版片の可能性が考えられる資料」（報告書：p.145）があるが、実測図と写真を見る限り首肯できないので割愛した。

土偶は14点あるが、３点は判然としないもの、１点は後期前葉である。大型、小型遮光器系列、大洞A1式期の結髪土偶などがある。石剣類は７点掲載されている。クラゲ状土製耳飾（環状）１点、

小型臼状でよく研磨された土製耳飾１点、C2ネジ形土製耳飾（角型で大洞A1式期？）１点見られる（金子　2009a）。土製丸玉１点、石質不明の勾玉１点、緑色凝灰岩製丸玉３点（未成品の一つは雫形？）掲載されている。蛇紋岩製の根付型（鈴木　2004）大珠の未成品１点がある。

・青森県板柳町土井Ⅰ号遺跡（第８表1595～1597）（板柳町教育委員会　1993）

上水道貯水槽増設に伴って362.5㎡調査され、縄文時代晩期を中心とした遺物包含層が検出されたが、江戸時代の盛土や時期不明の井戸跡も確認されている（報告書：pp.10～11）。調査後20年を経て作成された写真を中心とした概報で、どの程度全容を反映しているか不明である。実測された資料以外も写真図版に掲載されているが、本稿のこれまでの方針に則り、表には図のあるものだけ示した。出土量や出土点数は記載がなく不明である。以下には写真のみの資料も含める。

掲載土器は、大洞BC2～C１式が多く、大洞C２式はやや少なめ、大洞A1式は少ない。後期後葉～大洞B2式も少ない。粗製土器に片口が認められる。（報告書：第９図22）

掲載された関連遺物は、岩偶１点、岩版９点、線刻礫２点（報告書：ＰＬ－58の391も）である。岩版は、稲野（1983）の第２～４類で、出土土器の傾向を反映している。「石質はすべて緑色凝灰岩」だそうである（報告書：p.20）。

土偶は23点掲載され、屈折像Ｂ類やｘ字形土偶など大洞Ｃ２式期の土偶が多くて（10点）、大洞BC2式期の大型遮光器土偶は見当たらず、大洞BC2式期には異形の大型遮光器土偶もどきが見られる（報告書：第13図42）。石剣類12点、石冠１点掲載されている。装身具は、赤色塗彩された土製耳栓１点（蓋状系列）（金子　2009a）、楕円形のボタン状石製品類似品１点（報告書：ＰＬ－60の397）などがあり、津軽地方に多い弧状土製品（金子　2009b）類似の大洞Ｃ２～A1式期の土製品１点（報告書：ＰＬ－56の384）、菱形環状製品（金子　2010c）に似た石製品？１点（報告書：ＰＬ－61の403）なども掲載されている。石製玉類は、主に丸玉だが、10点以上掲載されており（報告書：ＰＬ－63の423～426、ＰＬ－64の433）、緑色凝灰岩や硬玉製があるそうである（報告書：p.20）。

・青森県青森市宮田（第８表1598～1601）（鈴木　1980）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩版・土版の資料紹介である。広義の「岩版・土版」で、後期前葉の三角形岩版・土版や円盤状石製品等も含まれており、本稿では原則として稲野（1983）で取り上げられている確実に晩期である狭義の「岩版・土版」（ＫＯ類）に限って資料とした。

なお、現在は「長森遺跡」として登録され、長森遺跡の発掘調査による出土資料については、本稿（４）第７表で扱っている。

・青森県青森市玉清水遺跡（第８表1602～1607）（鈴木　1980）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩版・土版の資料紹介である。広義の「岩版・土版」で、後期前葉の三角形岩版・土版や円盤状石製品も含まれており、本稿では原則として稲野（1983）で取り上げられている確実に晩期である狭義の「岩版・土版」（ＫＯ類）に限って資料とした。

古くから著名な遺跡だが、出土品の実測図の掲載された報告書はほとんどないようで、青森市教育委員会が昭和42（1967）年に刊行した概報にも土器の図しかない。『青森県史』（青森県　2013）によれば、晩期前半に偏っているとのことで半拠点集落と見なした。

・秋田県旧琴丘町高石野遺跡（第８表1608～1616）（琴丘町教育委員会　1983）

畑の整地中に確認された埋蔵文化財による緊急調査で1,276㎡調査され、縄文時代後期末～晩期中葉の集落跡（捨て場）が主として発見された。報告書は「全出土遺物の１割にも満たない洗浄遺物の

中から抽出した遺物による概報」であり（報告書：p.27）、図はあっても個々の記載はほぼなく、遺構についても同様で、総頁30頁程度の薄いものである。

その後洗浄は進み本報告という段になったが、考古学の素養のある担当者に恵まれなかったようで、「写真と実測一覧表による報告書」となり（琴丘町教育委員会　1992：p.127）、文章記載はなく概報が再録されただけである。「実測一覧表」はほぼ計測値のみで、第８表1608の土面の付着物に代表されるように概報と合致しない点もあり、正直どれだけ信用してよいか図りかねるため、本稿では原則として概報にしたがって表にした。なお、遺物写真には、概報にないものもあるが、土器や石剣類が僅かに付け加えられた程度で、あまり変わらない。

「出土遺物の大部分を占める土器類の凡そ９割が未洗浄のまま」の概要だが（報告書：p.16）、僅かな縄文時代中期土器（円筒上層ｂ式など）を除けば、ほとんどが後期末瘤付土器第Ⅲ段階～晩期後葉大洞A1式で、晩期「後葉のものは少ない」ようである（同）。これは本報告でも変わらない。どこにピークがあるのかは、報告書の性格により掴むのが難しい。

掲載された関連遺物は、土面１点、岩版？１点、線刻礫２点？、土版１点、美々４型中空動物形土製品４点？で、本報告でも変わらない。岩版？の裏面には、同時期の土偶と同様の入組文が施され（金子　2016b）、興味深い。美々４型中空動物形土製品が４点？も出土しているのは日本海側では珍しく、多出するのは晩期前～中葉の岩手県北半部に多い（本稿（１）の第２表手代森、小田遺跡、第３表安堵屋敷遺跡、（３）の第６表山井、上平Ⅱ遺跡、（４）第７表川目Ａ）。本稿第８表の屋敷遺跡も同様だが、例外的に、秋田県堀ノ内遺跡（本稿（４）第７表）、福島県宮畑遺跡（同）でも多く出土している。堀ノ内遺跡は岩手県中部から60㎞程度で、その影響を推測できるが、宮畑遺跡は遠い。ただし変異も大きく、むしろ関東地方の影響を考えるべきかも知れない。

土偶は12点掲載され、本報告には概報と異なるｘ字形土偶が１点追加されている（琴丘町教育委員会　1992：p.49上）。時期に偏りがあり、後期末～晩期初頭と晩期中葉大洞Ｃ２式期にほぼ限られている。したがって、大洞Ｃ２式期の大型遮光器系列は見られるが、典型的な遮光器土偶はない。

石剣類は、本報告で比較的多く追加され12点掲載されている。石製丸玉も同様で６点ある。「石冠」も同様だが、全て磨耗した自然礫に見え、概報に実測図が掲載されたものについても同様である（報告書：p.27）。「独鈷石」１点も独鈷石には見えない（概報：p.25）。

土製耳飾も１～２点追加されているようだが、環状無文を主体とし全て後期末～晩期初頭のようである。長菱形の菱形環状石製品（大洞B2～Ｃ１式期）（金子　2010c）らしきものが出土している。なお、石錘、土錘が出土していて、立地に基づいた生業が推測される。

・青森県八戸市是川中居遺跡（第８表1617）（鈴木　1980）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩版・土版の資料紹介である。本稿では原則として稲野（1983）で取り上げられている確実に晩期である狭義の「岩版・土版」（ＫＯ類）に限って資料とした。

なお、是川中居遺跡の発掘調査による出土資料については、本稿（３）第６表で扱っている。

・青森県八戸市是川遺跡（第８表1618）（国立歴史民俗博物館　2015）

青森市在住だった田中忠三郎氏から購入もしくは入手したコレクションの一部の報告である。

収集当時は「是川石器時代遺跡」で、現在のように幾つかの遺跡に分かれていなかったため、どの遺跡から出土したものか不明だが、晩期であることから是川中居遺跡の可能性が高いとされる（報告：p.265）。是川中居遺跡の発掘調査による出土資料については、本稿（３）第６表で扱っている。

関連遺物は岩版１点である。土偶は６点で、後期後葉の土偶の脚、大型遮光器土偶の腰片、屈折像

土偶の腰（図112は天地逆）、結髪土偶の左胸などがある。丸みを帯びた独銛石１点掲載されている。

・青森県旧名川町虚空蔵遺跡（第８表1619～1620）（名川町教育委員会　1978）

３点以上関連遺物が出土した調査報告はないが、これまでの出土履歴と遺跡の格、地域性から、多出遺跡として扱うことにしたい。

中学校校庭拡張工事に伴って105㎡調査され、近世末～近代の人骨２体、奈良時代の竪穴住居跡１棟、縄文時代中期前葉のフラスコ状土坑２基、後期後葉～晩期中葉の土器埋設遺構７基などが検出された。僅かだが、縄文時代前期、後期前葉の土器も出土している。主体を占める晩期の掲載土器は、大洞B2～A1式で、量の多寡は反映されていないが大洞Ｃ２式が多かったようだ（報告書：p.58）。

関連遺物は、岩版１点、土版１点である。土偶は８点出土し、大型遮光器系列と推測されるものが３点（註２）、屈折像Ｂ類が１点あり（報告書：第29図20）、後期前葉土偶が１点ある（報告書：第29図24）。したがって、時期の特定できないものには後期前葉等他時期のものが含まれている可能性があるが、石剣類は４点掲載され、円盤状石製品は４点出土し、装身具類の掲載はない。

古くから著名な遺跡で、岩偶や鼻曲がり型土面、美々４型中空動物形土製品（亀形土製品）なども出土している（青森県　2013：p.535）。

・青森県旧名川町虚空蔵遺跡（第８表1621～1622）（青森県立郷土館　1997）

主に表採未報告資料の集成で、所蔵機関は様々である。虚空蔵遺跡では、他に、縄文時代前期末、後期前半土器片、大洞B2～A1式土器、石刀１点、円盤状石製品２点などが掲載されている。

・青森県旧名川町虚空蔵遺跡（第８表1623）（福田　1988）

福田友之氏の鼻曲がり土面集成による。

・青森県旧名川町平遺跡（第８表1624～1625）（鈴木　1982）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、亀形土製品ほかの資料紹介である。上記虚空蔵と同一遺跡である。

・青森県三戸町杉沢遺跡（第８表1626）（青森県立郷土館　1997）

第５表（（２）掲載）で収集漏れの資料である。

・青森県旧南郷村右ェ門次郎窪遺跡（第９表1627～1629）（青森県教育委員会　1982）

立地、土器の出土量等、土偶の出土点数および形態（大型遮光器系列でない）から、それほどの遺跡とは思えないが、それに比して関連遺物は多めである。

丘陵上の比較的急な南東斜面に立地する。八戸自動車道建設に伴い3,700㎡調査され、縄文時代晩期中葉を中心とした集落跡（竪穴住居４棟）、炭窯４基検出された。段ボール67箱分の遺物が出土したそうだが（報告書：p.30）、石器は総数72点と（同：p.139）少なく、大部分は土器、それも晩期の土器と推測される。僅かな縄文時代前期後葉、中期末～後期前葉、須恵器の破片もある。

晩期の土器は、大洞B1式新？～BC1式、大洞Ｃ２～A1式で、大洞Ｃ２式がほとんどを占め、次いで大洞B2式で、それ以外はごく僅かな掲載である。大洞BC2式がほぼ全く見られないのは珍しい。

関連遺物は、土版２点、正中線中空土版１点で、いずれも大洞Ｃ２式期と推測され、土器の出土傾向に合致する。土偶は１点のみ掲載され（報告書：第165図１）、大洞Ｃ２式期の屈折像Ｂ類というよりは、ただの“ガニ股”土偶である。石剣類（石刀）、石冠は、それぞれ１点のみの出土である。その他、石製丸玉１点（蝉緑凝灰岩）がある。土製丸玉１点が炉内から出土し、同様の貫通孔のないものが１点と棒状焼成粘土塊が同じく炉内から出土している。指紋付き焼成粘土塊１点も見られた。

・青森県田子町野面平遺跡（第８表1630～1638）（青森県立郷土館　1997）

主に表採未報告資料の集成で、所蔵機関は様々である。野面平遺跡の関連遺物では、岩偶４点、岩

版４点、美々４型動物形土製品？１点（第２図４）が掲載されている。第２図４の円文は、岩版等にしばしば見られる（第２図５）。他に、後期末～大洞Ｃ１式土器、土偶６点、石剣類４点、装身具類などが掲載されている。土偶のうち１点は、中期後葉の板状土偶で、３点は小型遮光器土偶である。装身具類では、鼓状土製耳飾（大洞BC2式期を中心にした晩期前半）（金子　2009a）１点、鐲状土製品１点（除刻2b類＝大洞Ｃ１式新期）（金子　2011a）、菱形環状石製品（第Ⅱ～Ⅲ段階中間的＝大洞Ｃ２式中期？）（金子　2010c）、土製丸玉１点、石製勾玉２点、石製丸玉３点などが掲載されている。

・岩手県旧大迫町屋敷遺跡（第８表1639～1643）（大迫町教育委員会　1988）

調査原因は不明だが、水田２面の全面調査で、調査面積は900㎡程度である。縄文時代後期末～晩期後葉の集落跡、中世の竪穴建物跡１棟発見されたが、開田等により残存状態は良くなく、１棟のみ検出された竪穴住居跡も、壁は確認されていない。

出土土器は、僅かな縄文時代中期後葉、後期前葉土器片等を除いて、後期末瘤付土器第Ⅲ段階～晩期後葉大洞A1式がほとんどを占めるが、掲載土器では、どこにピークがあるのかはっきりしない。

関連遺物は、土面？１点、人面突起？１点、正中線中空土版？？1点、美々４型中空動物形土製品２点である。

“土面？”（第２図８）は、報告書中では「仮面形土製品」と「ミニチュアのもので、顔につける大きな仮面と区別して」（報告書：p.65）呼称されている。ただ、「衣服に縫い付けたり額に付けたり」（同）と、仮面的な用途を否定しているわけではなく、両側の貫通孔は、これを支持するものであろう。問題は時期で、他の「仮面形土製品」が全て晩期中～後葉なのに対し、本例は晩期初頭の可能性が高いため（報告書：p.38）、晩期前葉まで下ることはなく孤立的存在となってしまうことである。

磯前順一氏は、本例を遮光器型土面の一例として位置づけ、北上川流域の類例として岩手県旧和賀町七折遺跡例を掲げるが（磯前　1994：第６図１）（第２図９）、七折例は人面付注口土器の一部であり、類例として岩手県平泉町泉屋遺跡例がある（本稿(２)第５表571＝第１図１）。報告者の中村良幸氏が「裏側に折れた痕跡があるため土器の突起などになっていた可能性もある」（報告書：p.65）といみじくも指摘するように、本例も人面付注口土器の一部と見なせば孤立的存在でなくなるが、問題は左右の貫通孔である。両耳を示すような突起のすぐそばにあり、耳孔とみなしてしまえば問題はない。直後の時期の大型遮光器土偶の耳突起も耳孔表現を持つのが普通である。しかし、耳孔にしては大きく、機械的に開けているように見えるのが気になる。

“人面突起？”は、報告書中で「動物形土製品」あるいは「動物把手」と呼ばれているものである。「上から見ると人間の顔にも見えるが、横や正面から見るとクマかイノシシを模したものと考えられる」からである（報告書：p.38）。ただ、横から見てそう見えるのは「土器などの把手あるいは突起となっていた」（同）ためと筆者は考え、動物の特徴が現れやすい鼻～口の表現がかけ離れている点と類例の多寡から、ここでは“人面突起”として扱った。

“正中線中空土版”とみなしたものは、報告書では「亀形土製品」の仲間として位置づけられているもので、この点では特に問題はない。文様構成・意匠も、正中線を隆帯で表現し、その両脇に渦巻文を施していて、類例も多くある（金子　2017b：第２図11～第３図）。しかし、他のものとは雰囲気が異なり、全く別の土製品の可能性も高いと言わざるを得ない。

出土土偶は、34点32個体で、全て掲載されている。大型、小型遮光器土偶や結髪土偶もあるが、後期末～晩期初頭の土偶が多数を占める。屈折像土偶もこの間に位置づけられるものであろう。石剣類は30点、円盤状石製品11点、装身具では、菱形環状石製品１点（長菱形＝大洞B2～Ｃ１式期）（金子　2010c）とその未成品らしきもの、土製耳飾２点（１点は小型クラゲ状、１点はC2ネジ形丸型＝大洞

C２式新期？）（金子　2009a、2010d）などが出土している。

・岩手県旧衣川村東裏遺跡（第８表1644～1648）（岩手県教育委員会　1981）

東北自動車道建設で約1,840㎡（幅約30m）調査され、晩期の遺物包含層が２箇所検出された。A地点は晩期前半、B地点は晩期後半の遺物を主体とするとのことだが（報告書：p.14）、報告は、地点ごとでなく種類ごとになされている。ダンボール箱100前後の遺物が出土した。その他、「歴史時代」の暗渠排水路跡が検出され、土師器、須恵器、陶磁器、石臼が出土したそうである（報告書：p.16）。

掲載土器は、大洞B1式古期らしい破片も見られるが（報告書：第29図１）、ほぼ大洞B2～A2式で、大洞BC2～A1式が多く、その前後は少ない。

関連遺物。岩版は、図示は４点のみだが45点出土したそうである（報告書：p.219）。図示されているものも小片ばかりで、数字どおりに受け止めてよいものかどうか。「土版と思われるもの」は、一般的なものではないが、側面の沈線や貫通孔が土版と共通する１点は資料に含めた（第８表1648）。

土偶は約34点出土しており、当該期の主だった形態は一通り見られるが（金子　2010a：pp.23～24）、ｘ字形土偶は出土していない。石剣類は59点（報告書：第60表）、円盤状石製品は309点（同：第62表）出土したようである。土製耳飾は３点出土し（無文？断面く字形環状、鼓状＝大洞BC2式期前後？、C2ネジ形＝大洞Ｃ２～A1式期）、そのほか弧状土製品１点（報告書：第70図３）（第二段階＝大洞BC1～2式期）（金子　2009b）がある。

４．悉皆収集調査

・青森県旧三戸村宇鉄遺跡（第9表1649～1650）（宇鉄遺跡発掘調査会　1996）

学校建設に伴って調査され、本報告書はB地区660㎡についてのもので、晩期後半の集落跡が検出され多量の遺物が出土した。

土器は、僅かな縄文時代中期前半、後期前葉十腰内Ⅰ式、弥生時代中期前葉を除けば、ほとんど全て大洞Ｃ１～A'式古期で、大洞A1式が最も多く、それ以降は少ない。

関連遺物は、岩版１点、土版１点で、土器文様こそ施されるが、通常と大きく異なる。「岩偶」とされるものが１点あるが、根拠が不明で人には見えず首肯できないので割愛した。「鈴形土製品」は、中空の卵形をした土製品で、内部に小石が１～２個入っていて振るとカラカラ鳴るもので、１点出土している。全面縄文が施され、気になるのは結髪土偶などに共通する６字文が見られることである。

土偶は58点ほど出土しているそうだが（報告書第２分冊：p.64）、掲載は44点である。58点に含まれるのかもしれないが、遺構内からも１点出土している（十腰内Ⅰ式期の１点除く）。掲載品を見る限り、結髪土偶を中心にしていて出土土器の傾向と齟齬はないが、大型遮光器系列土偶が少ない。

石剣類は約40点、長い独鈷石が１点出土している。装身具は多く、玉集嵌土製品８点、石製玉類は281点出土しているそうで（報告書第２分冊：p.155）、ヒスイはそれほど多くなく緑色凝灰岩が主体のようである。中にボタン状石製品１点が含まれており（報告書：第148図145）、第Ⅲａ段階（大洞Ｃ１式期）か（金子　2010b）。土製玉類の総数は不明である。両端刻目長形土製勾玉（金子　2016c：p.238）が１点、三角玉１点（Ⅰａ段階＝大洞Ｃ１～Ｃ２式古期）（金子　2011a）、瓢箪小玉27点（金子　2006）掲載されている。サメ歯（アオザメとホオジロザメ）も出土しているそうだが、円盤状石製品は出土していないようだ。この地域の拠点的な集落に共通し石製玉の製作を行っていたようで、原石、未成品が多数出土しているそうである。赤色顔料を精製した鉄鉱石も多数出土してい

る。

・青森県旧金木町千苅（1）遺跡（第9表1651）（青森県教育委員会　1995）

主要地方道改良事業に伴い2,000㎡（幅約12m）調査され、大型住居跡2棟を含む縄文時代晩期の集落跡、近世墓地が検出された。本遺跡の縄文時代晩期の格を評価するのに悩むのは、大型住居が検出されながら、出土土器は、大洞BC2～C1式もあるが、大洞C2～A1式（特にA1式）に著しく偏っていることで、出土土・石製品も僅かである。そのため、"小規模集落？"とせざるを得なかった。なお、他の時代・時期の土器は掲載されていない。

関連遺物は土面1点のみである。土偶は2点で（金子　2015a：第7表313、3314）、両方とも土器の多出時期に合致するが、1点は肩パット土偶の屈折像姿態という類例の少ない土偶である（報告書：第18図23）。石剣類13点、石冠1点、円盤状石製品8点、雫形のヒスイ玉1点などが出土した。

・青森県五所川原市観音林遺跡（第9表1652）（弘前大学　2004）

畑地造成事業に伴い十次にわたって「全体で重複部分も含めて約3,200㎡」（青森県　2013：p.142）調査され、縄文時代前～晩期の集落跡、平安時代の集落跡が発見された。「晩期の遺構は竪穴住居跡1軒」（弘前大学　2004：p.167）のみで、後期前～中葉では、竪穴住居跡2棟と土坑2基検出されている（青森県　2013：pp.142）。報告書は各次で出されているが、筆者の周辺にはほとんど見られず、岩手県立博物館でも第五次と第七次しか寄贈されていない。それを見ると、文章と写真が中心で、実測図は土器しかない。ここでは、弘前大学人文学部日本考古学研究室で図化した報告（弘前大学　2004）と『青森県史』（青森県　2013：pp.142～143、pp.388～391）のまとめに則って記載する。

本遺跡は、土器や土偶が多量に出土していることもあり、関連遺物多出遺跡の可能性もあるが、上記のいずれの文献にも「関連遺物」は表に示した岩偶しか言及・掲載されていないようである。

弘前大学の報告は、「後・晩期の石刀類、晩期の土偶・岩偶、晩期の大洞C1式・C2式・C2－A式土器である。主要な石刀類と土偶・岩偶はすべて実測図を完了したが、土器類は文様があるものにかぎっても全体の4分の1しか実測図・文様の展開図が完了していない」（報告書：p.167）段階のものである。調査で出土した「土器は大洞C1式から大洞A式までのものが多い」そうで、掲載土器も同様だが、大洞BC式土器も出土しているらしい（同上）（青森県　2013：p.389）。

報告の関連遺物は岩偶1点のみである（第2図2）。

土偶は20点実測され、大小遮光器系列、結髪土偶もあるが、主体は、屈折像B類（8点）、x字形土偶（6点）で、屈折像B類は脚の屈曲の弱いもの、x字形は先端の彫去を伴わない単純な形で、北海道のものに共通点が多い。時期は出土土器の傾向に符合する。石剣類は19点実測され、基部に文様が描かれたものが4点あり、時期は出土土器の傾向に概ね符合するようだが、晩期前半と推定されたものが1点、後期前半が2点ある（報告書：p.170）。

『青森県史』では、この他、土製腕輪1点、石製玉類11点掲載されている（青森　2013：p.391）。

・青森県鰺ヶ沢町沼ノ沢（第9表1653）（鈴木　1984）

鈴木克彦氏による資料紹介で、遺跡名は不明である。「青森県内では最大の岩版であるばかりか、現形―本文のまま。引用者註－をとどめる岩版としては日本でも最大規模にあたるものと思われる」（p.98）（第2図1）。裏面の文様は、発見時にスコップ等により摩滅剥離して不鮮明である。鈴木氏は、円文を正中線で結ぶ意匠が大洞BC式期によく見られること、裏面に入組三叉文らしき痕跡が認められることなどから、大洞BC式とするが、表裏とも縁辺部に多重弧線が見られ、典型的な5類（稲野　1983：第5図）であり、晩期後葉であろう。

・**青森県鰺ヶ沢町大曲遺跡**（第９表1654～1655）（木村　1989）

青森県立郷土館による学術調査である。調査面積は不明だが、25㎡程度のようである。遺構の検出はなかったようだが、ほぼ砂沢式の単純資料が得られている。そのため、本来なら本稿（２）（2017年）第４表の補遺とすべきだが、小規模な調査のため、あえて別に扱わなかった。

土器の出土量は不明だが、砂沢式のみのようで、遠賀川系とされる土器片も含まれている。ハケメの上に縄文を施すという、伝統文化を考える上で興味深い事象が見られる。

関連遺物は、土版１点、動物形突起である。動物形突起は、表に示したもの以外に、写真だけ掲載されている（報告：写真６の２、３）浅鉢（高坏？）大波状口縁に付くものがある。両者にそれぞれ二つの動物形突起が見つかっているようで、調査で出土したのは合計４点のようである。

その他、スプーン状土製品１点が出土している。

・**青森県青森市沢山遺跡**（第９表1656～1657）（鈴木　1980）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩版・土版の資料紹介である。広義の「岩版・土版」で、後期前葉の三角形岩版・土版や円盤状石製品等も含まれており、本稿では原則として稲野（1983）で取り上げられている確実に晩期である狭義の「岩版・土版」（ＫＯ類）に限って資料とした。

なお、沢山（１）遺跡の緊急調査による出土資料については、本稿冒頭参照。

・**青森県青森市三内遺跡**（第９表1658）（鈴木　1980）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩版・土版の資料紹介である。広義の「岩版・土版」で、後期前葉の三角形岩版・土版や円盤状石製品等も含まれており、本稿では原則として稲野（1983）で取り上げられている確実に晩期である狭義の「岩版・土版」（ＫＯ類）に限って資料とした。遺跡名は鈴木（1980）による。

・**青森県青森市細越遺跡**（第９表1659）（青森県教育委員会　1979）

ほ場整備事業の用水路部分144㎡（幅約５ｍ）調査され、晩期の遺物包含層が検出された。西側の丘陵地には朝日山遺跡群という当該期墓域が見られ、有機的な関連が窺われる。比高差約８ｍの河岸段丘下の沖積平野に立地しており、複合する平安時代の竪穴住居跡からは腐食しきらない「建築遺材」が検出された。その他、中世（鎌倉、室町）の遺物（珠洲焼擂鉢口縁部片？、古銭）も出土している。

段ボール約70箱分の土器が出土し、大洞BC2～A1式が見られ、大洞Ｃ１～２式が主体で、次いでBC2式で、A1は極めて少ない（報告書：pp.10～11）。

関連遺物は、美々４型中空動物形土製品１点のみである。16点出土したとされる土偶のほとんどは、大洞Ｃ２式期で、ｘ字形土偶が１点出土した以外は、屈折像Ｂ類が多く、大型遮光器系列土偶は１点もない。「陰陽形土製品」と称された大洞Ｃ２式の文様を持つ土冠が１点出土している。１点出土した土製耳栓は、蓋状系列で大洞Ｃ１～A1式期の可能性がある（金子　2009a）。その他、石製丸玉３点（ヒスイ２、緑色凝灰岩１）、土製「勾玉」１点は、長さが５cm以上あり、勾玉ではないかもしれない。石剣類は写真図版で10点掲載されている。

・**青森県青森市朝日山（１）遺跡**（第９表1660）（青森県教育委員会　1994）

変電所新設に伴って約30,000㎡調査されたとのことだが（青森県　2013：p.352）、この中には調査中に分割された（青森県教育委員会　1993：p.2）朝日山（３）遺跡等も含まれるのかもしれない。遺跡は中位段丘から丘陵に広がり、主として平安時代の集落が中位段丘から、縄文時代晩期（後期も？）の墓地が丘陵地から発見され、縄文時代中期後葉榎林式期の竪穴住居跡が１棟検出された。

丘陵の墓地で捨て場は検出されず、出土遺物は少ない。墓と目される土坑から出土した土器は、縄文時代前期中葉？、中期前～中葉、後期前～中葉、後期末、晩期前～後葉（弥生時代前期末も？）、弥生時代中期で、最も多いのは十腰内Ⅱ式、ついで大洞Ｃ１式である。遺構外でも、早期中葉、前期末、中期後葉、後期後葉が僅かに追加されるだけで概ね同様の出土傾向だが、掲載土器の割合は、後期中葉が少なく、中期前葉、晩期後葉（大洞A1式）が多めである。

関連遺物は、動物形土製品１点のみである。晩期の確証はないが、他の土・石製品のほとんどが晩期であるため資料に含めた。脚と尾が差し込み式になっていて盆に飾るナスで作る牛等に近いのが気になる（第２図３）。遺構外からは、他に、結髪土偶の腰の破片、土製丸玉３点などが出土している。石製品の出土はないようで、報告書で「石棒」としているもの（報告書：p.100）は石棒ではないと思われる。土坑からは、弧状土製品２点（両方とも第二段階＝大洞BC1～2式期？）（金子2009b）、ボタン状石製品１点（第Ⅱｂ段階＝大洞BC2式期）（金子　2010b）、石製玉類37点（勾玉19？　ヒスイ36）で、勾玉の未成品らしきものも１点出土している。

北側に隣接し中位段丘に立地する朝日山（２）遺跡でも、晩期中葉の楕円形墓を主体とした墓地が確認されているが、関連遺物の出土はないようである（青森県　2013：p.355、pp.358～361）。なお、前述の細越遺跡は東側に隣接している。朝日山（１）遺跡の西側に隣接し丘陵に立地する朝日山（３）遺跡でも、関連遺物は出土していないようだが、晩期中葉土器の散布が見られる（青森県教育委員会　1997）。

・青森県旧浪岡町羽黒平遺跡（第９表1661）（藤沼ほか　2002）

青森県立郷土館蔵品（風韻堂コレクション）で、藤沼邦彦氏ほかの青森県出土土面集成によって報告された。羽黒平遺跡は現在三遺跡に分かれ、羽黒平（３）遺跡が有力だとする（報告：p.126）。

・青森県黒石市石名坂遺跡（第９表1662）（黒石市教育委員会　1987）

宅地造成等により100㎡調査され、古代の集落跡、縄文時代晩期を主とする遺物包含層が検出された。土器は70×43×13cmの平箱で約20箱出土し、大部分は晩期の土器である（報告書：p.41）。

縄文土器では、後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晩期末（大洞A´式）のほか、前期末、後期前～中葉も掲載されているが僅かである。後期末～晩期末でも偏っており、大洞A1式が大半を占め、次いで大洞BC2式で、それ以外は少ない。

関連遺物は、岩版１点である。その他、直径約７cm、厚さ約2.3cmの紡錘車状の石製品に線刻されたもの１点、未貫通孔を持つ板状石製品の欠損品１点も、当該期に属する可能性はあるが、調査面積が狭く他時期や他時代の遺物も出土していて帰属時期が不確かなので、割愛した。

大洞BC2式期～大洞C1式古期の小型遮光器土偶が１点出土している。もう１点出土した土偶は比較的大きな板状で、時期を特定しにくいが貫通孔を持つことから中期前半以前か。第２号土坑から出土した土製耳栓１点は、その大きさと形状から晩期の可能性もなくはないが、後期前～中葉であろう。写真図版18には円盤状石製品が１点掲載されている。石剣類等の掲載はない。

・青森県弘前市樽の木遺跡（第９表1663）（鈴木　1980）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩版・土版の資料紹介である。本稿では原則として稲野（1983）で取り上げられている確実に晩期である狭義の「岩版・土版」（ＫＯ類）に限って資料とした。遺跡名は鈴木（1980）によるもので、詳細は不明である。

・青森県弘前市大森勝山遺跡（第９表1664）（弘前市教育委員会　2010）

岩木山麓の開発事業に伴い1959（昭和34）年度から1961（昭和36）年度まで行われた発掘調査で、

大型竪穴住居跡や環状列石が検出された。公有化後国史跡指定を目指して確認調査が行われ（調査面積2,094㎡）、併せて出土遺物の再整理が行われ、不掲載遺物の一部も報告された（第９表1664）。ただし、残念ながら、これらの遺物には出土位置が不明なせいか観察表が付されていない。

「巨視的には遺跡は緩やかに傾斜する火山麓扇状地に所在することとなる。しかし、遺跡の立地する微地形は、小河川に挟まれた半ば独立した舌状台地を呈しており、周辺の地形とはやや異なった様相を示している」とのことで（報告書：p.11）、環状列石が築かれる必然性があったのかもしれない。

第９表1664は、前回調査分の不掲載遺物なので、前回調査既報告遺物（岩木山刊行会　1968）も含めて概要を示す。前回調査は開発に伴う事前調査だが、現在のような悉皆調査ではなく、"あたり"をつけてトレンチを入れ、当たったら広げていくという学術調査式である。「大きな擂鉢状のくぼみ」から大型竪穴住居跡を検出し（第１次調査）、第２次調査は、その周囲を拡張し、住居の関連情報を集めるため台地上に端から端まで貫く長さ180mのトレンチが入れられた。この調査で配石遺構が発見され、「平坦部のところどころに、かすかに露頭している石に疑問がもたれ」て環状列石の存在が推察され（岩木山刊行会　1968：p.271）、発見に繋がったのである（第３～５次調査）。その後、環状列石下部、内部、外周部と調査された。報告は、出土遺物も含め、調査ごとに別々に行われ、報告者による違いが大きい。以下、全ての報告を一括して示す。なお、前回報告では、大型竪穴住居跡出土遺物の多くは写真のみの掲載だったが、今回そのほとんどが図化されている（報告書：図14～15）。

出土土器は、掲載土器を見ると、晩期前半が主で、縄文時代中期前葉、後葉、後期前～末があり、後期末も比較的多い。晩期は、大洞B1式が目立つが、環状列石外周部では大洞ＢＣ式が多かったようである。大洞B2、Ｃ１式は、それなりに見られる。

その他の遺物も全容は不明だが、関連遺物は今回報告された岩版１点のみのようである。前回報告（岩木山刊行会　1968）p.290に記載されたものに相当するなら、環状列石内部から出土している。

土偶は、前回報告で11点？、今回報告で３点？掲載されているが、後期後葉～末がほとんどを占めるようである。前回報告Fig.114の33は、ｘ字形土偶だろうか。そうすると、岩版も合わせて大洞Ｃ２式期の遺物も出土していることになる。

以下は一括して、石剣類７点？、独鈷石１点、大洞B1式期の可能性のある環状土製耳飾１点（岩木山刊行会　1968：PL.36の28）、無文の環状土製耳飾？１点、石製丸玉１点などが出土している。注目されるのは円盤状石製品で、大型竪穴住居跡「北西壁近くの床面から６個の積み重ねた石がくずれた状態であらわれ」（岩木山刊行会　1968：p.263）、「出土数はすべてを持参したわけではないので不正確だが、おそらく100を越す」点数が大型竪穴住居跡から出土したようである。

次に、今回の国史跡指定を目指した確認調査である。環状列石と竪穴住居跡の再確認のほか、「環状列石周辺の台地上に新規の調査区を設定し、石組炉や土器埋設遺構、土坑群、捨て場等の遺構分布を確認した」（報告書：抄録）。出土土器は、前回と大きく異なることはないが、環状列石外周部は大洞BC2式に偏ることはなく、大洞BC1式もはっきり確認できる（報告書：図46の１）。大洞Ｃ２式らしい破片も出土しているが（報告書：図52の２）、やはりほとんど見られない。

関連遺物の出土はないようだが、報告書図50の23の「皿形土器」は、正中線中空土版がはがれたようにも見える。土偶は５点出土しているようで（報告書：図29の８、図47の22、23、図52の14、図55の５）、小片ばかりで時期の特定は難しいが、やはり後期末前後が主体のようだ。その他、石剣類１点、土製耳飾１点（鼓状＝大洞BC2式期前後か）（金子　2009a）、ボタン状石製品１点（第Ⅲａ～

b段階＝大洞C１式～C２式古期か）（金子　2010b）、石製丸玉１点（緑色凝灰岩）１点などが出土し、注目すべきは、やはり円盤状石製品で、17点掲載され、特に環状列石からは、「主に前回調査の埋め戻し土から114点出土しており」「250点以上出土しているものと思われる」（報告書：p.36）。

・青森県弘前市小森山東部遺跡（第９表1665）（福田　1980）

福田友之氏による岩木山麓表採資料の報告である。小森山東部遺跡では他に石棒が紹介されている。

・青森県旧平賀町石郷遺跡（第９表1666～1668）（平賀町教育委員会　1979）

関連遺物が３点出土しているが、典型的なものは人面付土器１点のみで、出土土器の傾向から多出遺跡に結び付く拠点集落と見なしがたく、また次の石郷（１）遺跡との関連もあり、ここで扱った。

調査原因は不明だが、将来の開発に備えての内容確認調査のようで（一部、住宅改築工事）、288㎡調査された（報告書：p.114）。低湿地で湧水があり、木製品や籃胎漆器等が出土している。明確な遺構は検出されなかったようである。

出土土器は、大洞B1～2式が主であり、次いで、瘤付土器第Ⅱ段階、大洞C１式で、この間は僅かで継続性が弱く、拠点集落と断定しにくい。完形の注口土器の出土が目立つ（報告書：p.40）。

関連遺物は、人面付土器１点、岩版？１点、線刻礫１点である。土偶は約22点出土し、小型遮光器土偶らしきもの（報告書：第62図４）や眉が弧を描く大洞式B1式期と思われるものもあるが、大部分は後期後葉～末と思われ（金子　2016a：p.23）、出土土器の傾向と一致しない。「亀甲状土製品」とされたものは、正中線中空土版にやや似るが中実で、女性器と見なされることも多い（金子　2017b：p.109）。１点出土している。「土版」とされるもの（報告書：第64図23？）は無文とのことで、本稿では割愛したい。その他、石剣類11点、円盤状石製品39点、石製勾玉１点、石製丸玉４点（以上玉類全てヒスイ）、土製勾玉１点などが掲載され、漆塗櫛も出土しているが全て破片である。

・青森県旧平賀町石郷（１）遺跡（第９表1669）（平賀町教育委員会　1995）

消防屯所建設により48㎡調査された。上述1974（昭和49）年調査地点から約200m離れた地点とのことである。時期・性格とも同様の成果が得られているが、調査面積が狭いためか、同じ遺跡なのかどうか明らかにしていない（註３）。夥しい遺物が出土したとあるため（報告書：p.5）拠点集落と判断したが、遺構は、晩期前葉（大洞B2式？）らしい土器埋設遺構１基のみである。遺物は、後期末～晩期前葉のものが混在して出土したそうである（報告書：p.6）。

出土土器は、瘤付土器第Ⅱ段階～大洞BC2式が出土しているようだが、瘤付土器以外は小片ばかりで、瘤付土器第Ⅲ段階が主に掲載されている。

関連遺物は、岩偶？１点のみである。２点出土した土偶は小片で詳細不明だが、後期のようである。石剣類等の出土はないようで、円盤状石製品が７点出土した。

・青森県旧脇野沢村瀬野遺跡（第９表1670）（脇野沢村　1998）

農道改良に伴い1,250㎡調査された。縄文時代前期末～中期中葉の集落跡を主とし、弥生時代中期前葉の土坑も検出された。表に示した“岩偶？”も、縄文時代前期末の竪穴住居跡覆土から出土したものであり、報告書では「縄文前～中」期に位置づけられている。

出土土器の全容は不明だが、掲載土器は、縄文時代前期末～中期前葉が大半を占め、弥生時代中期前葉二枚橋式も多い。その他、大洞C１式、砂沢式、遠賀川系、田舎館式も掲載されている。弥生時代と特定できる土・石製品は僅かなようだが、報告書図面52の976は、弥生時代の土偶片らしい。同図面51の968は、二枚橋式期の土製勾玉とされる（報告書：p.59）。縄文時代中期の土偶や玦状耳飾が出土し、古代、中世の遺物もある。

1968（昭和43）年の東北大学の調査区は、今回の調査区中央の東約50mの地点にあり、二枚橋式期

の土偶が２点、碧玉製管玉の破片も１点出土している（東北考古学会　1982）。「土版」とされるものは、高坏土器口縁部突起に酷似し、貫通孔等から装身具の一種と見做した方が良いと思われる。

1980（昭和55）年の脇野沢村教育委員会の調査区は、今回の調査区「最南東部に接する道路敷」に相当し（報告書：p.3）、調査面積300㎡である（道路幅６m）（脇野沢村教育委員会　1983）。竪穴住居跡の検出はないが、今回の調査区と同様の傾向が見られる。ただし、大洞B2、BC2、A1式土器片も掲載され、弥生時代は中期全般の土器が見られ、十腰内Ⅰ式土器も出土しているそうである。縄文～弥生時代の土・石製品の出土はなかったようだが、中世陶磁器片も見られる。

1996（平成８）年の筑波大学の調査区（42㎡）は、東北大学の調査区北側隣接地のようである（脇野沢村　1998：p.3、石井ほか　1997：p.82）。概報しかないようで、土・石製品の出土は報告されていない。

・青森県横浜町桧木遺跡（第９表1671）（横浜町教育委員会　1983）

浸食や開田により壊滅に近い状態にあり、内容確認のため200㎡調査された。遺構は検出されていない。出土土器は、「後期の十腰内Ⅴ・晩期の大洞B・BC・C１式であり」（報告書：p.16）とあるが、掲載土器に大洞B2式は見られず、BC2式も僅かで、ほとんどがC１式であり、次いで瘤付土器第Ⅱ段階が多い。

「晩期の土版」（報告書：p.55）とされたもの（第９表1671）は非常に異質で、後期前葉の板状土偶に近いが、この時期の遺物は出土していないようであるため取り上げた。他に「獣面突起つき土器」とされた破片があり（報告書：図24）、口唇部にそれらしいものが２個見られるが、写実的なものではなく、当該遺物は大洞C１式期にはあまり見られず、写真の掲載もないようなので、割愛した。

大洞B1式新期の小型遮光器土偶の祖形らしきものが１点出土している。石剣類は５点出土した。２点出土した土製耳栓は、当該期にあまり見られないもので、後期中葉の多様口状系列に近い（金子　2012b）。サメ歯垂飾品が１点出土している。円盤状石製品が156点出土したことが特筆され、報告書で分析検討されている。

・青森県野辺地町向田(18)遺跡（第９表1672）（野辺地町教育委員会　2004）

国道バイパス建設のため8,447㎡調査され、縄文時代前期末の集落跡が主として発見されたが、縄文時代晩期前葉の竪穴住居跡１棟、土坑も検出されている。

出土土器は、縄文時代前期末がほとんどだが、早期、中期、後期、晩期、弥生時代前期も出土している。当該期では、大洞B2～C２式で、その後は不明瞭だが、砂沢式の壺が出土している。不明瞭なのは、晩期前葉以降粗製土器しか出土していないためであり、非常に興味深い。

関連遺物は、土版１点のみである。摩耗しているため不明瞭だが、これが大洞C２式なら、遺構、土器の様相と合致しない。土偶、石剣類などの出土はないようである。

・青森県野辺地町槻ノ木遺跡（第９表1673）（鈴木　1982）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、亀形土製品ほかの資料紹介である。報告書は刊行されていないため遺跡の詳細は不明である（青森県　2013）。

・青森県八戸市田向冷水遺跡（第９表1674～1675）（八戸市教育委員会　2006）

土地区画整理事業に伴って調査され、最も遺構・遺物が多く検出された平成15年度調査区14,920㎡の中間報告である（報告書：p.4）。縄文時代の狩場跡、弥生時代中期前葉、古墳時代、古代の集落跡が主として発見され、縄文時代後期らしい竪穴住居跡１棟、弥生時代後期らしい竪穴住居跡も１棟検出されている。調査区全体の様子は、八戸市教育委員会（2011）などに記載されている（p.122）。

複合遺跡で、縄文時代の鐸形土製品が出土していることもあって、動物形土製品の時期に確証は持てないが、この地域の弥生時代前期末を中心に馬面で蛇のような形の類似品が認められることから（本稿（3）第6表934、954、955ほか）、この遺跡では弥生時代前期末が出土していないようであるため、中期前葉と判断した。縄文時代の出土遺物が極めて少ないためでもある。

縄文～弥生土器では、弥生時代中期前葉二枚橋式あるいは馬場野Ⅱ式（佐藤　2015：p.410）がほとんどで、縄文時代後期前葉、弥生時代中期後葉、後期も見られ、縄文時代早、前期の土器も出土しているらしい（報告書：p.95）。

関連遺物は、動物形土製品2点である。表に示した時期の「二枚？」は「二枚橋式期？」の略である。第9表1674を報告者はクマと見立てるが（報告書：p.108）、細画で首肯できない。同時期と考えられる土・石製品には、他に花弁平玉1点（金子　2011b）、土製紡錘車1点がある。

・青森県階上町野場（1）遺跡（第9表1676）（階上町教育委員会　2001）

集落道路拡幅に伴って1,400㎡調査され、縄文時代中期末～後期初頭の集落跡が主として発見された。出土土器は少ないが、中期末大木10～後期前葉蛍沢式に匹敵するくらい大洞C 1～A1式が出土している。大洞A1式は僅かである。

関連遺物は、土版1点のみである。中期末～後期前葉の土偶も出土しているので不明瞭だが、土偶は1点のみで（頭部片）、大洞C 2式後半期大型遮光器系列土偶のようである。蓋状土製耳飾が2点出土していて、出土土器の傾向に合致する（金子　2009a）。土製丸玉9点、石剣類2点、円盤状石製品3点も当該期か。土製丸玉は全て同じ竪穴住居跡（中期末～後期初頭）の覆土下部から出土したもので、中期末～後期初頭の可能性が高いかもしれない。

・青森県階上町道仏鹿糠遺跡（第9表1677）（青森県教育委員会　2011）

三陸自動車道建設に伴って4,500㎡、隣接する藤沢（2）遺跡（5,450㎡）と共に調査された（幅約40m）。土版が帰属する晩期後葉～弥生時代前期の遺物は、両遺跡から出土し、ここでは一括して扱う。

道仏鹿糠遺跡では陥し穴が、藤沢（2）遺跡では縄文時代早期末～前期初頭の集落跡が主として検出された。晩期後葉～弥生時代前期の遺構は、藤沢（2）遺跡で、弥生時代前～中期とされる竪穴住居跡1棟検出された程度である。掲載土器は、縄文時代早期末～前期初頭、晩期後葉～弥生時代が多いが、縄文時代後期前葉も比較的多い。晩期後葉～弥生時代の土器は、中期後半以降が大半で、晩期後葉～弥生時代前期では、大洞A1式から大洞A´式新期まで同程度掲載されているが多くはない。製塩土器の小片が十数点掲載されているが、時期は特定されていない。

関連遺物は、土版1点のみである。土偶は6点？で、結髪土偶がほとんどである。その他、独鈷石形土製品が特徴的で、両遺跡で6点も出土し、土製勾玉？2点、緑色凝灰岩製平玉1点などが掲載されている。石剣類等は、石刀1点の掲載のみである。

・青森県八戸市南郷区荒谷遺跡（第9表1678～1679）（八戸市南郷区役所建設課　2007）

古くから著名な遺跡で関連遺物多出遺跡に分類される可能性が高いが、3点以上の関連遺物の報告は見つけられなかった。報告書内でも荒谷遺跡出土品とされてきた土版2点の帰属を否定している。

旧村道付け替え工事に伴い1,910㎡調査された。総延長約150mの調査区をほぼ三等分し、南からA～C区と称している。A区では晩期末～弥生時代前期の集落跡（配石遺構、メノウ埋納土器含む）、B区では縄文時代前期末～中期前葉の集落跡、C区では縄文時代後期末～晩期前葉の集落跡が主に発見されている。A区は、南に隣接する遠賀川系被籠土器で有名な松石橋遺跡の続きのようである。A区では、平安時代の竪穴住居跡も検出されている。C区土坑墓から人骨が出土し、時期は晩期前半と推測される。

市町村合併を挟む混乱の中での調査整理で環境が整わず、報告書は遺構記載が中心で、遺物の掲載はあるが記載はない。同情するが、せめて遺物の種類ごとの出土点数は記して欲しかった。また、図版番号がなく、遺物番号も４桁以上の大きなものがほとんどで引用しにくい。

第９表1678が出土したＡ区の当該期の掲載土器は、瘤付土器第Ⅱ段階、大洞Ｃ２式～青木畑式で、大洞Ａ式新期が多く、次いで大洞A1式か。類遠賀川系土器も見られる。他に、縄文時代後期前葉大湯式などが掲載されている。土偶は６点掲載され、結髪土偶や刺突文土偶がある。独鈷石１点とその未成品も見られる。土製丸玉１点、抉入柱状片刃石斧１点、円盤状石製品５点掲載されている。p.90の1144は、「動物意匠土器片」とされるが（報告書：p.300）、写真が不鮮明でよくわからない。

第９表1679が出土したＢ区の当該期掲載土器は、晩期末～弥生時代前期らしい小片もあるが、瘤付土器第Ⅱ段階、大洞B2～Ｃ２式が多めである。土偶は３点掲載され、１点は小型遮光器土偶のようだが、残りは後期か。円盤状石製品が６点掲載されている。

C区は後期末～晩期前葉土器がほとんどであり、土偶は２点で、やや変わった屈折像土偶は後期末～晩期初頭か。土製勾玉１点、石剣類３点掲載されている。

・青森県旧名川町鳥舌内（第９表1680）（藤沼ほか　2002）

東北歴史博物館蔵品（佐々木コレクション）で、藤沼邦彦氏ほかの青森県出土土面集成によって図化報告された。「鳥舌内」は大字名で、藤沼氏は幾つかの候補遺跡を挙げている（報告：p.126）。

・青森県旧名川町広場遺跡（第９表1681）（鈴木　1980）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩版・土版の資料紹介である。本稿では原則として稲野（1983）で取り上げられている確実に晩期である狭義の「岩版・土版」（ＫＯ類）に限って資料とした。遺跡名は鈴木（1980）によるもので、詳細は不明である。

・青森県旧名川町寺下遺跡（第９表1682）（鈴木　1982）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、亀形土製品ほかの資料紹介である。著名な遺跡だが、発掘調査が行われたことはない（青森県　2013：p.530）。

・青森県田子町道前遺跡（第９表1683）（鈴木　1982）

青森市在住だった大高興氏が青森県立郷土館に寄贈した風韻堂コレクションのうち、岩偶ほかの資料紹介である。遺跡名は鈴木（1980）によるもので、詳細は不明である。

・青森県熊原川流域（出土遺跡不明）（第９表1684～1685）（青森県立郷土館　1997）

主に表採未報告資料の集成で、岩手県立博物館蔵品（小田嶋コレクション）である。田子町野面平遺跡か石亀遺跡の辺りと想定されている（報告書：p.119）。

5．参考資料

・青森県鰺ヶ沢町新沢（1）遺跡（青森県教育委員会　2016）

平安時代の集落跡から砂沢式土器が比較的まとまって出土し、該期土偶も５点掲載されているが、土版等関連遺物の出土はない。

6．小括

今回五所川原市五月女萢遺跡という大洞Ｃ２～Ａ式期土面多出遺跡や旧金木町千刈（1）遺跡で同時期の土面が出土していることを確認し、津軽、下北半島北部でこの時期の土面が顕著なのを改めて感じたが、北海道にはなく、旧三厩村宇鉄遺跡でも出土していない。

註

(1)註稿「亀ヶ岡式的な土偶の広がり」参照。「DOGU」第3号（青森県成田滋彦氏、2020年5月刊）掲載予定。
(2)報告書第29図17は前稿、18、19は、大洞C２式期古期と思われる。
(3)遺跡が所在する平川市郷土資料館の展示では、1974年の調査地点は石郷(4)遺跡とされていた（2019年11月17日見学）。「青森県史」（青森県　2013）でも同様である。
(4)鼻は大きく上に細かい刺突が施されるが、リアルで鼻孔も見られる。口は長楕円形の貼付で上に一列刺突が施される。厚さは、貼付部分以外では9cm程度だが、縁は肥厚して1.2cm程度。鼻～顎しか残存していないが、青森県旧浪岡町羽黒平遺跡例（金子　2001：第27図３）によく似ており、大洞C２式前半期の可能性がある。
(5)通常の土面と異なり、縁が大きく伸びて立ち浅鉢のような形を呈す（第１図18）。大きく伸びた部分が「頸部文様帯」となり浅鉢と同じ形制を示す。縁上にも「口唇部文様帯」状に除刻が施され、「頸部文様帯」と「口唇部文様帯」には土器と同じ文様装飾が施されていることから時期比定は容易である。形制や「文様帯」がよく似ることから、報告書では「人面形浅鉢」として扱っているが、根拠は示されていない。浅鉢と見立てた場合底に大きく鼻が突出するのは違和感があり（第１分冊巻頭カラー写真）、縁が長く縁上を含めて文様装飾が施される点を除けば、一般的な土面と変わりがない。
(6)腹対向多重弧線。共伴土器から大洞C２式期とされる（報告書第２分冊：p.423）。背中の文様は、岩版の３類と４類の中間的。
(7)片面に文様、反対面は無文だが盲孔２。文様面は、上部に工字状、下部に逆三角形の意匠で、工字状文は、平行線を繋ぐ「梯形状」を広く彫り去っており、結晶土偶や刺突文土偶の背中文様に似る。逆三角形の意匠も、肩パット土偶によく見られるもので（金子　2004：第５図）、岩偶の一種と見なした方が良いのかもしれない。断面形は、岩版のように断面方形基調の板状ではなく弱い紡錘形に近い。線刻の一部や彫去には何回もなぞった跡がある。
(8)線刻は浅く、調査時によると思われる擦痕で、頭部を中心に文様の不明瞭なところがある。魚眼状三叉文による乳房表現があり（凹凸はない）、その下に、後期末の正中線中空土版にしばしば見られる（金子　2017：第１図５等）肋骨状の長弧線文が連続する。厚さ5.5cmの板状。なお、報告書巻頭カラー写真７に「（参考）」とあるのは、どういう意味だろうか。
(9)板状楕円形の礫に線刻。文様は雑で意匠不明であり、福島県薄磯貝塚例に近い（前稿参照）。文様は一般的な岩版とは異質で、本稿では「線刻礫」として扱ったが、稲野彰子氏は、第２類に含めている（稲野　1983：第２図C）。ただし、天地は逆で、パンツ状区画との認識はないようである。
(10)埋丘町教育委員会（1992）には、砂岩とあるが（p.99）、写真（p.82）では凝灰岩にしか見えない。
(11)埋丘町教育委員会（1992）には、凝灰岩とある。
(12)は、沈線の上下に刻目が施されたもので、大型遮光器系列土偶に準じる。人中～口は、隆帯で表現されている。報告書（p.125）に「内面の一部に圧力を受けた形跡が認められ、入為的に壊された可能性も考えられる」とある。
(13)胸の多重線は、岩版３類に似る（稲野　1983）。パンツ状区画の後ろの緋状の部分は、屈折像土偶Ｂ類によく似る。背面腰上に工字文系三叉文が上下に列状に施される。金子（2001）では、全身に文様が描かれるものは大洞C１式期までと考えていたが、大洞C２式古期までは残りそうである。また、胸部正面が３類、背面が４類と、岩版編年の型式分類に問題を投げかける。81.9ｇ。
(14)目横線上下刻目列。左右の頬に１～２状の沈線が横に引かれる。頭頂、側頭突起。
(15)胴体破片。馬淵川型岩偶とはやや異なるが、ほぼ全面に入組文等の文様が描かれ、後期末～晩期初頭の可能性が高く、馬淵川型岩偶の祖形となる可能性がある。厚く板状なのは、除刻が浅いせいであろう。
(16)長楕円形の円礫に線刻したものである（第２図７）。区画内に条線を充填する構図は、同じ遺跡から出土した弥生時代土偶に酷似する（第２図６）。685ｇ。
(17)「目の下や頬の部分、突起などに光沢のある黒色物質が痕跡的についており、赤彩の下に黒漆が塗られていた可能性がある」（藤沼ほか　2002：p.126）。

参考文献

青森県　2013『青森県史　資料編　考古２　縄文後期・晩期』
青森県教育委員会　1974『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第14集
　1979『組織遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第49集
　1982『右ェ門次郎窪遺跡　三合山遺跡　石ノ窪遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第69集
　1993『朝日山遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第152集
　1994『朝日山遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第156集
　1995『千苅（１）遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第174集
　1997『朝日山（３）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第215集
　2011『道仏鹿糠遺跡　藤沢（２）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第499集
　2016『金沢街道沢(1)遺跡・新沢（１）遺跡・新沢（２）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第563集
青森県立郷土館　1984『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告書第17集　考古一６
青森県立郷土館　1997『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第40集　考古一11
青森市教育委員会　1967『玉清水遺跡調査概報』青森市の文化財３
青森山田高等学校考古学研究会　1995『燃糸文』第21号　特集青森市沢山（１）遺跡の出土遺物
石井淳ほか　1997「青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡発掘調査概報」『筑波大学先史学・考古学研究』第８号
磯前順一　1994『土偶と仮面・縄文社会の宗教構造』校倉書房
板柳町教育委員会　1993『土井Ⅰ号遺跡』
稲野彰子　1983「岩版」『縄文文化の研究第９巻　縄文人の精神文化』雄山閣
稲野彰子　2005「馬淵川流域における岩版・土版第１類と第２類」『北上市立博物館研究報告』第15号
稲野彰子　2009「岩木川流域における岩版・土版第１類と第２類」『北上市立博物館研究報告』第17号
岩木山刊行会　1968『岩木山』
岩手県教育委員会　1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－Ⅵ－（一関地区　東裏遺跡）』岩手県文化財調査報告書第55集

宇鉄遺跡発掘調査会　1996『宇鉄遺跡発掘調査報告書』
大迫町教育委員会　1988『町内遺跡群発掘調査報告書Ⅱ「屋敷遺跡」』大迫町埋蔵文化財報告第14集
金子昭彦　2001『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史4　同成社
金子昭彦　2004「結髪土偶と刺突文土偶の編年」『古代』第114号　早稲田大学考古学会
金子昭彦　2006「東北地方北部における縄文晩期の『装飾品』(1)」『紀要』ＸＸＶ　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　2009a「縄文晩期・東北北部の土製耳飾」『縄文時代』第20号　縄文時代文化研究会
金子昭彦　2009b「東北地方・縄文晩期における弧状土製品」『物質文化』87号　物質文化研究会
金子昭彦　2010a「東北地方・縄文晩期の土偶(1)」『紀要』ＸＸＸ　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　2010b「北日本・縄文晩期のボタン状製品」『岩手考古学』第21号　岩手考古学会
金子昭彦　2010c「東北北部・縄文晩期の菱形環状製品」『青森県考古学』第18号　青森県考古学会
金子昭彦　2010d「縄文晩期・東北北部の土製耳飾（続）」『縄文時代』第21号　縄文時代文化研究会
金子昭彦　2011a「北日本・縄文晩期の三角玉ほかの装飾品」『岩手考古学』第22号　岩手考古学会
金子昭彦　2011b「北日本・縄文晩期の花弁丸玉、平玉」『縄文時代』第22号　縄文時代文化研究会
金子昭彦　2012a「東北地方・縄文晩期の土偶(3)」『紀要』ＸＸＸⅠ　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　2012b「東北地方北部の縄文土製耳飾」『縄文時代』第23号　縄文時代文化研究会
金子昭彦　2015a「東北地方・縄文晩期の土偶(5)」『紀要』第34号　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　2015b「縄文土偶の終わり」『考古学研究』第62巻第2号　考古学研究会
金子昭彦　2016a「東北地方・縄文晩期の土偶(6)」『紀要』第35号　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　2016b「瘤付土器に伴う土偶の系列」『青森県考古学』第24号　青森県考古学会
金子昭彦　2016c「津軽海峡圏の装身具の変遷」『一般社団法人日本考古学協会2016年度弘前大会第Ⅰ分科会　「津軽海峡圏の縄文文化」研究報告資料集』
金子昭彦　2017a「東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物(2)」『紀要』第36号　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　2017b「東北地方『亀形土製品』の一類型」『縄文時代』第28号　縄文時代文化研究会
木村鉄次郎　1989「西津軽郡鰺ヶ沢町大曲遺跡発掘調査報告」『青森県立郷土館調査研究年報』第13号　昭和63年度
黒石市教育委員会　1987『石名坂遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告・第6集
（公立大学法人）国際教養大学　2016『大曲遺跡資料　砂沢遺跡資料』国際教養大学アジア地域研究連携機構文化遺産研究報告第1号
国立歴史民俗博物館　2015『亀ヶ岡遺跡・是川遺跡　縄文時代遺物』国立歴史民俗博物館資料図録11
五所川原市教育委員会　2006『五月女萢遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第27集
五所川原市教育委員会　2017『五月女萢遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第34集
（秋田県山本郡）琴丘町教育委員会　1983『高石野遺跡発掘調査概報』
琴丘町教育委員会　1992『高石野　秋田県高石野遺跡出土資料写真集』琴丘町文化財調査報告書第6号
佐藤祐輔　2015「Ⅳ.7　東北」『弥生土器』考古調査ハンドブック12　ニューサイエンス社
鈴木克彦　1979「『県重宝指定の亀ヶ岡遺跡出土遺物』について」『青森県立郷土館調査研究年報』第4号
鈴木克彦　1980「岩版・土版の研究序説」『青森県立郷土館調査研究年報』第5号
鈴木克彦　1982「風韻堂コレクション：岩偶、亀型土製品、土器片利用円盤」『青森県立郷土館調査研究年報』第7号
鈴木克彦　1984「青森県鰺ヶ沢町出土の大型岩版」『考古風土記』第9号　青森県鈴木克彦氏
鈴木克彦　2004「硬玉製大珠（ヒスイ大珠）」『季刊考古学』第89号　特集縄文時代の玉文化　雄山閣
（青森県）つがる市教育委員会　2019『史跡亀ヶ岡石器時代遺跡総括報告書』つがる市遺跡調査報告書11
東北考古学会　1982『瀬野遺跡』
名川町教育委員会　1978『虚空蔵遺跡発掘調査報告書』
中門宏太　2013「東北地方北部における瘤付土器の基礎的研究」『古代』第131号　早稲田大学考古学会
野辺地町教育委員会　2004『向田(18)遺跡発掘調査報告書』野辺地町文化財調査報告書第14集
階上町教育委員会　2001『野場遺跡（1）発掘調査報告書』
野辺地町教育委員会　2004『向田(18)遺跡発掘調査報告書』野辺地町文化財調査報告書第14集
八戸市教育委員会　2006『田向冷水遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財報告書第113集
八戸市教育委員会　2011『田向冷水遺跡Ⅳ』八戸市埋蔵文化財報告書第129集
八戸市南郷区役所建設課　2007『荒谷遺跡』八戸市南郷区埋蔵文化財調査報告書
平賀町教育委員会　1979『石郷遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第7集
（青森県）平賀町教育委員会　1995『石郷（1）遺跡発掘調査報告書』平賀町埋蔵文化財報告書第21集
（青森県）弘前市教育委員会　2010『大森勝山遺跡発掘調査報告書』
弘前大学人文学部日本考古学研究室　2004『亀ヶ岡文化遺物実測図集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告1
福田友之　1980「岩木山麓の考古学的資料（1）」『考古風土記』第5号　青森県鈴木克彦氏
福田友之　1988「『鼻曲り土面』考」『青森県立郷土館調査研究年報』第12号
藤沼邦彦ほか　2002「青森県における縄文時代の土製仮面について」『青森県史研究』第6号　青森県
三田史学会　1959『亀ヶ岡遺蹟』
横浜町教育委員会　1983『捨木遺跡発掘調査報告書』
和賀町教育委員会　1989『和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅰ』和賀町文化財報告書第18集
（青森県）脇野沢村　1998『青森県脇野沢村瀬野遺跡』
脇野沢村教育委員会　1983『瀬野遺跡発掘調査報告書』脇野沢村埋蔵文化財調査報告第2集

江戸の南部屋敷（3）

－盛岡藩南部家江戸下屋敷の研究－

中村隼人・滝尻侑貴・野田尚志

本稿は陸奥盛岡藩南部家が所持した江戸屋敷の建築空間について考察を行ったものである。連作の三本目となる本稿では盛岡藩が江戸麻布に所有した陸奥盛岡藩南部家江戸下屋敷を研究対象とし、屋敷地内の空間構成の具体とその変遷について整理を行った。本稿では麻布下屋敷絵図と考えられる絵図類の紹介と、資料の正否判定、絵図の性格特定を行った。

4　江戸下屋敷

本章では盛岡藩南部家が、明暦二年（1656）以降、近世を通じ麻布一本松に所有した江戸下屋敷（以下、麻布下屋敷）を研究対象とし、屋敷地内の空間構成の具体とその変遷について整理を行う。

4．1　江戸下屋敷　麻布下屋敷の成立と変遷

麻布下屋敷の来歴については、二章七節で簡単に整理を行っている。一部記述については重複することになるが、ここでもう一度同屋敷の成立と変遷について触れておきたい。

明暦二年（1656）、盛岡藩南部家は麻布一本松にあった赤穂藩浅野家の屋敷地を相対替によって入手した。相対替とは屋敷地の交換を指す語であるが、屋敷地同士の対等な交換だけではなく、金銭と屋敷地を交換することや、屋敷地に金銭を加え他家の屋敷地と交換する場合もある。明暦二年の交換対象地になった盛岡藩南部家の屋敷地については複数の説があり判然としない。菊池悟朗1911『南部史要』は芝下屋敷、東京市1932『東京市史稿　市街編十七』は築地中屋敷、松方冬子1999『盛岡藩江戸屋敷の変遷について』は赤坂溜池の下屋敷に九百両を加え相対替したとする説を挙げている。

このように屋敷地の入手経緯については不明な点も多いわけだが、明暦二年以降、近世を通じ盛岡藩南部家はこの麻布一本松の屋敷地を江戸下屋敷として使用し続けた。

藩政期の同屋敷は藩主の別邸としての機能が強い空間であった。麻布下屋敷が立地する現在の港区

第30図　麻布下屋敷跡地周辺

南麻布五丁目は、麻布台地の西端に位置する。つまり麻布下屋敷は、東から西へと傾斜する広い傾斜面の裾部に相当し、この地勢を活かした空間利用を行っていた。敷地西半の低地部分は庭園空間であった。豊富な湧水の他に、小渓谷とも評しうる起伏に富んだ原地形を活かし、丘、渓流、滝、池、などを含む回遊式の築山林泉庭園を築いていた。敷地中央から東半の平坦地には複数の御殿や江戸詰めの家臣たちが生活する表長屋が建てられていた。この他にも外桜田の江戸上屋敷が火災や地震などで被災した場合には、その避難先としての機能を担うなど、広大な敷地を活かした多面的な空間利用がなされていた。幕末段階の切絵図などを確認すると、麻布下屋敷の周辺には他に木下備中守、東山美濃守、北条相模守、酒井内蔵助ら大名の下屋敷が複数構えられていることがわかる。しかしそれ以外には疎らに町人地が形成されていた程度の記載しかないことも多い。麻布下屋敷の周辺地域は、明治段階になると華族や富裕者層の住宅地となり、都市化と人口の流入が進んだ。しかし、近世段階においてはこの限りではなく、閑散とした郊外地ともいうべき様相を示していたようだ。

明治元年八月（1868）、江戸幕府の所有物であった拝領屋敷の屋敷地は、その中に建てられた建物群と共に明治政府に接収された。拝領屋敷の屋敷地とそこに建てられた建築群の多くは、新政府の諸官衙や各藩知事邸、あるいは諸官員邸などに転用された。この他にも建物を取り壊し、その跡地に調練場、兵舎、大学を作ったほか、安価で払い下げる場合も多かった。一方、諸大名が自らの資産によって購入した抱屋敷については、引き続き華族（元大名）の資産として所有が認められたが、近世を通じ借財に苦しんだ大名達がこれを維持し続けることは経済的に困難であった。このため、抱屋敷の屋敷地と建物もまた、多くの場合新政府や政商に売却され、結果破却した。

盛岡藩南部家も最終的には所有した抱屋敷の全てを手放したわけだが、それぞれの屋敷の所有の変遷についても異説が多い。明治二十九年（1896）、有栖川宮威仁親王が霞ヶ関の御殿から屋敷替えをするにあたり、代替の御用地として、麻布下屋敷の跡地である「麻布盛岡町」が選ばれた。有栖川宮威仁親王が同地を入手した経緯についても未詳と言わざるを得ない。有栖川宮家が自費で用地を購入したとする説、政府から有栖川宮家への譲渡があったとする説、宮内省から有栖川宮家への譲渡があったとする説などがあるがどれも確定的ではない。また詳細については後述するが、有栖川宮家が御用地とした範囲は、麻布下屋敷の敷地の全てではない。麻布下屋敷の敷地中央から西端にかけての約七割程度の範囲が有栖川宮家御用地となり、東側の三割は民有地となり市街地化したわけだが、この分割がどの段階でなされたのかについても未詳である。

有栖川宮家は入手した麻布盛岡町の御用地に、新邸などを建設することはなかったようで、結果麻布下屋敷時代の庭園も管理がされず荒廃が進んだ。大正二年（1913）有栖川宮威仁親王が逝去し、同家が廃絶すると、同地は有栖川宮家の祭祀を引き継いだ高松宮家に継承され、同家の御用地となった。しかし高松宮宣仁親王もこの麻布盛岡町の御用地に手を加えることはせず、新邸や庭園の工事は行わなかった。

有栖川宮威仁親王没後二十年にあたる昭和九年（1934）一月五日、高松宮宣仁親王は、時の東京市長牛塚虎太郎に宛て高松宮附宮内庁事務官吉島六一郎発給の御沙汰書を提出した。御沙汰書の趣意は麻布盛岡町高松宮家御用地を東京市に恩賜するというものであった。また恩賜に際しては、自らの意に従い、同地を有栖川宮記念の為に公園とし、市民に開放してほしいという要望も含まれていた。牛塚は同年同月十七日に開かれた東京市会において、この事を第一号議案として報告し、議会はこれを全会一致で可決した。また同日の第二号議案として、公園築造予算が上程され、これも可決された。公園の設計には東京市公園課があたり、公園の名称は有栖川宮記念公園になることが決まった。公園設置に伴う土木工事の具体を示す史料は遺されていないが、前島康彦1981『有栖川宮記念公園』の中

で、著者はこの工事に携わった市公園課技手と造園職人からの得た情報として、南部藩江戸下屋敷時代の景石の掘り起こしや、コンクリート製の擬岩や太鼓橋を設置するなどの工事が行われたことを聞き書きしている。この他にも園路整備、有栖川宮の由来を示した記念碑銘壇の設置、東京郷土資料仮陳列館の建設などが行われ、同年十一月には有栖川宮記念公園の開園と公開が実現した。昭和四十八年(1973)には、公園開園時に民有地であった麻布下屋敷時代の屋敷地内北東隅部分に相当する31,235㎡が公園に編入されたほか、敷地東寄りの位置に国内最大級の蔵書数を誇る東京都立中央図書館が建設された。昭和五十年(1975)には公園の管理が東京都から港区へと移管された(図30)。

現在、有栖川宮記念公園内に麻布下屋敷時代の建造物などは残されていない。また昭和四十一年(1966)四月には、同地一帯の町名再編が実施され「麻布盛岡町」という地名も失われた。

しかし令和二年(2020)現在においても、麻布下屋敷時代の庭園が良好な状態で遺存しているほか、有栖川宮記念公園の南を東西に通る坂道の名前として、「南部坂」の呼び名が遺されるなど、随所に往時の景観と記憶が遺されている。

4．2　江戸下屋敷　既往研究の整理と本章の主たる資料

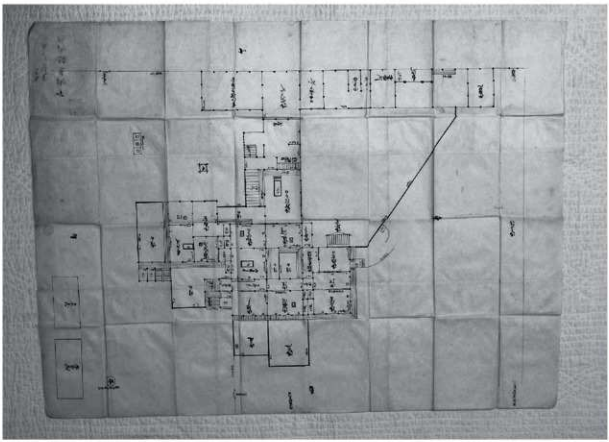
本章の研究対象である麻布下屋敷に関する先行研究として、岩手県1963『岩手県史第5巻　近世編2　盛岡藩附・八戸藩』、松方冬子1999「盛岡藩江戸屋敷の変遷について」、前島康彦1991『有栖川宮記念公園』などがある。いずれも近世及び近代の文献資料を主たる資料とした研究で、麻布下屋敷の被災歴などについて大要を示している。

また限定的であるが、麻布下屋敷の屋敷地内跡地の発掘調査も複数行われており、この成果を報告した都立日比谷図書館新館企画係1971『新館建設用地の沿革と発掘品について』や、港区教育委員会2007『陸奥盛岡藩南部家屋敷跡遺跡発掘調査概要報告書』なども刊行されている。しかし、両調査とも遺構の遺存状況が不良であり、麻布下屋敷段階の建築群との整合を確認するに足る成果は得られていない。都立中央図書館建設に伴う調査成果の概要を纏めた小冊子、都立日比谷図書館新館企画係1971『新館建設用地の沿革と発掘品について』では、昭和四十五年(1970)の発掘調査内容が調査面積30㎡、掘削深度が3ｍだったと記している。また、酒徳利、ちょこ、土瓶、灯明皿、湯呑、皿、甕、すり鉢、瓦、硯、鎖、出刃包丁など約100点の遺物の出土が認められたことが記載されているが、小型の遺物集合写真が掲載されるのみで、その具体を読み取ることはできない。本稿執筆に際し、出土遺物の実見及び調査を行いたいと考え、調査機関に遺物保管先の問い合わせを行ったが、上述した公園移管の問題もあってか、保管先は不明であるとの回答を得た。

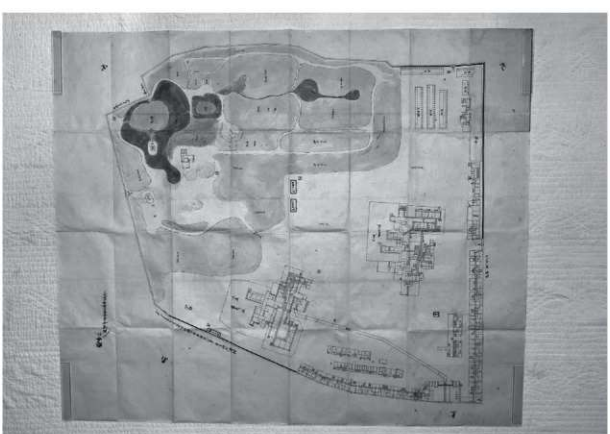
以上の状況を踏まえ、本章では麻布下屋敷の空間構成を考える主たる資料として、現存する絵図類を選択することにした。また補足資料として藩政期段階の文献資料を参照することとし、これら資料類に記載された麻布下屋敷の変遷についても分析の対象とする。

4．3　江戸下屋敷　資料の概要

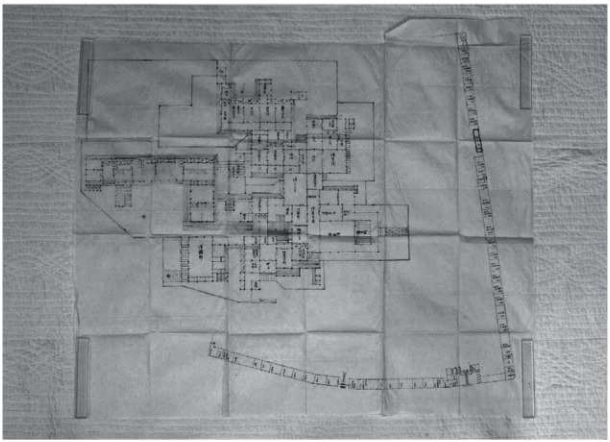
現時点で麻布下屋敷を描いた可能性がある絵図は八点確認されている(図31～38)。収蔵先の内訳はもりおか歴史文化館六点、十和田市郷土館二点である。本稿では以後各絵図を絵図⑪～⑱と呼称する。ここに挙げる資料名は所蔵先の登録名を踏襲したものである。資料の異同については後述するが、御殿空間のみを描いた絵図と、敷地全体を描いた絵図とが存在する。また資料名は江戸下屋敷絵図としながらも、同屋敷を描いていない資料も存在する。資料の正否については本章後段で分析する。



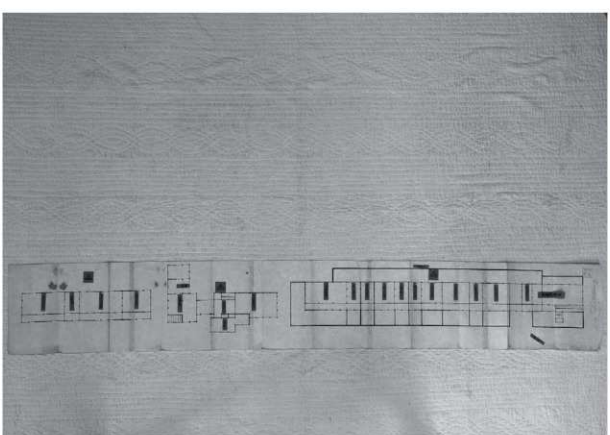
第31図　絵図⑪「江戸下屋敷図」寛保三年（1743）下が南



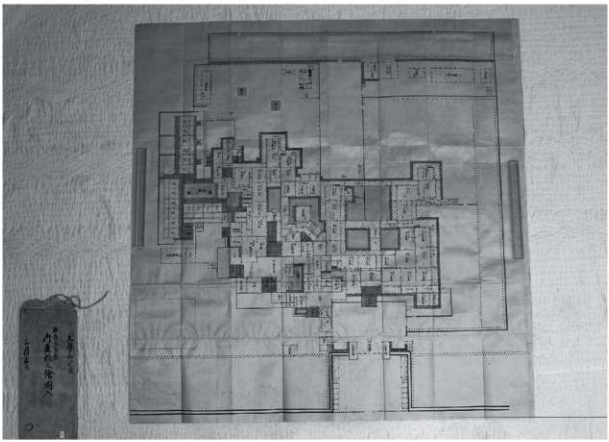
第32図　絵図⑫「江戸下屋敷図」年代不明　下が南東



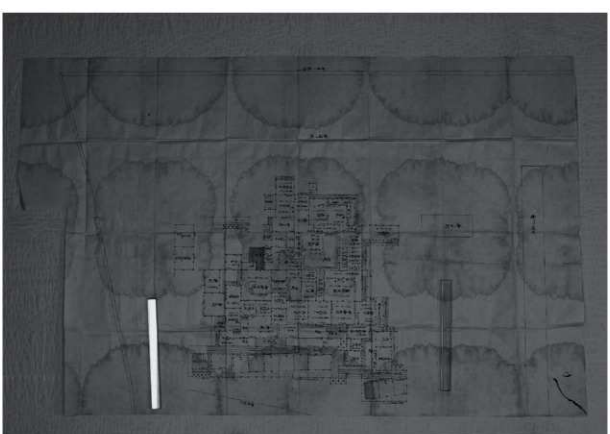
第33図　絵図⑬『江戸下屋敷図』年代不明　方位不明



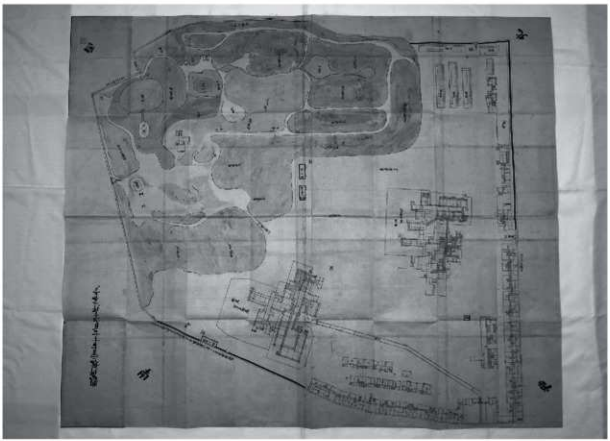
第34図　絵図⑭『江戸下屋敷図』年代不明　方位不明



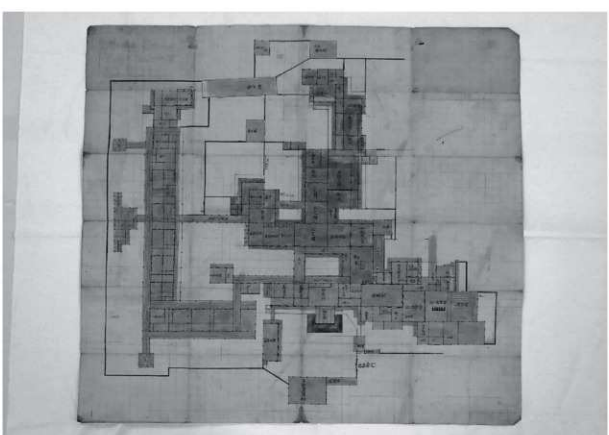
第35図　絵図⑮「麻布屋敷図」元禄十五年（1702）方位不明



第36図　絵図⑯「下屋敷御新宅差図」元禄十五年（1702）方位不明



第37図　絵図⑰「御下屋鋪御絵図」年代不明　下が南東



第38図　絵図⑱「江戸麻布御下屋鋪御新造様御殿之図」明和三年（1767）方位不明

絵図⑪　『江戸下屋敷図』　一点　寛保三年（1743）（図31）
絵図⑫・⑬・⑭　『江戸下屋敷図』　同名三点　年代不明（図32・33・34）
絵図⑮　『麻布屋敷図』　一点　元禄十五年（1702）（図35）
絵図⑯　『下屋鋪御新宅差図』　一点　元禄十五年（1702）（図36）
絵図⑰　『御下屋鋪御絵図』　一点　年代不明（図37）
絵図⑱　『江戸麻布御下屋鋪御新造様御殿之図』　一点　明和三年（1767）（図38）

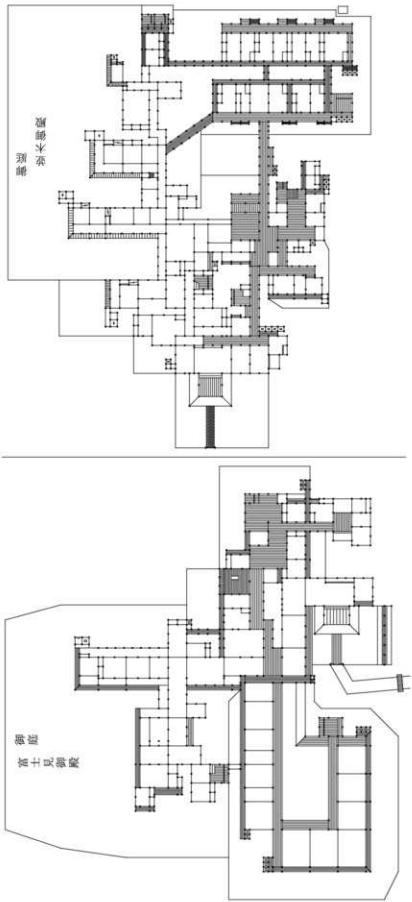
絵図⑪　『江戸下屋敷図』（図31・39）

所蔵：もりおか歴史文化館　資料年代：寛保三年（1743）資料端書　範囲：全体図か
作図：書絵図　彩色：無　方位：有　付箋：無　敷地寸法：無　端書：有
資料状態：絵図⑪は単色の一枚物の書絵図で折図である。資料を入れた袋や、表紙、題箋はない。絵図裏面に「下御屋敷御絵図　寛保三癸亥歳　十一月」の端書がある。
内容：図面中央に規模の小さい屋敷、北側に屋敷境と表長屋を描く。屋敷地全体を描いた図ではなく、屋敷とこれに隣接する表長屋部分のみを描いた絵図である。敷地全体の形状は不明である。

絵図⑫　『江戸下屋敷図』（図32・40）

所蔵：もりおか歴史文化館　資料年代：不明　範囲：全体図
作図：書絵図　彩色：黒・青・緑・灰　方位：有　付箋：無　敷地寸法：有　端書：有
資料状態：絵図⑫は、絵図⑨・⑬・⑭とともに『江戸下屋敷図』という名称で登録された一連の資料で、四枚の絵図が一つの和紙袋に同封される形で所蔵されていた。このうち絵図⑨は図の内容から、

第39図　絵図⑪『江戸下屋敷図』寛保三年（1743）下が南



第40図　絵図⑫「江戸下屋敷図」富士見御殿　並木御殿　年代不明　下が南東

描かれた建物が江戸桜田上屋敷であると判断ができたため、同資料は桜田上屋敷を論じた三章で分析を行った。

一連の資料を同封していた和紙袋には「江戸　御上屋敷御殿并御小屋ノ圖　御下屋敷御殿并御小屋ノ圖　都合三枚」と書かれていた。和紙袋の質感や筆書きの筆致は後年のものではなく、近世段階のものとして判断できる。絵図⑫は一枚物の書絵図で、折図である。絵図背面には青色の厚紙による表紙がつけられており、表紙中央には「御下屋鋪絵圖」と書かれた題箋が貼られていた。資料自体に絵図の作成年代を示すような記載はない。

内容：絵図⑫は麻布下屋敷の敷地全体を描いた大型の絵図である。屋敷地西端には水景を伴う起伏のある庭園が描かれる。屋敷地中央には「富士見御殿」と「並木御殿」という二つの御殿が建つ。屋敷地中央南寄りに建つ「富士見御殿」は、屋敷地東隅にある「表御門」からの園路が描かれており、この門を正門としたことがわかる。一方屋敷地中央北東寄りに建つ「並木御殿」の入口も、同じく「表御門」方向に向いているが、園路は描かれていない。園路の有無を指標とするならば、「富士見御殿」の方が「並木御殿」よりも、より格上の建物として認識されていた可能性を指摘することができる。

絵図⑬　『江戸下屋敷図』（図33・41）

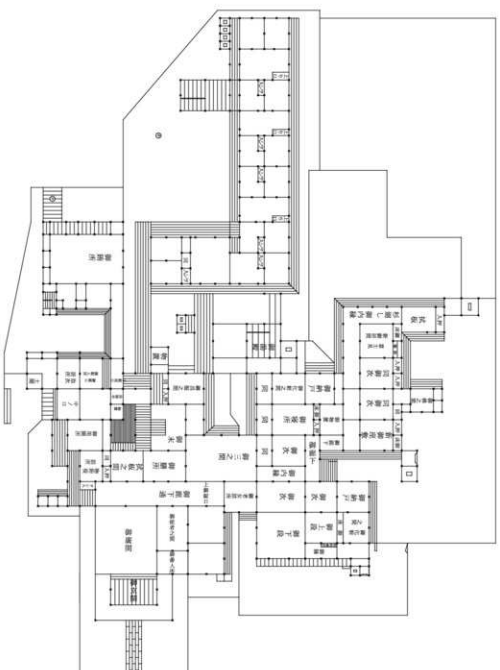
所蔵：もりおか歴史文化館　資料年代：不明　範囲：全体図

作図：書絵図　彩色：無　方位：無　付箋：無　敷地寸法：無　端書：有

資料状態：絵図⑬は、絵図⑨・⑫・⑭と同封されていた一連の資料である。一枚物の書絵図で折図である。絵図の表裏に図面名や作成年代を示すような記載はない。彩色はない。

内容：絵図⑬は御殿一棟とＬ字型の表長屋を描いた絵図である。絵図⑫に描かれた屋敷地の形状と合わせて考えると、絵図⑬は屋敷地東隅の一部分のみを描いた図であると比定できる。

絵図⑬に描かれた御殿には東側の「御玄関」と南側の「中ノ口」の二つの入口がある。部屋名称から考えると「玄関」「御廣間」を通り、図41右下の「御上段」へ至る空間が表の空間である。また同



第41図　絵図⑬『江戸下屋敷図』年代不明（方位不明）

様に部屋名称から考えると、建物中央の中庭より右は「富士見新御居間」を最上の部屋とする中奥の空間、中庭の左から左上にかけての空間は「御賄所」を中心とする給仕空間と考えてよい。中庭の上にはL字型の建物があり、渡廊下で繋がれている。このL字型の建物部分のみは貼紙が施されており、間取りが二重になるような描きわけがされていた。柱配置や「上り口」という記載などと合わせて考えるとこの部分は二階建てであったと考えて良いだろう。なお図46では、一階部分の間取りを示している。

表の空間にいたる「玄関」には、屋敷地東隅（図33右下）に描かれた無名の門から至る動線が想定できる。給仕空間へと至る「中ノ口」には、南側の表長屋内に造られた小型の「御末御門」（図33中央下）からの動線が想定できる。

表長屋は間口三間から五間の部屋が連続する形状で、各室には「三間　御物置」などのように、その部屋の間口間数と用途が書かれている場合と、「五間　杉原市平御小屋」などのようにその部屋に詰めていた個人名を書いている場合とがある。なお御殿部分の柱は黒で塗りつぶされた四角形であるが、表長屋部分の柱は黒で塗りつぶされた円形である。図表現を信じるならば、表長屋は角柱ではなく丸柱だった可能性も考えられる。また同図は図中央に御殿を描き、その周囲に表長屋が描くという構成になっているわけだが、御殿部分の一間の寸法と表長屋部分の一間の寸法が明確に違う。御殿部分の一間が、表長屋部分の一間に比して明らかに大きく書かれており、おそらく両建物は図化における縮尺分母が違う。このため仮に先述したとおり、絵図⑬が麻布下屋敷の屋敷地東隅に近い位置を描いた図であったとしても、御殿と表長屋の位置関係を正確に示したものではないという理解が必要である。

絵図⑭　『江戸下屋敷図』（図34）

所蔵：もりおか歴史文化館　資料年代：不明　範囲：部分図

作図：書絵図　彩色：無　方位：無　付箋：有　敷地寸法：無　端書：有

資料状態：絵図⑭は、絵図⑨・⑫・⑬と同封されていた一連の資料である。一枚物の書絵図で折図である。絵図背面に「御下屋敷　北御長屋　御臺所　御同心御長屋　御抱図」とあり、これら建物を描いた図であることがわかる。絵図の表裏に作成年代を示す記載はない。彩色はない。

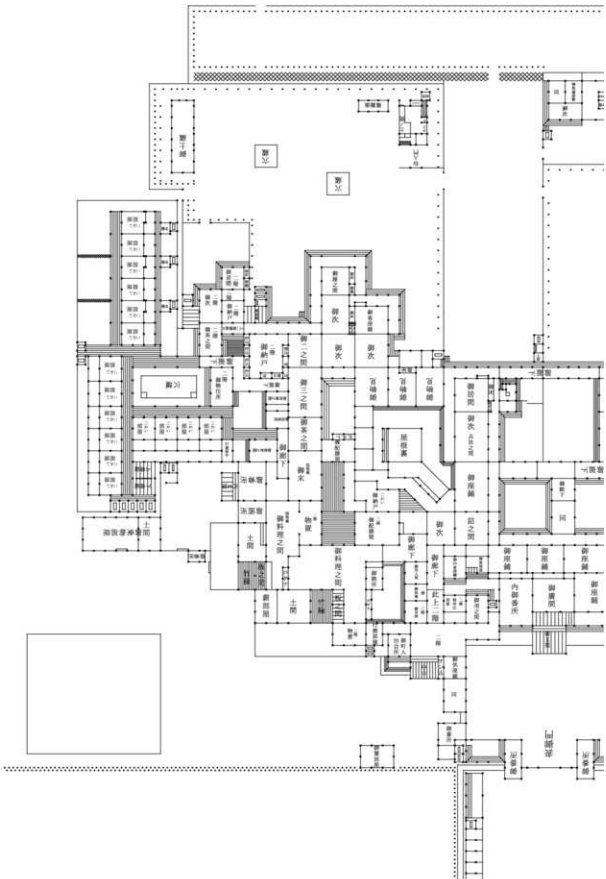
内容：絵図⑭は、三棟の小型建物を一枚の和紙に描いた絵図である。本章の考察対象である八枚の絵図のうち、唯一長屋部分のみを描いている。同絵図は各所に茶色の付箋が貼られており、これに部屋名称や個人名を書いている。図34右の建物には「御用御長屋」と書かれた付箋が貼られており、その用途がわかる。各個室には「中田伊右衛門」や「木下佐太郎」などの個人名が書かれており、その部屋に詰めていた人物がわかる。なお同建物に貼られた付箋に書かれた個人名と、絵図⑬の表長屋に書かれた個人名は一人として一致しない。図34中央の建物には「御湯所」「御勝手」「御物置」と書かれた付箋が貼られており、その主要用途が風呂であったということがわかる。図34左の建物には「御同心長屋」と書かれた付箋が貼られており、やはりその用途がわかる。また絵図⑭に描かれた三棟の建物と同様の形状や間取りを持つ建物が、一連の絵図群の中に存在するかについても確認をしたが、一棟として一致はしなかった。

絵図⑮　『麻布屋敷図』（図35・42）

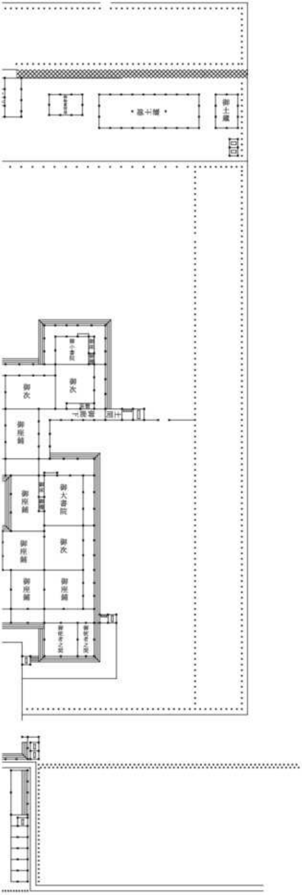
所蔵：もりおか歴史文化館　資料年代：元禄十五年（1702）資料袋書　範囲：部分図か

作図：書絵図　彩色：黒・茶・黄・桃・赤・青・灰・白

方位：無　付箋：有　敷地寸法：無　端書：無



第42図　絵図⑮「麻布屋敷図」元禄十五年（1702）方位不明



資料状態：絵図⑮は多くの彩色が使われた一枚物の書絵図で折図である。同図は絵図と同質の和紙袋に入れられていた。和紙袋には「元禄十五壬午歳　麻布御屋敷　御屋形之絵圖入　三月吉日」と書かれていた。袋書きの筆致は後年のものではなく、絵図に示されたものと同質であり、近世段階のものと判断して良い。

内容：絵図⑮は一棟の大型の御殿を中心に描いている。図42に示した間取りを基に内部空間を分析すると同建物には図右下の「御玄関」、図中央下の「中ノ口」、図左の「内玄関」の三ヶ所の出入口が存在することがわかる。絵図に記載された部屋名称から考えると、「御玄関」を入口とする建物の右1/3の空間が、表に相当すると考えてよい。「表御門」を入り正面に設けられた「御玄関」を入口とし、図右の「御大書院」と「御小書院」へと至る二つの動線が設定されている。一つの入口から、一ヶ所の対面空間へと至る動線のみを設定するのではなく、「御大書院」、「御小書院」という、二ヶ所の対面空間へと至る動線を設定している点が異例であろう。別邸的な性格を強く持つ江戸下屋敷の御殿の場合、対面儀礼を行うような表の空間は軽視され、簡略化される場合が多い。しかし、絵図⑮に描かれた御殿では、表の空間が比較的大きくとられており、これを重要視していたことがわかる。建物中央の中庭部分には「屋根裏」と書かれた三間四方の空間があるが、形状から考えるとこれは能舞台である。

「中ノ口」を入口とする建物中央から左下の空間は、中奥の空間である。またその奥へと続く続き間は「御居間」を最上の部屋とする空間構成をとっている。部屋の名称とその連続性から考えると、この「御居間」が藩主の常居であり、ここから建物中央上の「御寝間」にかけての空間が、藩主の生活範囲であった蓋然性が高い。同じく「中ノ口」を入口として、建物左下へ続く空間は「御料理之間」を中心とする給仕空間である。

「内玄関」を入口とする建物左端1/4の空間は間口二間奥行三間の小型の部屋が並ぶ建物が建てられている。同建物の居室にはただ、「部や」（部

屋）と書かれているのみで、部屋の用途やそこに詰めた諸職の役職名が書かれていない。この為、この部分の用途については特定ができない。なお、ここで挙げた御殿左端の建物群の各室や、先述した「中ノ口」を入口とする諸職の詰所空間や給仕空間では、室名の他に「二かい」や「屋根裏」などの追記が多い。絵図⑮のような木造の大型御殿で、かつ江戸下屋敷のように敷地面積に余裕があるような場合には、基本的に建物は平屋で造られているのだろうという先入観を持ってしまうわけだが、実際的には、建物の上部空間についても積極的な利用を行っていたということが読み取れる。

御殿周囲の施設配置や特徴的な図面表現についても整理しておきたい。門は図42下の「表御門」以外描かれていない。門の前面には左右に馬屋が建つ。御殿の周囲は塀によって区画されており、「御大書院」や「御小書院」などの座敷から見える景観を分節している。塀に沿うように小径の黒丸列が描かれているが、これは塀の控柱かないしは植栽列の表現であろうか。また「表御門」に付属する塀のみは異なる図面表現がなされているが、これは同所の塀のみが土塀であったことを示している可能性がある。御殿中央上には「仙人門」と「御腰掛」を併設した梁間二間桁行四間の小型建物が建てられている。建物の間取りと規模から考えると同建物は茶室である蓋然性が高い。図42上部の空閑地の用途について図中に記載はないが、これに接して「御馬場座敷」という部屋を持つ建物が作られていることから考えると、同所は馬場であったと推断して大過ない。

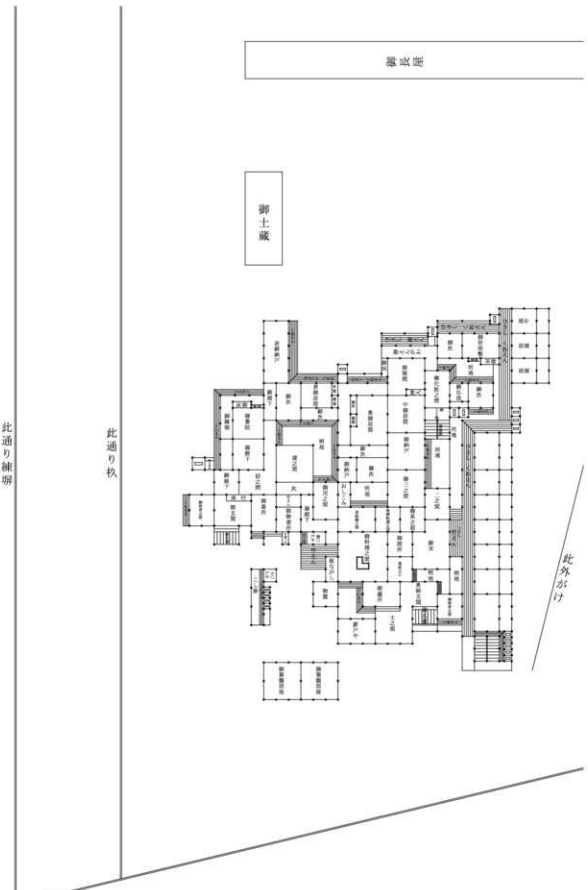
絵図⑯　『下屋鏘御新宅差図』（図36・43）

所蔵：もりおか歴史文化館　資料年代：元禄十五年（1702）資料袋書　範囲：部分図
作図：書絵図　彩色：無　方位：無　付箋：有　敷地寸法：無　端書：無

資料状態：絵図⑯は一枚物の書絵図で折図である。彩色はない。同図は絵図と同質の和紙袋に入れられていた。和紙袋には「元禄十五年　御下屋敷御新宅御差図　七月廿四日」と書かれている。袋書きの筆致は後年のものではなく、絵図に示されたものと同質であり、近世段階のものと判断して良い。

内容：絵図⑯は御殿一棟とその周囲の施設群を描いた絵図で、屋敷地の一部分のみを描いた図と考えられる。図中に方位が書かれていないため詳細は未詳であるが、絵図⑫に描かれた屋敷地の形状と合わせて考えると、絵図⑯は屋敷地東隅の一部分のみを描いた図である可能性がある。

描かれた居室名称から考えると、絵図⑯に描かれた御殿は表・奥・給仕空間・家臣団の生活空間の四つの空間に分節されていた可能性が高い。図43左半の空間は図43左下「御式臺」とこれに連続する「御玄関」を入口とする空間で、この奥にある「御書院」を最上の部屋とする表の空間である。図43右半の空間は、図43右下にある「御式臺」とこれに連続する「奥御玄関」を入口とする空間で、手前は「御料理之間」を中心とする給仕空間、奥は「奥御居間」や「御寝間」、「御居座敷」を中心とする奥の空間である。女性の少ない近世の江戸屋敷でありながら「御化粧之間」の部屋名がみられるなど、女性が多く生活した空間であった蓋然性が高い。図43右端には間口二間から三間奥行三間の居室列が並ぶ建物が二棟造られている。この二棟の建物は絵図⑬の事例と同様に、貼り紙がされており、一階の間取りと二階の間取りを併記する手法をとっている。なお図43では一階平面を図示している。周辺施設に目を向けると、建物の周囲には「御駕籠部屋」「御土蔵」「御馬場」があったことなどがわかる。門や表長屋の記載は見られないが、これは図化を簡略化したということであろうか。御殿の近辺には「此通り枕」「此通り練塀」とあり、杉並木や土塀が存在したことが分かる。図右端には「此外がけ」と書かれている。先述したように麻布下屋敷の地形は御殿が造られた屋敷地中央から東端にかけての平坦地と、西半の庭園部分との間に大きな比高差がある。局所的には崖と形容しても遜色がないほどの高低差がある。



第43図　絵図⑯『下屋敷御新宅差図』元禄十五年（1702）　方位不明

絵図⑰　『御下屋鋪御絵図』（図37）

所蔵：十和田市郷土館　資料年代：不明　範囲：全体図　作図：書絵図　彩色：黒・青・緑・灰
方位：有　付箋：無　敷地寸法：有　端書：有

資料状態：絵図⑰は一枚物の書絵図で折図である。絵図背面には青色の厚紙による表紙がつけられており、表紙中央には「御下屋鋪絵圖」と書かれた題箋が貼られていた。資料自体に絵図の作成年代を示す記載はない。絵図⑰は一見してわかるように絵図⑫と全く同じ内容を持つ絵図である。図や字の内容はもとより、台紙や表紙の質感に至るまで一致している。両資料は同時に造られたか、ないしはいずれかが精巧に造られた写しである可能性が高い。なお絵図⑫は字がくずし字であるが、絵図⑰はくずし字ではない。

内容：絵図⑰の内容は絵図⑫と同内容である。このためここでは詳述をしない。

絵図⑱　『江戸麻布御下屋鋪御新造様御殿之図』（図38・44）

所蔵：十和田市郷土館　資料年代：明和三年（1767）資料端書　範囲：部分図
作図：書絵図　彩色：黒・赤　方位：無　付箋：無　敷地寸法：無　端書：有

資料状態：絵図⑱は一枚物の書絵図で折図である。図背面に表紙と背表紙がつけられているが、表紙には「明和三丙戌十一月　御婚禮前修復此通出来　江戸麻布御下屋鋪御新造様御殿之図」と書かれている。表紙及び背表紙厚紙の質感と筆致は後年のものではなく、絵図に示されたものと同質であり、近世段階のものと判断して良い。

内容：絵図⑱は御殿一棟とその周囲の施設群を描いた絵図で、屋敷地の一部分のみを描いた図と考えられる。また図44右では二ヶ所の渡り廊下が完結せず、途中で切断されるかのような描かれ方をしている。この事から考えると絵図⑯は一棟の御殿全体を描いたものではなく、そのうちの一部のみを図示したものだという理解がなされる。御殿の内部空間は図44下中央の「御玄関」を入口とする。ここから図中央の中庭を通り、「上段之間」に至るまでの範囲が対面空間である。このさらに奥に位置する図44上中央の範囲は「御寝所」を中心とする奥向きの寝室空間である。図44右下は「御料理之間」、「御配膳之間」を中心とする台所空間、図44左にはL字型の建物が建てられている。この建物名称は図示されていないが、これに連続する渡廊下に「長局江之渡縁」とあることから、建物の用途が長局であったということがわかる。長局とは女中などが生活する空間の事で長屋のように一棟の長い建物を細かく間仕切りし使用する特徴がある。図中に描かれた間取りもこれと整合する。このことから考えると、建物のうちの図左半の空間は、女性が多く存在する空間であった蓋然性が高い。

4．5　江戸下屋敷　資料の正否と各絵図作成の背景

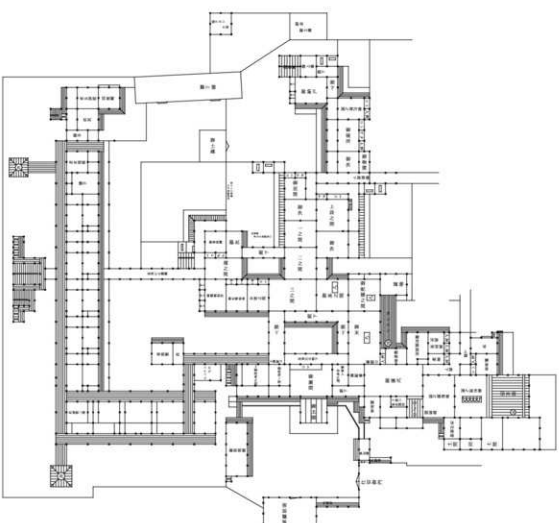
前節では本章の研究対象である八枚の絵図について内容の整理を行った。いずれの資料も、端書きや袋書きに「下屋敷」や「麻布屋敷」などの記載がみられるわけだが、描かれた内容については異同もみられ、整合しない点も多い。本節では前節で紹介した八枚の絵図が、本当に麻布下屋敷を描いたものであるかについて、もう一度検討を行い、資料としての正否を明確にしたい。

1）絵図⑪

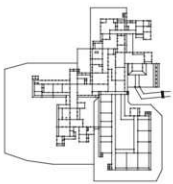
八枚の絵図を比較し、一番初めに気づくことは、絵図⑪の異質性だろう。本章の資料に挙げた八枚の絵図のうち、長屋の一部分のみを描いたと考えられる絵図⑭を除く七枚に、御殿ないしは屋敷と形容しても良い規模の建物が描かれているわけだが、絵図⑪にはこれがない。絵図⑭を除く七枚の絵図

に描かれた全ての御殿を同縮尺にして並べ、規模を比較したものが図45であるが、一見してわかるように絵図⑪に描かれた建物は極端に規模が小さい。また、建物内の室名や空間の連続性などを比較してみても絵図⑪には違和が多い。八枚の絵図に描かれた御殿・屋敷のうち、建物内部の部屋名称などについても記載している史料は六点あるが（絵図⑪・⑬・⑭・⑮・⑯・⑱）、絵図⑪にのみ見られる特徴は多い。例えば床や棚を持つ部屋が少なく、代わりに「押込」（押し入れ）や、小型の炉を設ける部屋が多いなど、まるで住居としての機能性を優先したかのような間取りである。

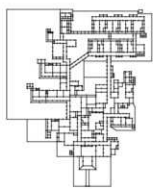
屋敷地北東隅に「御成門」を持つという点も異質である。御成りとは、建物の所有者である主人よりも身分的に上位にある客人がその邸宅を訪問する場合などに使われる語である。江戸の大名屋敷を例に考えるならば、徳川将軍が大名の屋敷に訪れた場合などに使う語であるし、あるいは国許で大名が、城下にある自らの家臣の屋敷を訪れる場合などにも使われる。屋敷を訪問する資客は、日常屋敷の住人たちが使っている表門や裏門を使わず、御成門から屋敷地内へと入る。また同様に日常使われている玄関や中之口などの出入口を使わず、そのまま建物内の最上位の空間である表の空間に通されるなど、日常の動線とは全く異なる動線が使われるというのが通例であった。絵図⑪に描かれた建物の室名称をみると、建物内の表の空間は北東隅の「御玄関」から南東隅の「御座敷」までの範囲であるということが読み取れる（図39）。また空間の連続性から考えると、その最深部に位置する「御座敷」が、最も上位の居室であったということも理解できる。事実絵図⑪に描かれた屋敷の空間構成を



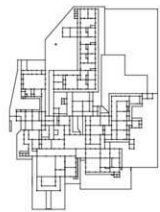
第44図　絵図⑱『江戸麻布御下屋鋪御新造様御殿之図』明和三年（1767）　方位不明



絵図⑪『江戸下屋敷図』
富士見御殿　年代不明　下が南東

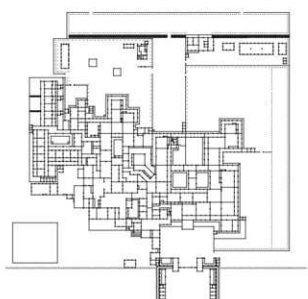


絵図⑫『江戸下屋敷図』
芝木御殿　年代不明　下が南東



絵図⑬『江戸下屋敷図』　年代不明　方位不明

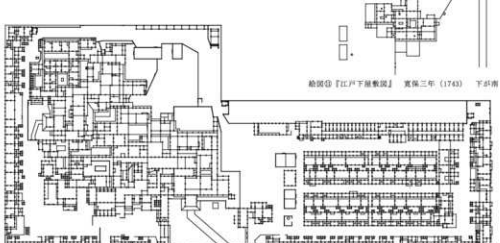
絵図⑭『下屋敷御新宅原図』　元禄十五年（1702）　方位不明



絵図⑭『麻布屋敷図』　元禄十五年（1702）　方位不明

絵図⑮『江戸麻布御下屋敷御新造様御殿之図』
明和三年（1767）　方位不明

絵図⑯『江戸下屋敷図』　寛保三年（1743）　下が南



参考　絵図④『江戸上屋敷図』　文化三年（1806）　下が南

第45図　絵図⑪・⑫・⑬・⑮・⑯・⑱の規模の比較（全て縮尺約1：2000）

確認すると屋敷の住人たちが日常に使用したであろう「表御門」「裏御門」と「御成門」の間には塀が築かれており、動線と視線が遮断されている。また、この塀が存在することより、「御成門」から「御玄関」へと至る動線も切られており、建物内の最上位の居室である「御座敷」へと直接至るように設計されている。このように絵図⑪に描かれた屋敷は、規模の小さい建物でありながらも、最低限の御成りを実現できる諸条件を満たしているということがわかる。論旨を絵図⑪の資料判定に戻そう。絵図⑪は袋書きの記載から寛保三年（1743）の成立が確定的な資料である。徹底した身分社会であった近世において御成りは一大行事であり、その準備は周到になされた。御成りに合わせて御成門を新造したり、建物の表の空間を改築したりする場合もあるなど、屋敷の主人は御成りに合わせ、様々な準備を行った。そのため、御成りが実現する場合にはその記録が多く残されるわけだが、寛保三年に前後する資料中に、将軍・宮家・摂家などの貴人が盛岡藩南部家のいずれかの江戸屋敷を訪問したという記録は残されていない。仮に同年に前後して御成りがあった場合、大なり小なり記録が残されるはずであるが、これがない。また前章で考察の対象とした外桜田上屋敷を描いた絵図（絵図①～⑨）や、本章の考察対象である他の絵図の中に一棟も「御成門」が造られていないというのも奇異である。これら諸条件を前提に考えると、絵図⑪を盛岡藩南部家のいずれかの江戸屋敷の一部であると比定することは難しい。

また絵図⑪に言及するうえで、一番重要なのは南東隅に書かれた「御田屋清水出御門」という記載であろう。御田屋清水は盛岡城の北の内堀である亀ヶ池の北西に現存する名泉で、藩政期には盛岡城内の飲用水として使われていた。つまり絵図⑪に書かれた屋敷は、麻布下屋敷内にあったものではなく、盛岡の御田屋清水の北にあった蓋然性が高い（註1・2）。

以上ここでは絵図⑪が麻布下屋敷を描いた絵図であるかについて分析を行った。先述した建物の異質性と「御田屋清水出御門」という記載を理由とし、絵図⑪が麻布下屋敷を描いたものではないと判断しても問題はないだろう。よって本稿では以降絵図⑪を考察の対象から除外する。

2）絵図⑫・⑰

次に、絵図⑫と絵図⑰について考えたい。絵図⑫・⑬・⑭の三枚は、外桜田上屋敷を描いた絵図⑨と一緒の和紙袋に同封されていた一連の資料で、袋書きや端書などに絵図の作成年代は書かれていない。このうち外桜田上屋敷を描いた絵図⑨については、前章中で分析を行っており、宝永三年から文化三年三月（1706～1806）までの年代幅に収まる資料であろうと比定した。当然、同封されていた資料の全てが同年に作成されたものであるとは限らないわけだが、絵図⑫・⑬・⑭もこれに近い年代の資料である可能性は大きく、江戸時代中期前半から後期前半頃にかけての資料群とみるべきものだろう。絵図作成の背景を特定する場合、資料中に絵図作成の経緯が書かれていない場合もある。このような場合には絵図の作成年代に前後する年代の文献資料類にあたり、絵図に描かれた建物の被災記録や工事記録を探すという手順をとるのが一般的である。しかし絵図⑫～⑭は予想される成立年代の幅が広く、この手法が有効ではない。このためここでは、両絵図成立の背景についての考察は控え、絵図⑫・⑰が麻布下屋敷を描いたものであるかについてのみ検討を行いたい。

敷地形状や遺存する庭園空間の類似性から考えると両図は、麻布下屋敷を描いたものと考えて問題が無い。問題はこの絵図に描かれたとおりの富士見御殿と並木御殿が実際に存在したのかという点にあるわけだが、現存する建物や発掘成果との比較を行えない以上断定を行うことは難しい。なお近世段階の文献資料中には富士見御殿と並木御殿の名前が頻出するので、実際にこの二棟の御殿が長く存在したことは間違いない。なお『内史略』后十八には、安政二年（1855）十月二日の江戸大地震の被

害報告が書かれている。これによると同日の地震で外桜田上屋敷は倒壊焼失し、ほぼ全壊したということがわかる。麻布下屋敷も塀は残らず倒壊し、長屋も一棟潰れるなどしたようだが、御殿は無事であったということもわかる。また外桜田上屋敷で被災した藩主や家臣らが麻布下屋敷に避難し、仮住まいをした記録も書かれているのだが、これによると、藩主、御老中、御近習廻御役方は富士見御殿に入り、それ以外は並木御殿に入ったと書かれている。つまり、この記載から近世末期段階においても麻布下屋敷には富士見御殿と並木御殿という名前の二棟の御殿があったということがわかる。また藩主や老中が富士見御殿に入り、役職の無い家臣らが並木御殿に入ったところから考えると、二棟の御殿のうちでも、富士見御殿の方がより格上の建物として認識されていたということも理解できる。

論旨を絵図⑫・⑰の性格特定に戻そう。絵図⑫・⑰の最大の特徴は、屋敷中の建物のみを描いた図ではなく、敷地全体を描いているという点にある。つまりそこに建てられていた建築の情報が欲しかったから作図されたと考えるよりも、建物と敷地の関係性や、ないしは庭園などの土木に関わる情報が欲しかったからこそ作られた図面であると考えるべきものだろう。更に付け加えると、絵図⑫・⑰がなんらかの工事に関連して造られた図面であった場合、工事内容に関する書き込みが多くみられるはずである。あるいは工事範囲のみを描く図面になるはずだが、両図にはこれらの特徴がみられない。事実、絵図の作成年代として比定される江戸時代中期から後期前半にかけての期間中に麻布下屋敷で大きな土木工事があったという記録は確認できない。以上を勘案すると、絵図⑫・⑰は何らかの行事や事業に関連して造られた絵図と考えることが難しい。単純に絵図作成時の麻布下屋敷の現状図であると推論するのが穏当であろうか。

3）絵図⑮・⑯

次に絵図⑮と⑯を対象とし、資料の正否と絵図の性格について検討を行いたい

絵図⑮と⑯はともに袋書きがあり、成立年代がわかる資料である。絵図⑮は袋書きに「元禄十五壬午歳　麻布御屋敷　御屋形之絵圖入　三月吉日」、絵図⑯も袋書きに「元禄十五年　御下屋敷御新宅御差図　七月廿四日」と書かれおり、両資料は同年に作成されたものだということがわかる。

元禄十五年（1702）の文献資料を読むと、同年二月十一日に江戸で大火があり、麻布下屋敷も大きな被害を受けたということがわかる。『雑書』元禄十五年二月十九日条には「一、於江戸去十一日辰下刻内藤宿より出火、北風烈青山宿・百人町・麻布・弐本榎・三田・芝・品川・鈴ヶ森迄焼失、西刻火鎮申由、右之火事ニて御下屋敷御本屋、重信様御家、其外惣御長屋・御山御茶屋不残焼失、御道具入候御土蔵ハ何も残申由、雑物入候御土蔵ニ焼失候得共、御道具不残相出申由、芝御蔵屋敷別条無之由、依之重信様・主税（政信）様渋屋御屋敷へ御退、若殿（久信）様御上屋敷へ被為入、奥様ニは毛利甲州様へ被為入。主計（勝信）様ニは白銀御屋敷へ御退、何も様御恙無御座候旨、去十二日付北九兵衛より申来」とあり、麻布下屋敷の多くの建物が焼亡したことがわかる。また元禄十五年二月段階の盛岡藩藩主は五代藩主南部行信であるが、この段階で藩主用御殿（御下屋敷御本屋）とは別に、隠居である四代藩主重信の御殿（重信様御家）が存在していたということも分かる。建物の名称については未詳であるが、この段階ですでに麻布下屋敷は二棟の御殿を持つ状態であったらしいことが読み取れる。

『雑書』元禄十五年三月廿九日条には『一、浅布御屋敷御作事之絵図出来仕候付、御入用諸材木雌子太左衛門目論見為登候之様可仕旨藤枝宮内仰被仰付、右絵図写宮内所より太座衛門へ差下、御役人共申談、材木員数考上候之様ニとも可申渡旨、去ル十九日付北九兵衛より申来　一、御下屋鋪内塀材木為登可申旨別紙御書付来、勝手能所ニて申付候様、腰板、かさ板などとは田名部より為登可申由　御

意之旨、藤枝宮内より同日付申来』とある。三月末の段階で早くも新築工事の図面ができたことがわかるわけだが、この記録と絵図⑮の日付である元禄十五年三月吉日は整合する。この日付の整合から考えると、絵図⑮は元禄十五年の火災で焼亡した麻布下屋敷の新築工事に関係し作成された図面であった蓋然性が高い。なお前節でも触れたとおり絵図⑮は多くの彩色が使われた見栄えのする図面である。台紙も厚手で上等のものを使っているうえ、筆致にも優れるなど優品と評して良い。図面の完成度を含めて考えるならば、工事現場で使う携帯用の簡便な図面などではなく、藩に提出した正式な図面であったと考えるべきものだろう。『雑書』元禄十五年五月十四日条には「一、御普請奉行度々被仰付、火事之節も殊外働候由御聞、其上当年もねり塀御用御留被成候由ニて、於江戸御金被下」とある。普請奉行の意見に汲み、塀は防火性の高い「ねり塀」（土塀）を選択した。事実、絵図⑮の「表御門」は袖塀の図表現は土塀の存在を想起させるものであるし、また絵図⑯には「此通り練塀」と記載されている（図43）。文献資料と絵図の図表現の整合から考えるとこの大火を契機に麻布下屋敷では土塀が重要視されるようになったようだ。『雑書』元禄十五年六月七日条には「一、江戸御下屋敷柱立五月廿一日、同廿五日棟上首尾能相済候由、日戸五兵衛より申来る（以下略）」とあり、五月下旬には棟上げが済んだことがわかる。棟上げ後も当然工事は続くわけなので、絵図⑯の日付である元禄十五年七月二十四日も違和はない。絵図⑯もまた絵図⑮と同様に元禄十五年の火災で焼失した麻布下屋敷の新築工事に関係して造られた図面であった蓋然性が高い。しかし、絵図⑮・⑯の建物が麻布下屋敷内に実際に存在したかについてまでは特定ができない。発掘調査による建物跡の情報や、建物の内部を詳細に記述した文献資料が存在しない以上、実体性のある比較が行えない。他例では、工事に際し複数の設計案が作成される場合もあり、絵図面が存在したからといって、そこに描かれた建物が実際には存在しない場合もある。これは資料と研究手法による限界と言えるだろう。

なお絵図⑮は前節でも述べたように表の空間を重要視している。この他にも、表御門を大きく造るなど、一見すると江戸上屋敷であるかのような構成を持っている。しかし図45で行った比較でも明らかなように絵図⑮は外桜田上屋敷の敷地内に収まらない。元禄十五年三月に前後して外桜田上屋敷の工事記録が存在しないことと併せて考えると、絵図⑮が外桜田上屋敷を描いた絵図であるという推論は成立しない。

4）絵図⑱

絵図⑱は図背面に貼られた表紙に「明和三丙戌十一月　御婚礼前修復此通出来　江戸麻布御下屋鋪御新造様御殿之図」と書かれており、絵図の制作年と作成の背景が特定できる。事実、明和三年十一月（1767）前後の文献資料にあたると、同年十一月九日に盛岡藩のいずれかの江戸屋敷において、盛岡藩九代藩主南部利謹と、筑前福岡藩六代藩主黒田継高六女麻姫の結納が行われている。また同月十九日には麻姫の入輿（輿入れ）があり、この縁組は実際に行われている。資料表紙にあるように絵図⑱は明和三年十一月のこの縁組に先立ち、御新造様（麻姫）が生活をする予定の麻布下屋敷の御殿を改修した際に造られた図面として理解して良い。なお雑書明和三年十一月十九日条によると、麻姫の輿入れに伴い、福岡藩から御附役一名と御用聞二名が同行していることがわかる。事実図44右下には「御附役詰所」と「御用聞詰所」があり、この記載と整合する。

またこれも雑書にあたると、同年の春あたりから、この縁組の準備役を命じられた盛岡の家臣が、江戸に登る記録が多く残されている。一方で盛岡の大工がこれに合わせて江戸に登った記録は残されていない。この事から考えると麻姫輿入れに関わる改修工事は江戸で雇い入れた大工を中心に行われた蓋然性が高い。

謝辞

本稿執筆に際し、下記機関及び個人よりご協力を賜りました。ここに記し深甚の謝意を表します。

麻布警察署盛岡町交番、東京都立中央図書館、十和田市郷土館、八戸市立図書館、もりおか歴史文化館

野沢江梨華氏、船場昌子氏、松澤香理氏、山崎武氏、山野友海氏（五十音順）

註

(1)盛岡藩のいずれかの江戸屋敷内に、御田屋清水と同名の清水が存在した可能性はないか、という視点を持って文献資料も読み直したが、この限りではなかった。

(2)盛岡藩士横川良助（安永三年～安政四年（1774～1858）の著作である『内史略』前十八には御田屋清水について「一　御田屋清水　御新丸の後に有　盛府第一の冷泉にて　公供御茶の水に備ふるのみ　御当家秘書曰　慶長の頃迄は此所を清水屋敷と云由見得たり　主図合結を按るに此所北東に小路を隔て屋敷一軒有　昔の御屋敷也　或曰　御田屋清水の名三戸御城より移させたまふにや　三戸御城中にも清水有て　今に御田屋清水と唱ふ」とある。つまり盛岡の御田屋清水の名前の由来は、三戸城内にあった同名の清水であると記しており、絵図Ⅰが近世段階の三戸城内の屋敷を描いたものである可能性もわずかに残る。

執筆及び作業分担・図版出典

本稿の執筆分担は以下のとおりである。全文＝中村。

資料調査・資料翻刻・写真撮影・作図などの作業は共著者で分担した。

資料調査及び写真撮影に際しては松澤香理氏にご協力いただいた。作業分担及び図版出典は以下のとおりである。

図30　中村作図

図31　もりおか歴史文化館蔵『江戸下屋敷図』野田撮影　中村編集

図32・33・34　もりおか歴史文化館蔵『江戸下屋敷図』野田撮影　中村編集

図35　もりおか歴史文化館蔵『麻布屋敷図』野田撮影　中村編集

図36　もりおか歴史文化館蔵『下屋敷御新宅差図』野田撮影　中村編集

図37　十和田市郷土館蔵『御下屋鋪御絵図』中村撮影編集

図38　十和田市郷土館蔵『江戸麻布御下屋鋪御新造様御殿之図』中村撮影編集

図39　原図　もりおか歴史文化館『江戸下屋敷図』中村作図翻刻　滝尻翻刻

図40・41　原図　もりおか歴史文化館蔵『江戸下屋敷図』中村作図翻刻　滝尻翻刻

図42　原図　もりおか歴史文化館蔵『麻布屋敷図』中村作図翻刻　滝尻翻刻

図43　原図　もりおか歴史文化館蔵『下屋鋪御新宅差図』中村作図翻刻　滝尻翻刻

図44　原図　十和田市郷土館『江戸麻布御下屋鋪御新造様御殿之図』中村作図翻刻　滝尻翻刻

図45　上記図39～44と同じ　中村作図

参考文献

岩手県文化財愛護協会　1974『内史略（３）』岩手史叢第３巻

1975『内史略（５）』岩手史叢第５巻

熊谷考　1980『南部史要全』復刻再版　熊谷印刷出版部（底本　菊池悟郎　1911『南部史要』九皐堂）

東京市　1932『東京市史稿　市街編第十四』

東京都　1970『東京市史稿　市街編第四十九』

中村隼人・滝尻侑貴・野田尚志　2018「江戸の南部屋敷（１）－盛岡藩南部家江戸上屋敷の研究－」『紀要第37号』（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

中村隼人・滝尻侑貴・野田尚志　2019「江戸の南部屋敷（２）－盛岡藩南部家江戸上屋敷の研究－」『紀要第38号』（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

前島康彦　1981『有栖川宮記念公園』郷学舎

竪穴建物に伴う外延溝（4）

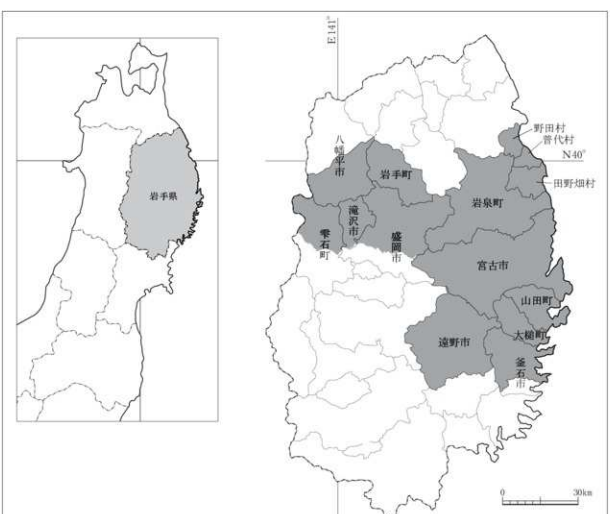
－古代陸奥国巌手・幣伊郡域の在り方－

山 川 純 一

古代陸奥国巌手・幣伊郡域で調査された竪穴建物に伴う外延溝の集成を行い、属性（竪穴建物の時期・規模・構造、外延溝の構造など）ごとにまとめた。巌手郡域で１遺跡１例（９世紀後半～10世紀）、幣伊郡域で２遺跡２例（２棟とも８世紀前半）を確認した。

１．はじめに

筆者は、これまで３度にわたり、古代陸奥国における竪穴建物に伴う外延溝を集成し、検討を進めてきた。前稿（山川2019）では、古代陸奥国和我・稗縫・斯波三郡をとりあげた結果、12棟を確認し、そのうちの何棟かは、壁柱穴やロクロピットを伴うことなどから、土器（土師器・須恵器）生産、鍛冶に関わって、水を用いた作業を行う工房であった可能性が高いことを再認識した。



第１図　本稿の対象とした地域

本稿では、古代陸奥国巌手郡・幣伊郡における竪穴建物に伴う外延溝を集成し、若干の検討を加える。現在の行政区分で、岩手県盛岡市（北上川西岸の雫石川以南および北上川東岸の簗川－栃沢－岩神山以南を除く）、雫石町（雫石川－竜川－荒沢－大焼砂沢－横岳以南を除く）、滝沢市、岩手町、八幡平市（いわゆる平成の大合併以前の安代町を除く）が古代巌手郡域、釜石市（唐丹町を除く）、遠野市、大槌町、山田町、宮古市、岩泉町、田野畑村、普代村、野田村が古代幣伊郡域にあたるものと考え、６市５町３村（ただし盛岡市、雫石町、八幡平市、釜石市は一部を除く）を対象とした（第１図）。

古代巌手郡に南接する古代斯波郡には、延暦22（803）年、志波村（のちの斯波郡）に律令政府による征夷の拠点である志波城が造営され、さらに弘仁２（811）年正月、和我・稗縫・斯波三郡が建てられた。斯波郡にはのちの巌手郡の一部も含まれていたとする説もあるが、文献での初見は『大和物語』（10世紀中頃成立）とされる。

古代幣伊郡は、律令政府による建郡の記録が残されていないが、『続日本紀』霊亀元（715）年10月29日条に、「請於閇村、便建郡家」とあり、奈良時代初頭には権郡として存在していたとの考えもある。東は太平洋、西は江刺・和我・稗縫・斯波・巌手の５郡、南は気仙郡、北は糠部郡と接する広大なエリアである。当郡域を指す「幣伊村」は、「爾薩体村」（のちの糠部郡域）とともに、弘仁２（811）年、征夷将軍文室綿麻呂によって征討が行われたとされる。

２．竪穴建物に伴う外延溝の構造

今回集成したのは、３遺跡（第２～４図、第１表）３棟（第５・６図、第２表）である。

北東北古代集落遺跡研究会により刊行された『９～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』によれば、今回の集成範囲のうちの巌手郡から62遺跡192棟の竪穴建物が確認されているが、そのうち、外延溝を伴うものは僅かに１棟ということになり、僅か約0.5％を占めるにすぎない。また、前掲書によれば、幣伊郡から27遺跡415棟の竪穴建物が確認されているが、これらには外延溝が伴うものはない。

確認した３棟すべてが外延溝が竪穴建物の一辺の途中から建物外に延びるものである。また、外延溝に瓦や土器片を敷設・架構して暗渠状施設としているものはみとめられない。

３．外延溝を伴う竪穴建物の規模・火処・性格・年代

規模：長辺１ｍ台のもの、３ｍ台のもの、４ｍ台のものがそれぞれ１棟である。

火処：カマド２棟、ないもの１棟である。

性格：夏木遺跡ＡＪ７住居跡状遺構からは、鉄滓が出土しており、鍛冶工房の可能性がある。

年代：８世紀前半が２例、９世紀後半～10世紀が１例である。

遺跡名	所在地		立地	種別	時代	古代の郡域
芦名沢Ⅰ遺跡	盛岡市	玉山区馬場字馬場平	山地	集落	縄文・平安	巌手郡
夏木遺跡	大槌町	大槌第24地割	扇状地	集落	縄文・古代	幣伊郡
上村貝塚	宮古市	磯鶏第３地割	丘陵	集落・貝塚	縄文～平安	

第１表　古代陸奥国巌手郡・幣伊郡域における竪穴建物に伴う外延溝が確認された遺跡の概要

第２図　古代巖手郡の領域と主要な遺跡（本稿で扱った遺跡◎、数字は遺構平面図・一覧表に対応）

第３図　古代幣伊郡南部（閉伊川以南）の領域と主要な遺跡
（本稿で扱った遺跡◎、数字は遺構平面図・一覧表に対応）

第4図　古代幣伊郡北部（閉伊川以北）の領域と主要な遺跡

1　芦名沢Ⅰ遺跡
6号住居跡

S=1/80

第５図　古代厳手郡における竪穴建物に伴う外延溝

４．今後の課題

今回の集成作業では、厳手郡・幣伊郡という広大な範囲を対象にし、３例を確認した。

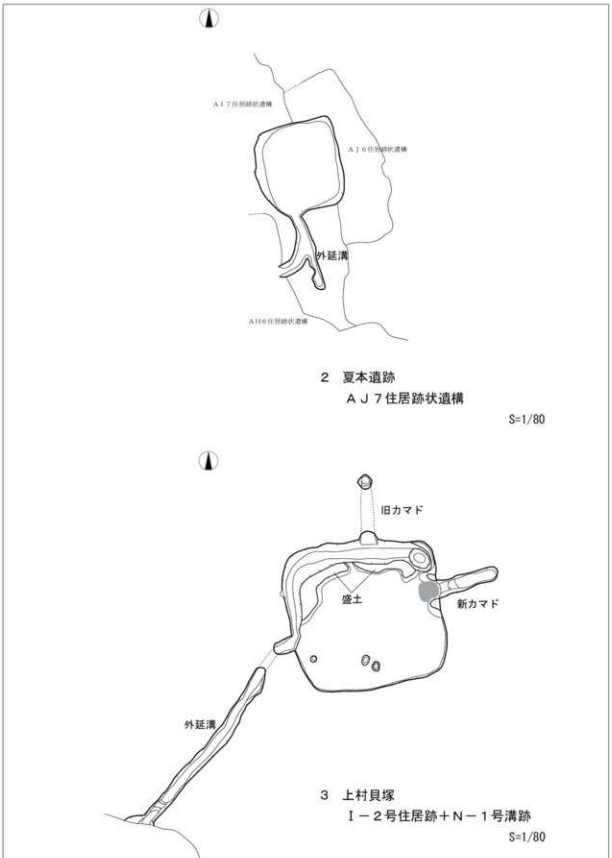
厳手郡は、志波城・徳丹城が所在する斯波郡に北接するところであるが、１例のみの確認である。また、幣伊郡からは２例を確認するに留まった。南西部（現在の遠野市）エリアでの類例は確認できなかった。

分布状況だけでみれば、前稿で検討した磐縫郡（管見では類例がない）と厳手郡・幣伊郡は、似た傾向があるのかもしれない。まだ集成作業の途上だが、今回の集成範囲のさらに北側に位置する糠部郡（爾薩体エリア）では、少なくとも八幡平市安代・二戸市・一戸町に類例が存在することを確認しており、このことと対照的である。

謝辞

本稿を草するにあたって、次の方々や関係機関から御指導・御協力を戴きました。記して感謝の意を表します（50音順・敬称略）。

阿部勝則　伊東　格　及川真紀　金子佐知子　川向聖子　黒田篤史　酒井宗孝　篠原理恵
杉本　良　村上　拓　村田　淳　吉岡由哲　　遠野市教育委員会　山田町教育委員会



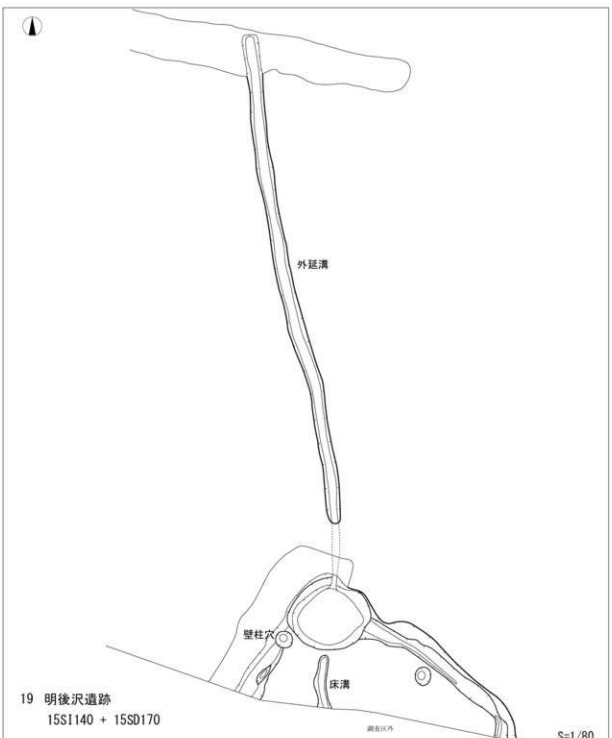
第６図　古代幣伊郡における竪穴建物に伴う外延溝

掲載図番号	遺跡名	遺構名	長辺(約m)	短辺(約m)	平面形	壁高(約cm)	底面	柱穴・ピット	火処	周溝	外延溝	時期	備考	文献
1	芦名沢Ⅰ遺跡	6号住居跡	4.2以上	3.4	隅丸長方形	25～40	平坦。北半～中央部は硬化面が認められるが、南壁付近は軟弱。	なし	カマド	北西コーナーの土坑（規模は90×60cm、用途は水溜が想定されている）から北壁に沿って東方向に直線的に延びる。その中央付近から南に向かって床溝が分岐する。カマド前面の竪穴部中央の溝上端の角が上からつぶされて押し広げられたような状態となっていることから、調査者は、床板が敷かれていた可能性を指摘している。	周溝の中央付近から南に向かって分岐した床溝が竪穴部外まで続く。長さ約0.9m、幅20cm、深さ10cm前後。	9世紀後半～10世紀	床面直上にはカマドから連続する焼土ブロック・炭化物が広がり、その上にも焼土層がある。中央部では構築材とみられる炭化材が多く確認された。廃絶時にカマドが意図的に壊されたのちに廃失・倒壊したとみられる。さらに上層に灰白色火山灰がまんべんなく混入（2次堆積）しながら埋没したと考えられる。	岩手県埋文1999
2	夏本遺跡	ＡＪ７住居跡状遺構	1.85	1.8	隅丸方形	40	平坦で堅く締まる。	なし	なし	なし。	南壁の南西隅寄りから南方向に直線的に延びる。長さ約1.6m、幅25～30cm、深さ5～10cm。さらに途中から湾曲し西に向かって分岐する。長さ約0.7m、幅30cm。	8世紀前半	鉄滓出土。工房か。	岩手県埋文1989
3	上村貝塚	Ⅰ-2号住居跡＋N-1号溝跡	3.25	3.2	隅丸方形	10～35	ほぼ平坦。中央部寄りの床上には径10～25cm大の亜円礫が散在。	3個	カマド（2時期あり、旧期：北→新期：東）	東カマドの直ぐ脇にあたる北東コーナーにある土坑と連結する。北壁の全てと西壁の北半にめぐる。幅20～40cm、深さ5～20cm。その南側は、竪穴部の床面よりも若干高くなるように盛土されている。	西壁中央付近から竪穴部外（西側）に直線的に短く延びた後、屈曲して南西に向きを変える。長さ約5.2m、幅25～35cm、深さ15cm。断面形は逆台形状で、底面は平坦。	8世紀前半	—	岩手県埋文1991

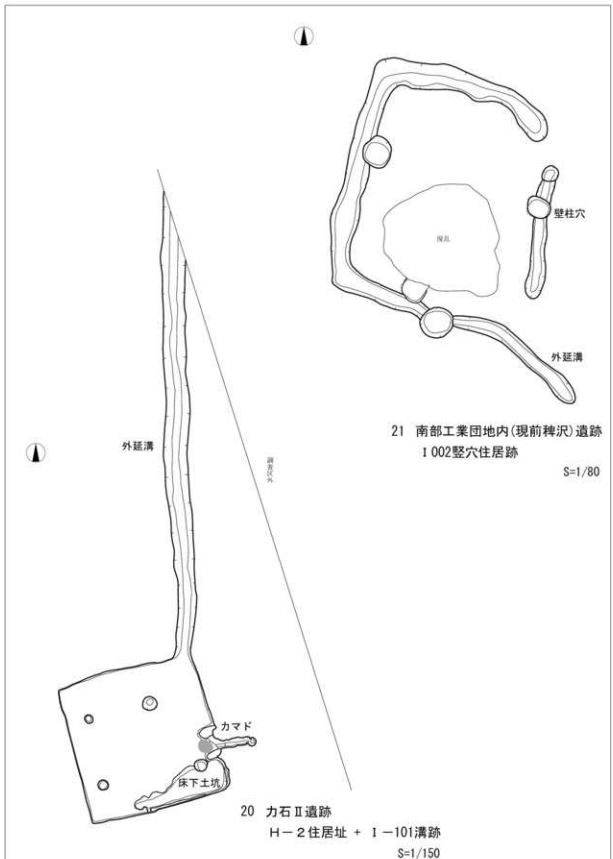
第２表　古代巌手郡・幣伊郡における竪穴建物に伴う外延溝

（付編）

山川純一　2018　「竪穴建物に伴う外延溝（2）―古代陸奥国磐井・胆沢・江刺郡域の在り方―」『紀要』第37号　岩手県埋蔵文化財センター　執筆後、胆沢郡域で１遺跡１例（１棟）、江刺郡域で２遺跡２例（２棟）の遺漏に気付いた。ここに補遺として掲げる。



第７図　古代胆沢郡における竪穴建物に伴う外延溝（8）



第８図　古代江刺郡における竪穴建物に伴う外延溝（２）

遺跡名	所在地		立地	種別	時代	古代の郡域
明後沢遺跡	奥州市	前沢古城字明後沢・姥沢・前堰	台地	集落、城館？	平安	胆沢郡
力石Ⅱ遺跡	奥州市	江刺愛宕字力石	沖積微高地	集落	縄文・古代・中世	江刺郡
南部工業団地内（現前稗沢）遺跡	北上市	相去町前稗沢	丘陵	集落	平安	

第３表　古代陸奥国磐井・胆沢・江刺郡域における竪穴建物に伴う外延溝が確認された遺跡の概要（補遺）

掲載図番号	遺跡名	遺構名	長辺（約m）	短辺（約m）	平面形	壁高（約cm）	底面	柱穴・ピット	火処	周溝	外延溝	時期	備考	文献
19	明後沢遺跡	15ＳＩ140＋15ＳＤ170	4.2	2.4以上	隅丸長方形	30～40	ほぼ平坦。貼床は中央部以外に薄く均一に貼られる。	２個（壁柱穴１、その他１）	未詳、調査区外か	全周する。深さ約10cm。また、北西コーナーの土坑ＫＩ付近から南東・北西方向の床溝がある。	長さ8.6m、幅20cm、深さ20cm前後。北西コーナーの土坑ＫＩ（直径１m、深さ30cm）から80cmほどがトンネル状に掘り込まれ、さらに北西方向に直線的に延びる。	10世紀前半	本遺跡からは、多数の粘土採掘坑が確認されている。	前沢町教委2005
20	力石Ⅱ遺跡	Ｈ－２住居址＋Ｉ－101溝跡	5.8	5.7	ほぼ方形	20	全体的に柔らかく不明瞭。	主柱穴４個	カマド	なし。	北東隅から北方向に直線的に延び、調査区外へと続く。長さ19m以上。上幅65～90cm前後、下幅25cm前後で、南側が僅かに狭くなる。深さは、南端で20cm前後、北端で50cm前後で、北側に緩やかに傾斜している。断面形は逆台形状。	９世紀後葉～10世紀初頭	床下土坑１基（Ｐ５）があり、土師器坏・甕、須恵器坏、鉄製品刀子が出土。この住居からは、ほかに多様な器種の土師器、須恵器甕・瓶、多量の鉄製品（合計17点）、鉄滓、土錘、石錘が出土している。	岩手県埋文1979
21	南部工業団地内（現前稗沢）遺跡	１002竪穴住居跡	3.5	3.0	方形	20	—	４個（壁柱穴３、その他１）	床面南側が焼けているが、明確でない	東壁で２ヵ所途切れるほかは、ほぼ全周する。幅10～40cm、深さ10cm。	南東隅から竪穴部外に直線的に延びる。長さ約1m。	10世紀初頭	—	北上市教委1995

第４表　古代磐井郡・胆沢郡・江刺郡における竪穴建物に伴う外延溝（補遺）

引用・参考文献

<論文等>

（本編）

北東北古代集落遺跡研究会　2014　『9－11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』

山川純一　2019　「竪穴建物に伴う外延溝（3）―古代陸奥国和我・稗縫・斯波郡域の在り方―」　『紀要』第38号　岩手県埋蔵文化財センター

<報告書>　※埋蔵文化財センター：「埋文」　教育委員会：「教委」と省略　報告書シリーズ名省略

（本編）

岩手県埋文　1989　『夏本遺跡発掘調査報告書－国道45号大槌バイパス関連遺跡発掘調査－』　第134集

岩手県埋文　1991　『上村貝塚発掘調査報告書』　第158集

岩手県埋文　1999　『芦名沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書－東北新幹線盛岡・八戸間建設事業関連遺跡発掘調査－』　第295集

（付編）

岩手県埋文　1979　『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書（岩手県江刺市力石Ⅱ遺跡・兎Ⅱ遺跡・落合Ⅲ遺跡・朴ノ木遺跡）』　第８集

北上市教委　1995　『南部工業団地内遺跡Ⅱ』　第18集

前沢町教委　2005　『明後沢遺跡群第７・10・15次発掘調査報告書－ほ場整備事業絋沢上野地区に伴う発掘調査－』　第18集

古写真の研究資源化

－久田佐助関連古写真を事例として－

吉岡由哲

昨今、古写真の研究資源化が著しい。デジタル化・データベース化などこれまでに報告されてきた実践例を概観するとともに、明治期の青函連絡船船長・久田佐助にまつわる古写真群のアーカイブ作業と史料紹介をおこなう。また、生前に久田が書いたとみられる手紙や弔辞類の翻刻もおこなう。

1．はじめに

2000年代初頭から科学研究費事業や私学助成事業を活用して、大学や博物館が蒐集してきた膨大な写真史料群の悉皆調査が進められている。特に、明治末から史料調査を支えたガラス乾板写真は、いまデジタルデータへのマイグレーション期にあるといってよい。2010年代には、アーカイブやデジタル化にまつわる事例が報告されるようになり、手引き書となる出版物も相次いで刊行されている。本稿は、昨今の古写真アーカイブ事業にまつわる動向を概観したうえで、平成27年（2015）より筆者がすすめてきた久田佐助関連古写真のアーカイブ活動について紹介する。

2．写真の研究資源化と事例紹介

写真の学術利用は、明治５年（1872）の壬申検査や、同じ時期にW.Gowlandが撮影した考古コレクションなど、日本写真史のかなり早い段階からみられる。この頃に写された「映像」が、いまとなっては失われた史料や史跡を知る手がかりとして再評価され、一次史料として扱われるようになりつつある。こうしたなか、各地の学術機関で写真史料の整理・デジタル化の試みが報告されている。

2－1．国内の写真史料調査・研究資源化の動向

学術機関が蒐集した写真史料への関心の高まりは、管見の限り平成12年（2000）前後とみられる。たとえば、東京大学史料編纂所所蔵のガラス乾板への注目（註１）や、國學院大學日本文化研究所が所有する大場盤雄、折口信夫、柴田常恵らの写真史料の調査がおこなわれた（註２）。昨今では、企業が所有する写真史料（註３）や、明治期の原住民研究の事例（註４）も報告されている。

実務的な論考では、東北芸術工科大学東北文化研究センター（註５）や大阪市立大学（註６）の事例、北海道大学の大学所蔵資料にかかわる編纂事業報告書（註７）では、デジタル化の手法や目録作成など具体的な紹介がなされている。久留島典子ら編『文化財としてのガラス乾板』（勉誠出版、2017年）は、明治期以来の写真技法の判別、デジタル化、保存について体系的にまとめられている。

2－2．岩手県立博物館所蔵の写真史料

当センターの所在地、岩手県内の歴史史料にまつわる写真史料の存在も報告されている。たとえば、小田島氏、小岩氏の考古写真史料が岩手県立博物館に収蔵されている。

小田島禄郎氏（1881～1953）は、岩手県内で教員として勤務するかたわら、精力的に史学調査をおこなった人物である。小田島氏が蒐集した考古学資料の一部が岩手県立博物館に収蔵されており、約14000点にのぼるコレクションのなかに、写真史料164点が確認されている。そのなかには、コロタイ

プ製版にともなう「膜面返し」を施したガラス乾板も確認されている(註8・9)。

小岩末治氏（1923～2000）は、岩手県内の教員としてキャリアをスタートし、考古分野の県史編纂にも携わった人物である。小岩氏の死去に際し、自宅で保管されていた諸資料が岩手県立博物館に寄贈されている。コレクションのうち2541点の写真史料が確認されており、ガラス乾板２点、紙焼き1866点、フィルム類は460点を数える(註10)。

３．史料紹介　久田佐助関連古写真

久田佐助は、石川県鳳珠郡能登町出身の青函連絡船東海丸の船長である(註11)。明治36年（1903）に発生した東海丸沈没事故では、我が身をかえりみず救助活動をおこない、その勇姿は、昭和初期の教科書「小学国語読本」「初等科修身」に掲載されるほど大きな反響をもたらした。これまで知られてきた久田の肖像は、救出談に付された１点の肖像画のみであったが、このたび筆者が実施した調査で、新たに16点の古写真がみつかり、先行研究に基づく技法の特定と保存措置をおこなった(註12)。また久田が書いたとみられる手紙や文書、没後に寄せられた弔辞類の存在があきらかになった。

３－１．久田佐助関連古写真の調査

久田佐助関連古写真の調査は、時期をわけて２回実施した。第１回は、平成27年（2015）７月９日から10日にかけて、史料が寄託されている鵜川公民館（石川県鳳珠郡能登町鵜川）にて、筆者ほか、黒田智、鳥谷武史、石垣孝芳の３名の協力を得て、目録の作成、デジタルデータ化、および先行研究に基づく保存措置を施した。第２回は、平成29年（2017）６月27日に保存状態の経年確認をおこなった。また、久田佐助にかかわる文書の熟覧・撮影を、平成28年（2016）10月28日に実施した。

調査の結果、古写真16点、関連史料102点が確認された。古写真すべての史料目録と、関連史料のうち、久田の履歴書や直筆の手紙類、久田の写真に言及のある書状を翻刻し本稿に附録した。

写真を被写体別に整理すると、久田佐助の肖像写真が４点、佐助の妻であるキク（旧姓新田）の肖像写真が２点、佐助の母ノワの肖像写真が１点、家族写真が１点、商船学校の学友との集合写真が３点、船員との集合写真が１点、風景画や記録写真が３点、被写体不明の人物写真が１点確認された。また、写真技法を判別したところ、アルビューメンプリント（鶏卵紙）14点、シルバーゼラチンプリント１点、コロジオン湿板ネガ１点であることがわかった(註13)。技法の判読には、James M. Reilly著『Care and Identification of 19th-Century Photographic Prints』（Kodak Books、1998年）を参考にし、顕微鏡をもちいて画像層や支持体を観察した。

３－２．劣化の度合い

写真史料16点のうち数点は、化学的・生物的劣化が見受けられた。適切な対処方法を選定するため、顕微鏡をもちいて劣化箇所の撮影をおこなった〔拡大写真〕(註14)。目立ったものを挙げると、〔拡大写真Ｃ・Ｄ〕では、かつて写真表面に接していた包装紙の繊維や墨書が乳剤に癒着していることがわかる。〔拡大写真Ｅ〕ではカビ、〔拡大写真Ｆ・Ｉ〕では乳剤の剥離が確認できる。〔拡大写真Ｋ〕は、鶏卵紙が台紙から剥がれ、画像層も退色し黒化しつつある。そのほか、コロジオン湿板ネガでは画像層の乳剤にひび割れが発生し、膜面の剥離も確認された。

３－３．先行研究に基づく保存作業

調査以前の保管状況は、小型の台紙付写真は２～３点ずつ、ガラス写真や大型の台紙付写真は１点

ずつ和紙に包まれた状態で、薄い杉板で作られた木箱内に平積みされていた。初回調査実施時の気温は約22度、湿度は約80%の梅雨時期のところ、空調管理されていない場所に保管されていたため、物理的損傷リスクのほか、黄変やカビなどの化学的・生物的劣化のおそれがあった(註15)。

写真の適切な保管環境については、JIS（日本工業規格)(註16)やISO（国際標準化機構)(註17)によって定義されている。具体的には、「長期」(500年）と「中期」(10年）によって基準が分けられており、今回の事例では中期保存基準に則った。

JISでは、中期保存に適した条件として、最高温度25度、湿度20～50%、24時間を通して、気温の変動は5度、湿度は10%を超えないものとしている。北陸の気候特性からして、梅雨時期や冬期には湿度の高い状態が連日続くことが予想されるため、密封性のある小型の防湿庫のなかに調湿剤を封入し、外部から湿度が分かるよう、防湿庫に湿度計を内蔵した(註18)。

梱包・包装資材も変更した。従来の梱包方法は、数点をまとめて和紙で包まれていたが、台紙裏面の墨書、あるいは包装紙が写真に癒着・転写したと思われるものがあり、個別化することにした。包装資材は、化学的、物理的ダメージを与えない保存用包装資材の規格がISOによって定められており(註19)、史料形態にあわせた資材が通信販売で購入可能である。台紙付写真は1点ずつ保存用エンベロープに封入し、中性厚紙で作られた中箱内に平置きした。中箱は水平を保ったまま防湿庫に収めた。コロジオン湿板ネガは、支持体の損傷を予防するため、ガラスと同じ厚さのアートボードを切り抜き、外枠を作成した(註20)。また、支持体と画像面の保護のため、外枠ごとアートボードで上下を挟み、エンベロープに封入した。エンベロープは、台紙付写真と同様に中箱に封入し、防湿庫に収めた。エンベロープには、開封せずとも外部から封入物が分かるようナンバリングを施し、目録と対応させた。

3－4．撮影時期の比定

久田佐助関連古写真の多くは、台紙裏に記された墨書から、久田が乗船していた船名や肩書き、被写体の装束を照合しておおよその撮影時期を割り出すことが可能である。例えば、目録番号14をみると勲五等瑞宝章が確認でき〔拡大写真J〕、久田が受章した明治28年（1895）頃に撮られたものと推測することができる。一方で、撮影時期が不明なものも数点ある。目録番号10は被写体や墨書から時期を特定する情報が得られなかったため、台紙裏に施された台紙の意匠から、年代の比定をおこなった。先行研究によれば、ある一定期間ごとに台紙のデザインを更新していたことがあきらかになっている(註21)。検討の結果、明治20年（1887）頃に撮影されたものと比定される。久田佐助関連古写真のうち、写真師・田本研造の台紙を、附録「台紙の意匠と年代」に抽出した。今後、意匠の類例を蓄積することで、より精緻な年代比定が可能となるであろう。

4．おわりに

明治期以降に撮影された写真の学術的価値が評価されるなか、事例紹介としてとりあげられるのは研究機関や企業体がほとんどである。明治後期には写真というメディアがすでに市民権を得ていたことを考えれば(註22)、一般家庭などに眠る古写真にも目を向けなくてはならない。博物館のように保存に適した環境を整備・維持することは難しく、運用コストがかからず、かつ化学的・生物的劣化を遅延させる手法を普及させる必要がある。各地での実践例の共有のほか、オープンサイエンスの観点から、可能な限り目録の公開にも期待したい。

註

(1)小林聡　1999「ガラス乾板の収蔵調査と保護対策」『東京大学史料編纂所研究紀要』9。

(2)國學院大學学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」（文部科学省学術フロンティア事業

表　久田佐助の実績と各史料の対応関係

時期	事績	目録番号	写真史料との対応関係	史料番号	文書史料との対応関係
元治元年（1864）	石川県鳳珠郡能登町鵜川に生まれる				
明治16年（1883）	鵜川小学校の教員になる				
明治19年（1886）	北海道に渡る			1	6月 履歴書
明治20年（1887）	箱館商船学校に入学	10	入田と梅津の写真		4月9日 葛子：塾監補申付候事
明治21年（1888）					6月1日 書状：義長を命ず
明治22年（1889）		2 3	定期試験後の集合写真 入田佐助の肖像写真		
明治23年（1890）	箱館商船学校と東京商船学校が合併				
明治24年（1891）		4	琴ノ緒丸		
明治26年（1893）	東京商船学校卒業、日本郵船株式会社に入社	1	卒業試験後の集合写真		3月20日 東京商船学校練習船・琴緒丸下船の辞令 5月12日 海軍省予備員・少尉候補生に進ずる辞令
明治27年（1894）	日清戦争に従軍、勲六等瑞宝章	6	久田キクの肖像写真		12月19日 封筒：差出「横浜硫酒酒田丸　久田佐助」
明治28年（1895）	義和団事件に従軍、勲五等瑞宝章	7、11 14	久田佐助の肖像写真 久田佐助の肖像写真		
明治30年（1897）		13	久田家の集合写真		
明治31年（1898）		8	南仁浦の墓近景		
明治33年（1900）		9	三河丸船員の集合写真（～明治36年カ？）		9月28日 封筒：差出「清国太沽ニテ 仁川丸 久田佐助」
明治35年（1902）				2	12月26日 封筒：差出「函館港三河丸　久田佐助」 （史料2が同封されていたか？）
明治36年（1903）	6月、青函連絡船・東海丸の船長に就任 10月29日、東海丸沈没事故により死亡			3 4 5	9月29日 はがき：差出「青森東海丸　久田佐助」 12月2日 書状 12月17日 書状
大正～昭和年間		12	久田キクの肖像写真		

選定：平成11年度～平成17年度）など。

(3)北山由紀雄　2018「音敏紡績関連ガラス写真に関する研究（1）」『日本写真芸術学会誌』27-1。

(4)清水純　2018「ガラス乾板のなかの黄望家の人々」『台湾原住民研究』12、竜 如竜　2011「写真原板保存の重要性に関する考察」『台湾原住民研究』15など。

(5)井筒純子　2012「ガラス乾板のデジタル化と課題」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』11。

(6)宮田則也　2012「写真乾板のデジタル化及び保存について」『大阪市立大学史紀要』5。

(7)2009～2011年度文部科学省科学研究費基盤研究B 大学博物館所蔵古写真の現代的意義に関する研究（研究代表：加藤克）。

(8)岩手県立博物館編　2000『岩手県立博物館収蔵資料目録』第16集 考古V 小田島コレクションその4　財団法人岩手県文化振興事業団。

(9)國學院大學学術フロンティア事業シンポジウム「画像資料の考古学」（2000）では、熊谷常正氏が小田島コレクションの事例紹介をおこなっている。

(10)岩手県立博物館編　2005『岩手県立博物館収蔵資料目録』第18集 考古資 小岩末治コレクション その1　財団法人岩手県文化振興事業団。

(11)本稿での「青函連絡船」は、便宜上、明治41年（1908）以降の鉄道連絡船ではなく、明治12年（1879）から明治43年（1910）までに日本郵船が運航していた青函航路を結ぶ船をさす。

(12)久田佐助をめぐる議論考は、拙著 2020「肖像写真の胎動－久田佐助コレクション－」『草の根歴史学の未来をどう作るか』文学通信 に詳しい。

(13)そのほか、新田キクの肖像１点が函館市中央図書館に残されていることがあきらかになった。

(14)撮影にあたっては、デジタル一眼レフカメラを使用し、銀鏡撮用CマウントアダプタをキャノンEFマウントに変換した。

(15)JIS K7644 写真－現像処理済み写真乾板－保存方法。

(16)ISO 3897 [Photography - Processed photographic plates - Storage practices].

(17)ガラス乾板および白紙つき写真の劣化と保存方法については、竹内涼子　2015「史料編纂所所蔵ガラス乾板の劣化と保存方法の考察」『東京大学史料編纂所』25　を参考にした。

(18)空調設備のない環境下における文化財保管については、秋山純子ら　2019「空調のない被災文化財の一時保管場所における様々な保管容器内の環境調査」『東風西声：九州国立博物館紀要』14に詳しい。気温変化には対応できないものの、密閉容器内に調湿剤を入れることで、湿度変化を年間15%程度におさえられることが示されている。

(19)ISO 18916 [Imaging materials - Processed imaging materials - Photographic activity test for enclosure materials].

(20)具体的な手法については、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター 2014『「ガラス乾板の調査・保存・研究資源化に関する研究」予稿集』東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター　を参考にした。

(21)佐藤清一　1999『箱館写真のはじまり』幻洋社。

(22)緒川直人ら　2012『写真経験の社会史』岩田書院。

表面

裏面

裏面（翻刻）

明治二十六稔五月十二日
東京商船学校大試験
ヲ了リタル節写之
左　武藤鎌四郎
中　八柳栄次郎
右　久田佐助

目録番号	1	卒業試験後の集合写真			撮影年月日	明治 26 年（1893）5 月 12 日
写真師名		田中 武			サイズ（本紙）	長辺 10.7cm× 短辺 7.4cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	A	サイズ（台紙）	長辺 12.8cm× 短辺 8.2cm 厚さ 1.25mm
備考		3 名の学生服姿の男ら、画像面に光沢あり、本紙を金泊で縁取る				

表面

裏面

裏面（翻刻）

時維明治二十二年
十月十一日定期試
業ヲ終リ休暇
中在校生等残
写之後日再会
ノ時迄大切ニ所持
スル事ヲ約ス

目録番号	2	定期試験後の集合写真			撮影年月日	明治 22 年（1889）7 月 11 日
写真師名		田本 研造			サイズ（本紙）	長辺 14.4cm× 短辺 10.2cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	B	サイズ（台紙）	長辺 16.4cm× 短辺 10.8cm 厚さ 1.20mm
備考		白制服姿の男ら、画像面の黄変、支持体に傷、包装紙				

表面

裏面

裏面（翻刻）

明治二十二年
七月二十日

目録番号	3	久田佐助の肖像写真			撮影年月日	明治 22 年（1889）7 月 20 日
写真師名		田本 研造			サイズ（本紙）	長辺 9.3cm× 短辺 5.1cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	C、D	サイズ（台紙）	長辺 10.6cm× 短辺 6.5cm 厚さ 1.16mm
備考		円枠、半身像、白い制服姿、画像面にカビか？、包装紙に「浜中」の印				

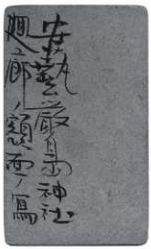
表面

裏面

裏面（翻刻）

明治二十四稔三月十八日琴ノ緒丸
乗組中学校ヨリ砲術練習艦ヘ改造
ニ付徴集ノ命アリ　二十二日帰還ノ途ニ就
ク　四月一日函館ヲ発シ四月東京ヘ着五日
横ス賀ヘ行　七日ヨリ課業ヲ初メ七月十
七日卒業証書授与セラレ十八日東京ヘ
帰校ス此□十九名ニテ第二期ナリ　久田

目録番号	4	琴ノ緒丸			撮影年月日	明治 24 年（1891）3 ～ 7 月頃
写真師名		不明			サイズ（本紙）	長辺 9.0cm× 短辺 5.6cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	E	サイズ（台紙）	長辺 10.0cm× 短辺 5.8cm 厚さ 0.66mm
備考		白制服姿の男ら、画像面の黄変、支持体に傷				

表面	裏面	裏面（翻刻）
		安芸嚴島神社 廻廊ノ額面ノ写

目録番号	5	嚴島神社額（中国仙人図か）		撮影年月日	不明
写真師名		不明		サイズ（本紙）	長辺 9.1cm× 短辺 5.4cm
プリント技法	鶏卵紙	拡大図版	ー	サイズ（台紙）	長辺 10.6cm× 短辺 6.4cm 厚さ 1.08mm
備考	中国風の男女、右上部に５字、左下に２～３行の文章あり、掲載図版は画像補正済 画像面に光沢、包装紙に「細川」の印				

表面	裏面	裏面（翻刻）
		明治廿七年三月廿二日 新田キク

目録番号	6	久田キクの肖像写真		撮影年月日	明治 27 年（1894）3 月 22 日
写真師名		田本 研造		サイズ（本紙）	長辺 9.6cm× 短辺 6.3cm
プリント技法	鶏卵紙	拡大図版	ー	サイズ（台紙）	長辺 10.7cm× 短辺 6.5cm 厚さ 1.14mm
備考	女性半身像、結髪、向かって右斜め向き、着物に羽織、画像面に光沢、 本紙を金箔で縁取る				

表面	裏面	裏面（翻刻）
		明治二十八年十二月 広島ニ於テ写之

目録番号	7	久田佐助の肖像写真		撮影年月日	明治 28 年（1895）12 月
写真師名	野々垣 五一			サイズ（本紙）	長辺 11.6cm× 短辺 8.3cm
プリント技法	鶏卵紙	拡大図版	F	サイズ（台紙）	長辺 13.2cm× 短辺 8.9cm 厚さ 1.26mm
備考	背広姿の男性全身像、右手ひじをつき、左手はポケット、髭、短髪、カーテン・テーブルのセットあり、本紙を金箔で縁取る、包装紙に「□浜□」の文字				

表面	裏面	裏面（翻刻）
		時明治三拾壱稔 一月十八日尾張丸 乗船中故南州 翁之墓ニ詣シ為 紀念此ノ一葉及ビ 一幅ヲ併セ購フ 久田佐助

目録番号	8	南□翁の墓近景		撮影年月日	明治 31 年（1898）1 月 18 日
写真師名	不明			サイズ（本紙）	長辺 11.8cm× 短辺 8.7cm
プリント技法	鶏卵紙	拡大図版	G	サイズ（台紙）	長辺 16.6cm× 短辺 10.8cm 厚さ 1.26mm
備考	段上に石燈籠、墓石、墓地の遠景、□部分は州か？、画像面に光沢				

表面　　裏面　　裏面（翻刻）

目録番号	9	三河丸乗組員の肖像写真			撮影年月日	明治 33 年（1900）～ 36 年（1903）
写真師名		田本 研造			サイズ（本紙）	長辺 20.1cm× 短辺 13.5cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	H	サイズ（台紙）	長辺 30.3cm× 短辺 18.8cm 厚さ 1.36mm
備考		9 名の船員、船内救命浮輪の前、前列 5 人は座し、中央の久田は右手を肘掛、左手を膝上、やや向かって左斜めの体勢、背広姿、包装紙に「浜」の文字、画像面に光沢				

表面　　裏面　　裏面（翻刻）

目録番号	10	久田と梅津の写真			撮影年月日	明治 20 年頃か？
写真師名		田本 研造			サイズ（本紙）	長辺 11.8cm× 短辺 8.7cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	–	サイズ（台紙）	長辺 16.6cm× 短辺 10.8cm 厚さ 1.40mm
備考		和装（羽織）の男性青年 2 人の立像、台紙に面取り跡、画像面に光沢				

表面

裏面

裏面（翻刻）

明治二十八年十二月
広島ニ於テ写之
久田佐助
干時三十二年二月

目録番号	11	久田佐助の肖像写真			撮影年月日	明治 28 年（1895）12 月
写真師名		野々垣 五一			サイズ（本紙）	長辺 11.5cm× 短辺 8.2cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	I	サイズ（台紙）	長辺 13.1cm× 短辺 8.9cm 厚さ 1.22mm
備考		包装紙、画像面に欠損、光沢				

表面

裏面

裏面（翻刻）

久田キク

目録番号	12	久田キクの肖像写真			撮影年月日	不明
写真師名		不明			サイズ（本紙）	長辺 9.7cm× 短辺 7.1cm 厚さ 0.30mm
プリント技法		シルバーゼラチンプリント	拡大図版	−	サイズ（台紙）	
備考		着物、下駄、羽織姿の老女、両手を膝に乗せ座る、人物のみをトリミングか、 両面下部に青色の汚損、画像面は微光沢				

表面　裏面　裏面（翻刻）

目録番号	13	久田家の家族写真			撮影年月日	明治 30 年以降
写真師名		中村 貞治			サイズ（本紙）	長辺 11.6cm× 短辺 8.5cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	–	サイズ（台紙）	長辺 13.5cm× 短辺 8.7cm 厚さ 1.22mm
備考		男２人、女２人、着物に羽織、裏書□は手偏に九か？、本紙を金箔で縁取る				

表面　裏面　裏面（翻刻）

目録番号	14	久田佐助の肖像写真			撮影年月日	明治 **28** 年頃か？
写真師名		田本 研造			サイズ（本紙）	長辺 9.1cm× 短辺 5.8cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	J	サイズ（台紙）	長辺 11.2cm× 短辺 6.8cm 厚さ 1.06mm
備考		船服姿の半身像、帽子、右手はポケット、裏書なし、画像面に微光沢				

表面

裏面

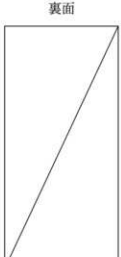
裏面（翻刻）

□（東カ）海丸船長
久田佐助君ノ
□（母カ）久田ノハ

目録番号	15	久田ノワの肖像写真			撮影年月日	明治 30 年以降
写真師名		中村 貞治			サイズ（本紙）	長辺 9.2cm× 短辺 6.2cm
プリント技法		鶏卵紙	拡大図版	K	サイズ（台紙）	長辺 10.8cm× 短辺 6.5cm 厚さ 1.16mm
備考		女性半身像、着物、裏書あり、画像面の黄変・退色・汚損、支持体の汚損・剥離				

表面

裏面



裏面（翻刻）

目録番号	16	学生 3 人の肖像写真			撮影年月日	不明
写真師名		不明			サイズ（本紙）	長辺 9.9cm× 短辺 7.4cm 厚さ 2.92mm
プリント技法		コロジオン湿板	拡大図版	L	サイズ（台紙）	
備考		学生 3 人、左は足を開いて座り両手は膝、中央は向かって左斜めに立つ、右は座す、画像面の退色・剥離、支持体に亀裂、掲載画像はネガを反転し画像処理を施した				

久田佐助関連文書（河合元一氏所蔵）

〔史料一〕履歴書

履歴書

石川縣能登国鳳至郡
鵜川村十九字七十五番地平民
久田佐助
元治元年十一月晦日生

一　明治八年五月鵜川小学校ヘ入学尋常小学校卒業ノ後退学
一　明治十三年六月ヨリ同村橋本勇次ニ候ヒ和漢学修業
一　同十四年八月ヨリ同村稲谷秀諦ニ就キ漢学修業
一　同十六年一月ヨリ鵜川小学校教員月俸金六円ニテ勤務同年八月ニ至リ病気ニヨリ辞職
一　同十八年八月鳳至郡第四番学歴学務委員筆生月俸五円ニテ勤務罷候
一　明治十八年十一月ヨリ本年五月マデ鳳至郡沖波小学校授業生月俸金四円九捨銭ニテ在勤罷在候處帝船学校志願ニ付辞職
一　此外賞罰ニ関スル事件無之候
前書ノ通リ相違無之候也

右

明治十九年六月　日　久田佐助

前書履歴ノ通相違無之候也

石川縣鳳至郡鵜川村前ヶ村戸長
多田六藏

〔史料二〕書状

寒気強ク相成候處、益御壮健ニ御座候ハヽ、次ニ小生も無事、消光罷在候間、乍憚御休神可被下候、陳者、伏木ヨリ送付之蜜柑箱ハ此頃馴遠ノ事ト存候、本船ハ去二十二日舟川へ着候處、入港後大時化ニテ、昨二十五日迄荷役も難出来、今日午前十時函館へ着、午后四時出帆、小樽へ航行仕候、来年ノ元日ハ舟川ヨリ佐渡入港之豫定ニ御座候へ共、時化相続申、昨日午前中央気象台ヨリ警報も有之候ニ付、何トも豫定通りニハ難行ト存候、今航、復航ニハ、四日七尾へ寄港、二日教賀へ向ケ出帆之豫定ニ御座候、金拾円也、郵便為替ヲ以テ、御送付申候間、御受取可被下候、右當用迄、草々

久田佐助

河合喜太郎殿

（追伸）（鍵に上）及豊一も壮健ニ御座候、

〔史料三〕葉書

〔宛名〕

能登國鳳至郡鵜川村字鵜川
河合喜太郎様
青森東海丸
久田佐助
九月二十五日

〔通信面〕

益御壮健ト遠察、大慶、母上様御病気も冷気ニ相成伏キ方ニ御座候由、喜居候、陳者一昨二十三日午後ヨリ昨日中ハ近来稀ナル暴風雨ニテ、其地ハ被害等無之候哉、御伺申上候、本船ハ一昨二十三日午後五時室蘭ヲ発シ候處、港外ハ非常に高浪且風吹募り候ニ付、室蘭ニ引返シ、昨日午後十時風和ギ出帆、今午前九時三十分青森へ着仕候、右御通知旁如此ニ御座候、早々、

〔史料四〕書状

拝啓、いまだ拝顔の栄を得ず候へども、一筆申上候、扨過般東海丸沈没に際しての御主人様の御最后、誠にご立派にて、普く天下の称賛する美事にして、小生の如きも数回津峡海峡は往来し而、親しく御姿に接をし事あるもの、轉た御同情に堪へず候、まし而その令夫人たる御許様の御心如何あらんかといろ〳〵と御遠察致居候事に御座候、小生幸と書籍業を致し居候者、此美譚を永く〳〵国民の心に印象致（〃）せしめ度存じ、當地師範学校の先生に著作を乞ひ、廣く全国にわかたん計画にて、別封郵便を以て十二部お送り申候、唱歌東海丸發行致し候、小生の微志御納め下され候はゞ幸に御座候由、二部御地小学校へ一部宛御寄附下され度、願上候、尚誠に願ひ兼ね候へども、故御主人様の御写真一葉拝借御願ひ申度、折入て御頼み申候、郵送費として郵券封入致し置候間、何分宜敷御願ひ申上候、先は右申上度、早々

十二月二日　富貴堂主人

中村信以

久田菊子様

御許に

〔史料五〕書状

書添、久田氏の写真を当市縣廳・市役所に有之候由に付、之れは当日松山寺二借来候、霊牌にテ祭り追而可致候へ共、茂に角法衣あらば承知致度候や

拝啓、時下寒気相加はり候處、益々御健勝にて御奉務被為在候はんと賀入申候、扨て傳聞候處に就ては御親戚久田佐助殿船長たりし東海丸先般不幸にも沈没シ、為めに同氏も極力船員を救助せんと勉められつゝも、終に水中の藻屑と消え失せ給ひシ由、誠に驚き入申候、嘸かシ御悲傷の御事と察入申候、就ては當市内曹洞宗寺院共同にて諸溺死者のため、来る本月廿日を以て、当市八坂松山寺に於て追吊法会執行致度心組候て、只準備中に有之候處、若シ御地にて久田氏の送儀御執行相成法名有之候はゞ承知致幸ひに此法会に追吊せんと存候間、御手数の儀恐入候へ共、最早日子も無之候に付、此状輪次第大急御送付被下、至極願上候、先は真の御悔と共に御照会のみ、如斯に御さ候、

恐々不具

十二月十七日

金澤市内曹洞宗寺院

総代

永福寺住職

大橋東源

河合喜三郎殿

〔付記〕

久田佐助関連古写真・関連史料の調査、および本稿への史料掲載をご快諾くださった鵜川公民館・鍋谷幸恵氏、河合元一氏に深甚の謝意を申し上げる。また久田佐助関連文書の翻刻にあたり、黒田智氏（金沢大学）・小西洋子氏（金沢大学人間社会環境研究科博士後期課程）のご協力を賜った。記して御礼申し上げる。

台紙の意匠と年代

久田佐助関連古写真のうち、写真師・田本研造が撮影した台紙付写真で、撮影時期がおおよそ特定できているものを左に列挙した。

①目録番号 10
明治 10 年～明治 20 年代に使用が確認されている。「HAKODATE JAPAN」の下に「浅沼製造」の印字がはいっているものもある。

②目録番号 2
管見の限り、簡素なデザインの台紙が紹介されている例はすくない。

③目録番号 6
同じデザインが明治 29 年に確認されている。明治 27 年～ 29 年のデザインには、「田本研造」の印字の下に整理番号を記す欄が設けられているものもある。また明治 27 年以前の台紙には、函館港の画がない（下記図版参照）。「HAKODATE JAPAN」下の罫線の装飾が異なるものが明治 32 年～ 33 年にみられる。

④目録番号 14
同じデザインが明治 41 年に確認されている。

①明治 20 年（1887）頃カ

②明治 22 年（1889）

③明治 27 年（1894）

④明治 28 年（1895）頃

田本研造が発行した台紙の類例

『箱館写真のはじまり』（幻洋社、1999 年）より

明治 10 年代

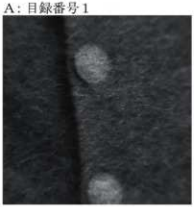
明治 21 年（1888）

明治 26 年（1893）

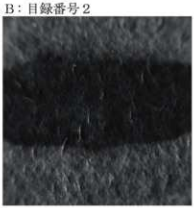
明治 41 年（1908）

拡大写真

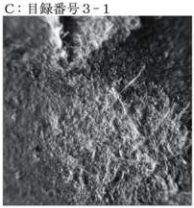
A：目録番号1



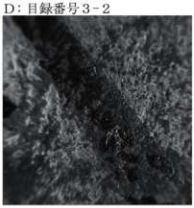
B：目録番号2



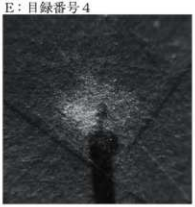
C：目録番号3－1



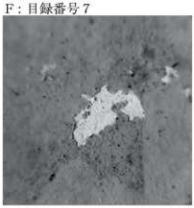
D：目録番号3－2



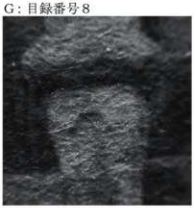
E：目録番号4



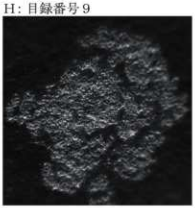
F：目録番号7



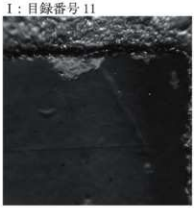
G：目録番号8



H：目録番号9

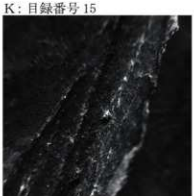


I：目録番号11

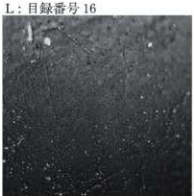


J：目録番号14

K：目録番号15



L：目録番号16



一関市河崎の柵擬定地出土緑釉陶器の再検討

村田　淳

一関市河崎の柵擬定地で出土した緑釉陶器について筆者は報告書で小壺と報告したが、近年風炉（火舎）や鍾といった別の器種ではないかとの見解が示された。そのため、本稿では実測を含めた資料の再観察を行い、この緑釉陶器の器種や用途、遺跡から出土した意義について検討を行う。

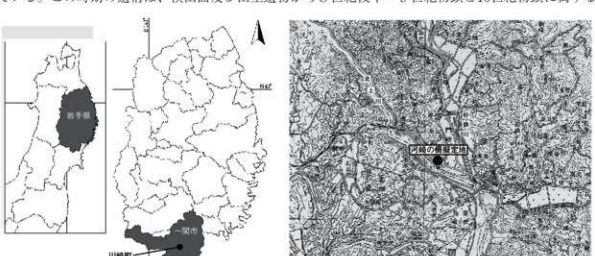
はじめに

河崎の柵擬定地は、岩手県南部の一関市川崎町（旧川崎村）門崎に所在する（第１図）。川崎町は岩手県を南北に縦断する北上山地の西南部に位置し、東北地方北部最大の一級河川である北上川の東～北岸に立地している。北上川には支流である砂鉄川と千厩川が流れ込んでおり、遺跡は北上川と砂鉄川の合流地点の北西側約600m付近の自然堤防上に立地している。発掘調査は、北上川床上浸水対策特別対策事業に係り岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成12～16年に実施している。調査区は北上川の流路に沿って北西－南東方向に長く、５ヵ年で27,525㎡を発掘調査した。

この遺跡から出土した緑釉陶器について筆者は小壺（以下、本資料とする）として報告を行ったが（岩手県埋文2006、以下『報告書』と表記）、近年本資料に対して異なる器種とする見解が示された（高橋2018）。確かに当時の検討では無頸の小壺の類例を確認することができず、小壺と断定できる確証が得られないまま報告を行っており、筆者自身も疑問を抱えたまま現在に至っていた。そこに別器種であるという見解が示されたことから、本稿では改めて本資料の観察を行ってその位置付けについて再検討を行っていきたい。

１．出土遺跡の概要と緑釉陶器の出土状況

河崎の柵擬定地は、陸奥話記に記載されている前九年合戦に使用された安倍氏（安倍貞任）の柵である「河崎柵」の所在地と考えられている。しかし、実態としては縄文時代後期～近代にかけての複合遺跡であり、発掘調査では前九年合戦以前にあたる奈良～平安時代前半期の遺構・遺物も検出されている。この時期の遺構は、検出面及び出土遺物から８世紀後半～９世紀初頭と10世紀初頭に属する



第１図　遺跡の位置

第２図　緑釉陶器出土地点と主な出土遺物

グループに分けられる。前者は第２検出面での検出遺構であり、この検出面で検出された竪穴建物からは、和同開珎や蕨手刀といった岩手県内では類例の少ない遺物の他、鉄鏃・小札等も出土している（第２図）。緑釉陶器は、調査区中央南側に位置する平成15年度調査区B区の第２検出面・ⅢD74グリッドから出土した（第２図）。遺構外からの出土であるが、第１検出面との間には１～２ｍを超える厚い洪水堆積層（無遺物砂層）が堆積しており、10世紀初頭以降の遺物が混入する可能性は極めて低いことから、本資料もこの時期の遺構に伴っていた遺物であると考えられる。

２．資料の観察

本資料について、筆者は『報告書』で「無頸の緑釉陶器小壺である。胎土は黄橙色で軟質の焼き上がりである。口径は4.6㎝、体部最大径は8.8㎝である。体部下半が欠損しているが、扁平球状であると思われる。体部中央から口縁端部にかけてナデ調整、体部下半にはケズリ調整が施される。口縁部内面から体部外面にかけては青みがかった緑釉、体部内面には黄色がかった緑釉が刷毛塗りされる。胎土や釉調から京都洛北産と考えられる。」と記載した（岩手県埋文2006）。製作年代は９世紀前半（猿投窯黒笹14号窯式期併行）としたが、別稿で９世紀初頭前後の可能性があると修正した（村田2014）。なお、本資料について再度観察と実測を行ったところ、『報告書』より若干大きく口縁部内径6.0㎝、体部最大径9.8㎝、残存高2.3㎝に復元された（第３図、以下村田案とする、註１）。

一方で、異なる見解を示した高橋照彦氏は、「胎土が黄褐色の軟質（軟陶）で、緑色の釉を薄く施したもの」で、「小片ながらも竈あるいは風炉と呼ばれる茶釜を沸かす道具に類品があり、その種の特殊品に当たる」ものとし（高橋2018）、口縁部内径８㎝、体部最大径を13㎝程度に復元している（第６図、以下高橋案とする）。また、製作年代は長岡京期前後（８世紀末）頃と推定している。

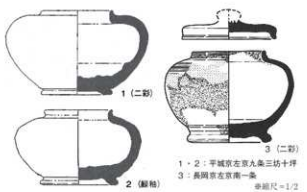
筆者と高橋氏の観察結果を比較すると、胎土・焼成・釉調から長岡京期（８世紀末～９世紀初頭）に平安京近郊の窯で製作されたものとする点は同じだが、大きさと形状について見解が異なり、そのため想定する器種が異なっている。次節では両者の復元案をもとに器種について検討を行う。

３．器種の検討

最初に８～９世紀初頭における国産鉛釉陶器の器種構成について概観する。８世紀に生産された奈良三彩（二彩含む）の器種には、大型品では同時代の須恵器と一致する食器（碗・皿・鉢）・貯蔵具（壺・甕）・仏具（火舎香炉・多口瓶・鉄鉢形等）、金属器写しの器形（合子・塔・鼓等）があり、小型品では小壺・小杯・釜・托・火舎香炉等がある。続く長岡京期（８世紀末～９世紀初頭）に入ると緑釉単彩陶器が出現し、新器種として碗・高坏・畦壺・風炉（火舎）・羽釜・甑等が出現する（第５図）。長岡京期には二彩も生産されているが、生産量は大きく減り小壺が主体となる。

長岡京期に属すると考えられる本資料について筆者は小壺、高橋氏は風炉（火舎）・竈と、いずれ

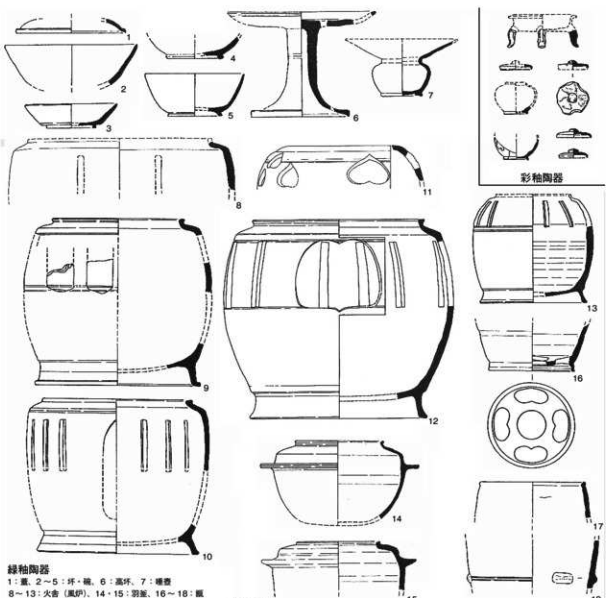
第３図　緑釉陶器再実測図



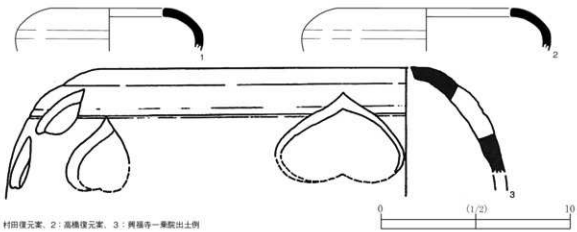
第４図　彩釉陶器小壺の諸例

もこの時期に生産されていた器種を想定した。続いて本資料がこれらに該当するか、あるいはそれ以外の器種かについて検討する。まず小壺であるが、いずれも口縁部が短く直立するもので、無頸の小壺は現在のところ確認されていない（第４図、註２）。体部は上半～中央に最大径を持ち、高台を有する。平均的な大きさは、口縁部径３～４cm、体部最大径６～８cmである。緑釉単彩のものの外面には濃緑色または淡緑色の緑釉が施される。これらと村田案を比較してみると、体部形状・大きさ・釉の色等は一般的な小壺と共通の特徴を有するが、口縁部形態が無頸と有頸とで大きく異なっている。

次に風炉（火舎）であるが、長岡京期の風炉は口縁部が短く立つものが主体で（第５図８～10・12・13）、無頸のものは少ない（第５図11）。有頸のものの体部は、頸部脇で外方に開いた後に屈曲し、若干丸みを持ちながら底部へと至る。無頸のものは口縁部から丸みを持って体部下半へと至るようである。有頸・無頸ともに体部上半には方形や円形の透かし穴が数ヶ所開けられ、体部外面には淡緑色の緑釉が施される。いずれも口縁部径が20cmを超えるものが多い。これらと高橋案を比較してみると、体部下半の形状や透かし穴の有無は不明であるが、口縁部形態や体部形状は無頸のものに共通する。ただし、高橋案では口縁部内径が８cm程度と一般的なものより小さく（第６図）、外面の釉が



第５図　長岡京期の施釉陶器



1：村田復元案、2：高橋復元案、3：興福寺一乗院出土例

第6図　復元案と大きさの比較

濃緑色である等相違点も見受けられる。

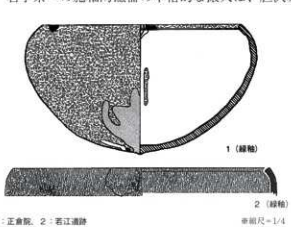
両者の復元案の他、別器種の可能性についても検討しておきたい。本資料は口縁端部に面を形成し、端部は内側を向く。このような口縁部を有する器種としては鉢（鉄鉢形）がある。鉄鉢形は三彩・二彩の製品が多いが、緑釉単彩のものも確認されている（第7図）。体部は上半に最大径を持ち、底部は尖底となる。器高は12～15cm、体部最大径は20～25cm程度であるが、それ以上の大型品も見られる。緑釉単彩のものは濃緑色の緑釉が外面のみまたは内外面に施される。本資料と比較すると、体部形状と釉調には共通点があり、口縁端部が若干外傾すれば鉄鉢形になる可能性もある。ただし、鉄鉢形は風炉よりも大型品が多く、本資料とは大きさがかなり異なる。

以上、両者の復元案と類例との比較から想定される器種についてみてきた。いずれの比較でも共通点と相違点が認められ、断定的に言い切ることは難しいが、器形の類似性からみると高橋氏の想定する風炉の可能性が高いと言える。しかし、第6図に示したように一般的なものより小型であることから、高橋氏の指摘のように風炉のなかでも特殊品に該当すると考えられる。

おわりに　－本資料出土の意義－

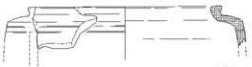
ここまで河崎の柵擬定地出土緑釉陶器について、村田・高橋各々の復元案をもとに検討を行い、その結果、本資料は飲茶関係の道具である風炉（火舎）の可能性が高いことを示すことができた。最後に本資料がもたらされた意義について考えておきたい。

岩手県への施釉陶磁器の本格的な搬入は、胆沢城が機能を開始する9世紀前半であり、碗皿類を主体として国家的饗宴に使用するための食器としてもたらされたと考えられる。一方、風炉は主に宮都や寺院で用いられる飲茶関係の道具であり、胆沢城で出土する饗宴用の器種とは用途が異なると考えられる。飲茶の風習は奈良時代後半頃に中国の唐から日本に伝来した外来文化で



1：正倉院、2：若江遺跡　※縮尺＝1/4

第7図　彩釉陶器鉢（鉄鉢形）の諸例



※縮尺＝1/4

第8図　下野国分寺出土緑釉陶器火舎

あり、長岡京期の風炉は関東地方以北では現在のところ栃木県下野国分寺でのみ出土が確認されている（第８図）。本資料が出土した河崎の柵擬定地では、８世紀後半～９世紀初頭の寺院関連の遺構・遺物は検出されていないが、竪穴建物からは和同開珎・蕨手刀・鉄鏃・小札等が出土している。これらの所有から、この時期には律令国家と繋がりのある武装集団が居住していたと考えられている（岩手県埋文2006）。本資料が実用品であったか否かは判断できないが、飲茶のような当時の新式文化に伴う器種が城柵が建設される直前の時期に岩手県に搬入されているという点は非常に重要である。長岡京期（桓武朝段階）は東北地方で対エミシ政策を国家的に展開させていく直前の時期であり、本資料はこの時期の国府であった多賀城より北の地の拠点として河崎の柵擬定地の集落が選ばれ、都との結びつきを強く示す器物として遺跡内にもたらされたものと考えておきたい。

註

⑴本資料は口縁部残存率が10％程度しかなく、実測時の設置方法によって大きさや体部の形状が異なることから、今回は実測を数回行って最も多く計測された値を使用した。

⑵小壺が多量に出土している福岡県沖ノ島祭祀遺跡では１号遺跡で10個体以上の小壺が出土しているが、無頸のものは確認されていない。

引用・参考文献

愛知県陶磁資料館　1998　『日本の三彩と緑釉　天平に咲いた華』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2006　『河崎の柵擬定地発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第474集

高橋照彦　1994　「東国の施釉陶器」『古代の土器研究　－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器－』古代の土器研究会

2002　「日本古代における三彩・緑釉陶の歴史的特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集

2018　「東北地方北部出土の緑釉陶器とその歴史的背景」『尾駮の駒・牧の背景を探る』六一書房

巽純一郎　1998　「都城における鉛釉陶器の変遷」『日本の三彩と緑釉　天平に咲いた華』

2004　「Ⅱ－１　古代前期の土器」『古代の官衙遺跡Ⅱ　遺構・遺物編』奈良文化財研究所

栃木県教育委員会　1995　『下野国分寺ＸＩ　墨書土器・施釉陶器編』栃木県埋蔵文化財調査報告書第156集

戸塚和人ほか　1997　「名神高速道路関係遺跡平成７年度発掘調査概要　長岡京跡左京第361・362・363次（7ANVKN-6・7・8）」『京都府遺跡調査概報』第74冊　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター

奈良国立文化財研究所　1965　「一乗院調査概報」『奈良国立文化財研究所年報1964』

1986　「平城京左京九条三坊十坪」

楢崎彰一　1976　『日本のやきもの１　三彩・緑釉』講談社

㈶東大阪市文化財協会　1993　『若江遺跡第38次発掘調査報告』

村田　淳　2004　「岩手県内出土の緑釉陶器　－出土事例の集成と若干の検討－」『岩手考古学』第16号　岩手考古学会

2015　「北上市上鬼柳Ⅲ遺跡出土の二彩瓶」『紀要』第34号　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2016　「東北地方北部の施釉陶磁器」『第Ⅱ分科会　北東北９・10世紀社会の変動　研究報告資料集』日本考古学協会2016年度弘前大会実行委員会

山中　章　1994　「長岡京の施釉陶器　－緑釉陶器の成立－」『古代の土器研究　－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器－』古代の土器研究会

図版出典

第１図　筆者作成　　第２図　岩手県埋文2006から転載、加筆　　第３図　筆者実測・トレース・撮影

第４図　奈良国立文化財研究所1986、戸塚ほか1997から転載　　第５図　巽2004、山中1994から転載、加筆

第６図　巽2004・高橋2018から転載・再トレース　　第７図　楢崎1976、東大阪市文化財協会1993から転載

第８図　栃木県教育委員会1995から転載

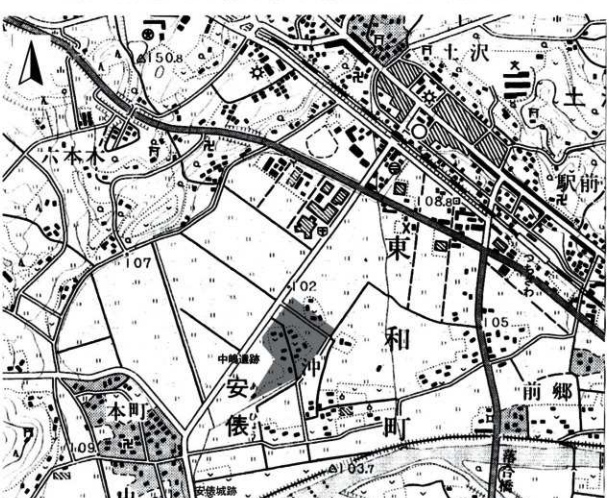
花巻市中嶋遺跡の白磁ビロースク碗

福　島　正　和

花巻市東和町安俵に所在する中嶋遺跡で出土した中国産白磁碗について、その紹介と重要性について指摘する。ビロースク碗は、14～15世紀前半に生産された中国産白磁である。本州での出土事例が少なく、その名の通り琉球地方を中心とする南方での出土事例が多い器である。この器を保持していた勢力を中嶋遺跡に近在する安俵城跡・押無館跡・安俵高館跡等の城館に居したと伝えられる安俵小原氏と想定した。

1．はじめに

中嶋遺跡は、東北横断自動車道釜石秋田線の建設に伴って３回の発掘調査がおこなわれた。遺跡は花巻市東和町安俵11区に所在し、横断道東和インターチェンジのすぐ南東に位置する。現在は、盛土された横断道の本線と法面になっている。遺跡立地は猿ヶ石川に接する沖積平野の低地帯であり、標高約100mの地点である。調査では、隣接する羽黒田遺跡とともに古代（９世紀代）の竪穴住居を中心とする遺構を多く検出した。そのうち、平成23年10月17日～12月２日に調査された３回目の調査では、白磁ビロースク碗（註１）が１片出土した。すでに発掘調査報告書（福島・巴2013）は発刊されているが、非常に希有な器であり、今後の注意を促す意味も込めて改めて本稿を成すこととした。



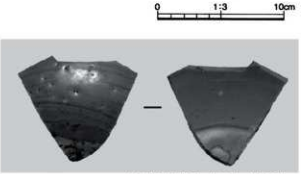
第１図　中嶋遺跡の位置

「ビロースク碗」とは聞き慣れない名称であるかもしれないが、現在の中国福建省辺りで生産された白磁碗の一類型である。概ね14世紀後半～15世紀前半を中心とする時期が考えられており、本州での出土は極めて稀な製品である。この碗の出土は、おもに琉球地方で多いことが知られている。そもそも「ビロースク」の名は、沖縄県石垣市に所在するビロースク遺跡を標識にしているためである。遺跡名にみられる「スク」という地名からもわかるとおり、この白磁碗の標識遺跡は石垣島にある中世城館（グスク）跡である。

2．資料の詳説

中嶋遺跡出土の白磁碗は、発掘調査報告書に記載した筆者の報文を引用すると、以下のとおりである。「やや緑がかった乳白色を呈し、素地内面には圏線と植物の文様が彫り込まれている。器形は丸みを持ち、器壁は非常に厚く特徴的である。これらの特徴から、いわゆるビロースク型と呼ばれる白磁碗Cである。中国南部の窯が想定されるが、詳細な産地は明らかになっていない。帰属時期は14～15世紀前半と想定されている。」この白磁碗Cという分類名称と帰属時期について、報文では森田勉の太宰府陶磁の分類と編年を継承した山本信夫の編年（山本1995）を用いている。以下、これに若干の補足を加える。沖縄でもこの分類を踏襲して瀬戸哲也らが「白磁C群」として整理している（瀬戸ほか2007）。最初に「ビロースクタイプ」として分類名称を与えた金武正紀は、その後の追証で、ビロースクタイプⅠ～Ⅲ類に分類し、整理している（金武2009）。これら分類は、いずれも口縁部形態に分類すべき属性を求めており、直口傾向の口縁部を持つものと外反する口縁部を持つものに分けている点で共通する。さらに、やや後出するとみられている外反口縁のものの多くに見込みの印花文が認められるようである。

今一度、中嶋遺跡出土の碗に戻る。破片は体部下半であり、口縁部・底部は残存していない。内面に除刻の圏線で見込みを円形に区画し、その内区に印花文が認められる。破片であるため印花文の全容を知ることはできないが、植物意匠である。破片にみられる文様の断片は、花の意匠部分であるとみられる。外面は下端が露胎であり、そのまま高台へと続くようである。中嶋遺跡出土碗片は、口縁部形態が不明ながら文様構成から瀬戸らの分類「白磁C3」、金武の分類「ビロースクタイプⅢ類」にそれぞれ相当すると考えられる。すなわち、ビロースク碗の中でもやや後出する可能性が考えられ、14世紀後半～15世紀前半が妥当な年代観であるとみられる。次に出土状況であるが、中嶋遺跡出土のビロースク碗は、残念ながら表面採集によって得られたものであるため、層位的な時代の特定は困難である。また、ビロースク碗と同時代の龍泉窯青磁碗が1片出土している以外に中世の遺物および中世の遺構が認められないため、この地点でビロースク碗を積極的に評価することは難しく、現段階ではこれ以上の情報を得ることはできない。しかし、中嶋遺跡の所在する安倹地区の沖積平野を眼下に望む小高い場所には安倹城跡・（擬）押蕪館跡・（擬）安倹高館跡などの中世城館が林立している。中嶋遺跡と安倹城跡とは、直線距離にしてわずか500m



中嶋遺跡報告書（2013）より転載

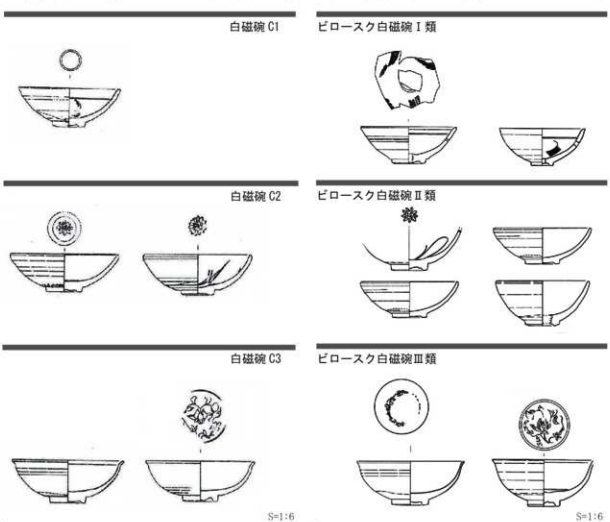
第２図　中嶋遺跡出土ビロースク碗

である。筆者はこの安俵城跡を始めとする中世城館群が、この稀な器と関わる遺跡ではないかと睨んでいる。

3．安俵地区の中世城館

安俵城は和賀氏の重臣である小原氏の居城であるとされている。小原氏は、東和地域に入る以前に、狭良城（北上市更木か？）を拠点としていたとされている。その後、小原義郷（安俵小原氏初代）が、東和地区の倉沢館に入ったとされている。安俵城の成立時期は、安俵小原氏の２代目小原政継が安俵城に入ったとされる応永７（1400）年が想定されている。このように小原氏は、中世和賀領域のうち北東部の一角を領有していた様子が看取される。その後、天正18（1590）年、小原氏は南部氏によって安俵城を追われることとなる。しかし、慶長５（1600）年に奪還を企図し、ここを攻めるが、あえなく敗れたと伝えられている。城域もその直後、破却されている。すなわち、安俵城は、14世紀末～15世紀初頭に小原氏の拠点として成立し、16世紀末に小原氏から南部氏の城館となり、直後破却され機能を失うようである。

安俵城は安俵地区の低地帯を見下ろす連郭式の城館跡である。安俵地区の低地帯との比高は10m程度である。各曲輪は一列に配置され、それぞれを堀や土塁によって区画されている。現在もその普請の名残を現地で視認することができ、現在の地名は、城館の機能を推し量る材料となっている。内部



瀬戸哲也らによる分類（瀬戸ほか2007）を元に再構成　　金武正紀による分類（金武2009）を元に再構成

第３図　琉球地方出土ピロースク碗

は部分的に発掘調査も実施されており、曲輪に面する所では中世の建物などがみつかっている。また、第５次調査では堀の埋土から明の染付碗片（16世紀）が出土しており、城館最末期の遺物として注目される。しかし、いずれも限定的な調査であるため、城館の考古学的な様相把握には未だ至っていない。安倹城跡の周辺には、押蕪館跡や安倹高館跡の存在も想定されている。これら城館も安倹小原氏の築いた城館であると推測されているが、安倹城跡以上に未解明部分が多い。

先述したように、安倹城跡直近の中嶋遺跡出土のピロースク碗は、現在の陶磁器研究の編年成果によって14世紀後半～15世紀前半の年代が考えられ、小原政継が安倹城に入る14世紀末～15世紀初頭の年代に合致する。これは、安倹城の成立年代の推定をいくらか補強する材料の一つであると考える。安倹城跡ではなく、中嶋遺跡の立地する低地帯で出土した由縁を知ることはできないが、安倹城存続期には耕作などがおこなわれた農業生産域であった可能性が推測される。近世絵図でも水田である。

４．東北地方出土の類例

筆者は、東北地方北部において中嶋遺跡以外の２遺跡でピロースク碗を確認した。以下、２遺跡出土のピロースク碗を紹介する。

前田表Ⅱ遺跡（秋田県）

遺跡は、秋田県南西部のにかほ市に所在する。報告書によると、ピロースク碗１点が落ち込み中から出土している。特徴は底部に厚みがなく、見込みに植物の文様が認められ、この意匠を圏線で囲んでいる。秋田県内では、この１片が唯一の出土事例である。この遺跡が日本海側沿岸部であるため海上交通によってもたらされたものかもしれない。

十三湊遺跡（青森県）

青森県西部の五所川原市（旧市浦村）に所在する。言うまでもなく、本州有数の中世港湾遺跡であ

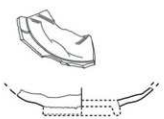
第４図　天保13（1842）年安倹村検地絵図（花巻市博所蔵）にみられる安倹城跡周辺の様子

る。この遺跡では非常に多くのピロースク碗が出土している。報告書の表を確認すると、「白磁椀C群」とされているものがピロースク碗に相当すると考えられる。おそらく、本州で最もピロースク碗が出土している遺跡の一つであると考えられる。図に示したものは、特徴が判明するものを中心に筆者が7点選択し、十三湊1～7とした。十三湊1～3は内面見込みに文様がみられる。十三湊4～6は口縁部が外反するが、その他の口縁部形態は不明である。

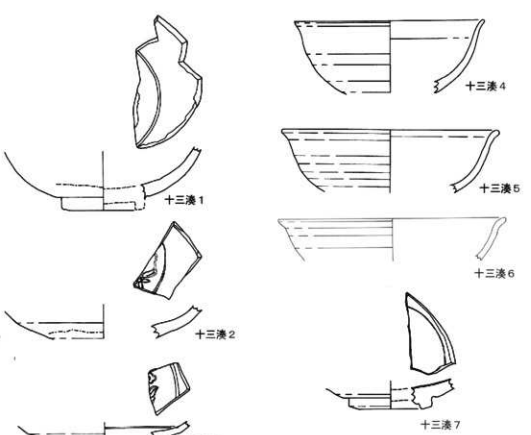
本州では出土の僅少な白磁ピロースク碗は、東北地方にも到達していることが十三湊遺跡の調査で明らかである。この遺跡で多くのピロースク碗がみられるため、白磁碗は太平洋側よりも日本海側に分布が多く認められる傾向となっている。しかし、本稿で紹介した中嶋遺跡の出土例から太平洋側の地域にも到達していることが明らかになった。今後も東北地方において出土例が増加する可能性もあるが、出土量の爆発的な増加は見込めない。同時に、分布傾向にも大きな変化は生じないものと思われる。しかし、中嶋遺跡出土例にみるように、岩手県内陸部でこの白磁碗の出土が認められたことで、今後、東日本および東北地方の太平洋側地域でもピロースク碗が出土する可能性があることを指摘しておきたい。あるいは、すでに出土しているかもしれない。

5．まとめにかえて

中嶋遺跡で接した1片のピロースク碗と呼称される白磁碗を紹介した。岩手県内で管見に触れる同種の器は、現段階でこれに限られる。この1片をもって中嶋遺跡での積極的な評価は困難であるが、中嶋遺跡に近在する安



第5図　秋田県前田表Ⅱ遺跡出土ピロースク碗



第6図　青森県十三湊遺跡出土ピロースク碗

倭城跡と関連する遺物である可能性を指摘した。中嶋遺跡出土ピロースク碗は、14世紀後半～15世紀前半の年代が想定され、安倭城の推定成立年代と合致する。安倭城跡の発掘調査は未だ部分的であり、不明な点が多いが、今後も調査の進展に注視したい。

これまで述べてきたように、ピロースク碗は14世紀～15世紀前半に中国福建省辺りの窯で生産された白磁製品である。本州では出土事例が極めて少なく、特に東日本や東北地方では指折り数える程度の出土遺跡数であり、特に太平洋側ではより少ないようである。日本海側に偏重した流通経路なのかもしれないが、中嶋遺跡の事例のごとくその経路から外れて出土する意味も考える必要がある。今回紹介した1片は、まさにその意味を考える契機となることに期待したい。また、今後の出土類例やこれまで報告されているが特定に至っていないものにもあわせて注意したい。

なお、和賀氏の領域ではなく稗貫氏の領域であるが、同じく花巻市内では万丁目遺跡で枢府手とみられる白磁坏が出土している（註2）。ピロースク碗とともにこちらも出土事例の僅少な同時代の中国産白磁である。中世の和賀・稗貫地方の勢力は、いかにしてこれら僅少な大陸産の器を手に入れたのであろうか。中世陸奥における中国産陶磁器の流通を考えるうえで重要なファクターである。

最後に、中嶋遺跡の整理作業時、遙か遠く南方の畏友、瀬戸哲也君（沖縄県立埋蔵文化財センター）に中嶋遺跡出土の白磁碗片を見せ、ピロースク碗で間違いないと承認を得た。協力に謝意と敬意を表する。また、橋本征也氏（花巻市教育委員会）には安倭城跡に関して多大なご教示をいただいた。花巻市博物館には絵図の掲載許可をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げる。

註

(1)本稿で紹介するピロースク碗は、「ピロースクタイプ碗」や「ピロースク型碗」などと呼称されている。金武正紀が設定した分類名称である。ピロースクタイプとされるものには碗のみならず、皿も併存するようである。本稿では、白磁碗のうち、いわゆるピロースクタイプとされるものを便宜的に「ピロースク碗」と呼称する。

(2)万丁目遺跡については現地説明会資料および平成30年度埋蔵文化財センター遺跡報告会資料を参考にした。正式な報告書は2019年度発刊である。

引用および参考文献

福島正和・巴　亜子　2013『中嶋遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第607集

金武正紀　1988「ピロースクタイプの白磁碗について」『貿易陶磁研究』№8　日本貿易陶磁研究会

金武正紀　2009「今帰仁タイプとピロースクタイプ　-設定の経緯・定義・分類-」『13～14世紀の琉球と福建』　熊本大学木下尚子研究室

森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2　日本貿易陶磁研究会

山本信夫　1998「中世前期の貿易陶磁」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　真陽社

瀬戸哲也ほか　2007「沖縄県における貿易陶磁研究」『紀要　沖縄埋文研究』5　沖縄県立埋蔵文化財センター

瀬戸哲也　2019「琉球王国の中継貿易と貿易磁器」『月刊考古学ジャーナル』722号　ニューサイエンス社

東和町史編纂委員会　1979『東和町史　上巻』

東和町教育委員会　1996『東和町文化財調査報告書第13集町内遺跡発掘調査報告書Ⅴ（安倭城跡遺跡）』

秋田県埋蔵文化財センター　2010『前田表Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書451

五所川原市教育委員会　2008『十三湊遺跡』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書30

水澤幸一　2009『日本海流通の考古学』高志書院

宮古市根井沢穴田Ⅳ遺跡出土のサイダー瓶

河本純一

表題の資料である花月サイダーは、大正期を中心とした遺物を伴出し、当時の刊行物に人気商品として現れる。石川大次郎により明治37（1904）年に発売されたこの花月サイダーは、戦後も長く販売され続けたが、昭和９（1934）年に販売元が長田商店へと変わっていることから、「東京石川日進舎」の陽刻がある瓶については、明治終末期から昭和初期の年代を示す考古学的に有効な資料となる可能性が見出せた。

１．はじめに

表題の資料は、平成28年度に実施された発掘調査で出土し、その翌年度に刊行された報告書（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2018）にて既に公表されているが、その分担執筆者の１人であった筆者の力不足のため、当時は即物的な事実記載に止まっていた。報告書の刊行後にも当資料に関わる情報を収集した結果、大正期を中心に明治の終わり頃から昭和初期（1900～30年代）にかけての年代を示す、考古学的・歴史学的に有用な資料となり得る可能性を見出せたことから、本稿にて詳述する。

2. 出土遺跡の概要と出土状況

表題の資料が出土した根井沢穴田Ⅳ遺跡は、宮古市津軽石第19地割50－1ほかに所在する（第１図）。遺跡周辺には森林・畑地が広がっており、標高は24～27mである。三陸沿岸道路の建設に伴い発掘調査が実施され、平成27年度の調査では主として14世紀代の製鉄炉・工房跡が、平成28年度の調査では縄文時代の土坑、弥生時代後期の竪穴建物、近現代の家畜埋葬墓が検出された。

本稿の主題であるサイダー瓶は、この近現代の家畜埋葬墓の１つ、土坑墓５より出土した（第２図）。この土坑墓には馬が埋葬されており、当資料のほかにガラス瓶が３本出土した。これらのガラス瓶は、おそらく供養の品として埋葬時に埋められたものと思われる。

（国土地理院「盛岡」S=1/200,000　2013年６月１日発行を縮小・加筆）

第１図　根井沢穴田Ⅳ遺跡の位置

第２図　根井沢穴田Ⅳ遺跡　平成28年度調査　土坑墓５　検出状況

3. 根井沢穴田Ⅳ遺跡出土のサイダー瓶「花月サイダー」

（1）形態的特徴と伴出遺物

第3図－1が、土坑墓5より出土したサイダー瓶である。緑色を呈し、平底の瓶で栓は王冠栓。肩部に「花月花月花〈商標〉」、腰部に「東京石川日進舎」の陽刻文字がある。底面には「K」の文字がある。詳細は後述するが、このサイダー瓶は明治37（1904）年頃に発売された「花月サイダー」である。

第3図－2・3は伴出したビール瓶である。いずれも明治39（1906）年設立の大日本麦酒により発売された大日本ビールである。このビールで王冠栓を採用したのは明治40（1907）年であるというので、出土したビール瓶はそれ以降の製造になる。また、大日本麦酒は戦後の昭和24（1949）年に過度集中力排除法によって、日本麦酒と朝日麦酒に企業分割されることから、再利用される期間を考慮に入れても1950年代までの資料と考えられるだろう。

（2）他遺跡からの出土例

では次に、他の遺跡における花月サイダーの出土事例を参照して、根井沢穴田Ⅳ遺跡から出土したサイダー瓶について検討を進める。

①　茨城県つくば市　島名熊の山遺跡（茨城県教育財団　2009）

島名熊の山遺跡は、主としては古墳時代から中世の遺跡であり、特に古墳時代から奈良時代にかけては、鳩名郷における交通や物流の中心的集落であったと考えられている。花月サイダーの瓶は、平成19年度に行われた発掘調査の際に、表土中より出土した。

第3図－4が島名熊の山遺跡から出土した花月サイダーの瓶である。根井沢穴田Ⅳ遺跡で出土したものと形態的特徴に違いはほとんど認められない。第3図－5・6は伴出したビール瓶である。5は明治21（1888）年に、ジャパン・ブルアリーカンパニーが製造、明治屋が発売した「キリンビール」。王冠栓（明治45（1912）年採用）で、肩部に「登録〈商標〉商標キリンビール」の陽刻文字があることから、大正期から戦中期の資料と考えられる。6は大正2（1913）年に帝国麦酒が発売した「サクラビール」。帝国麦酒は昭和4（1929）年に桜麦酒へ社名変更し、昭和18（1943）年に企業整備令により大日本麦酒に吸収されることから、5と同じく大正期から戦中期の資料と考えられる。

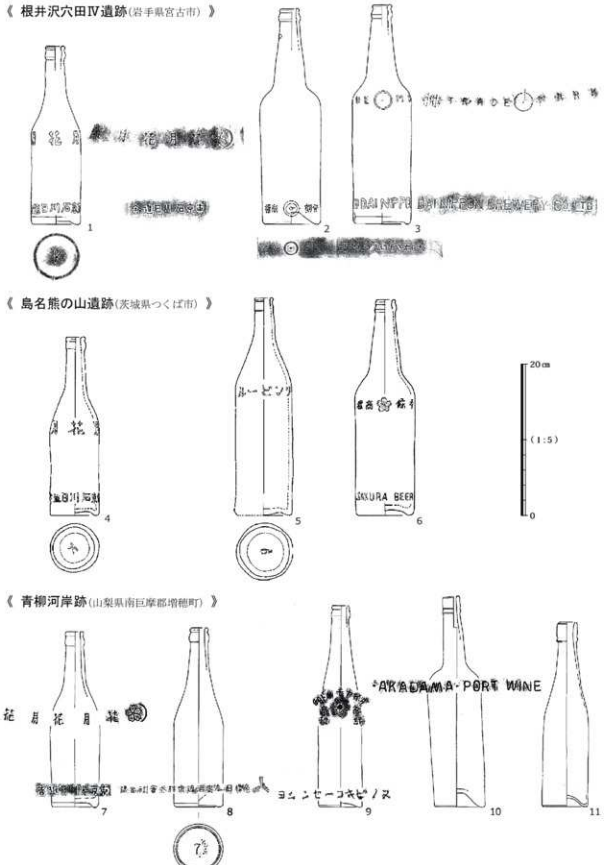
なお、図化はされていないが、これらのほかに大日本ビールや金線サイダー、三ツ矢サイダーの瓶も出土している。

②　山梨県南巨摩郡増穂町　青柳河岸跡（山梨県教育委員会　2009）

青柳河岸跡は、江戸時代に整備された富士川舟運の拠点であり、明治維新後も明治36（1903）年の中央線開通に伴い解散となるまで、物資輸送の拠点であった。花月サイダーの瓶は、土堤状の高まりの上で確認された遺物集中箇所Eブロックより出土した。

第3図－7が青柳河岸跡から出土した花月サイダーの瓶である。こちらも、根井沢穴田Ⅳ遺跡で出土したものと形態的特徴に違いはほとんど認められない。第3図－8～11は伴出したガラス瓶である。この内、8の「三ツ矢サイダー」の瓶は年代を比較的狭く絞ることができる。8は腰部に「登録〈商標〉商標日本麦酒鉱泉株式会社」の陽刻文字がある。この日本麦酒鉱泉は、大正11（1922）年に加富登麦酒、帝国鉱泉、日本製壜の3社が合併して設立し、昭和8（1933）年に大日本麦酒へ合併することから、大正末～昭和初期の資料と考えられる。9の「布引鉱泉サイダー」、10の「赤玉ポートワイン」の瓶については年代を絞り切れなかったが、大きく時期が異なるものではないだろう。

以上2遺跡における状況からは、花月サイダーの瓶がおよそ大正期から戦中期にかけての遺物を伴っている様子が窺える。



第3図　花月サイダーと伴出遺物および他遺跡からの出土例

第4図　花月サイダーに関わる大正期の資料

4．花月サイダーと石川大次郎

次に『日本清涼飲料史』（阿部編　1975）等を参照して花月サイダーに関わる事項を整理する。

花月サイダーは、東京深川でラムネの製造・販売をしていた石川大次郎により、明治37（1904）年頃に発売される。なお、発売当時は王冠栓でなく、コルク栓であったという。石川大次郎は明治24（1891）年より開業しており、大正6（1917）年から昭和3（1928）年にかけては東京清涼飲料水同業組合の組長も務めている。同氏には後継者が居なかったが、昭和9（1934）年からは長田商店が花月サイダーのブランドを引き継いでおり、戦後以降も長く販売されている。

また花月サイダーは、大正2（1913）年『飲料商報』第52号にて当時の人気サイダーの1つとして挙げられ、大正7（1918）年『三府及近郊名所名物案内』では「サイダーの内でも随一の名誉を負ふに足るもの」として紹介されている。このような大正期の人気ぶりは、先に見た伴出する遺物に当時のものが多く、東京以外の各地でも出土していることが裏付けていよう。

花月サイダーは戦後も長く販売されるが、留意すべきは昭和9（1934）年に販売元が長田商店に変わることである。清涼飲料としてブランド化していたことから、石川大次郎による製造・販売を示す「東京石川日進舎」の銘を長田商店以後にも使用し続けた可能性が考えられる一方で、これを契機に銘が変更される可能性も十分に考えられる。その場合には、この銘がある資料は1910年代から1930年代と時期を絞ることができよう。

5．おわりに

以上の検討から、さらに追究すべき課題を残しつつも、根井沢穴田Ⅳ遺跡で出土した花月サイダーの瓶については、明治終末期から昭和初期に年代を限定できる可能性を見出せた。なお、本稿までに出土遺物としての確認はできなかったが、コルク栓の花月サイダーならば、さらに年代を絞ることが可能であり、注目に足る資料と評価できよう。

引用・参考文献

阿部栄次郎編　1975　『日本清涼飲料史』社団法人東京清涼飲料協会
茨城県教育財団　2009　『島名熊の山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第322集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2018　『根井沢穴田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第683集
河野昭三　2002　『ビジネスの生成－清涼飲料の日本化－』文眞堂
兒島新平編　1918　『三府及近郊名所名物案内』日本名所案内社
桜井準也　2006　『ガラス瓶の考古学』六一書房
山梨県教育委員会　2009　『青柳河岸跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第259集

執筆者（論稿掲載順）

金子　昭彦（かねこ　あきひこ）　（公財）岩手県文化振興事業団博物館（平成２～26年度在籍）
中村　隼人（なかむら　はやと）　八戸市博物館（平成25～29年度在籍）
滝尻　侑貴（たきじり　ゆうき）　八戸市立図書館（共同執筆）
野田　尚志（のだ　たかし）　三戸町教育委員会（共同執筆）
山川　純一（やまかわ　じゅんいち）　一関市教育委員会（平成29～30年度在籍）
吉岡　由哲（よしおか　よしあき）　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
村田　　淳（むらた　じゅん）　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
福島　正和（ふくしま　まさかず）　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
河本　純一（かわもと　じゅんいち）　（公財）大阪府文化財センター（平成26～29年度復興調査に係り出向）

紀要　第39号

（令和元年度）

印 刷　令和２年３月16日
発 行　令和２年３月25日
発　行　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001
FAX（019）638－8563
印　刷　小松総合印刷株式会社
〒020－0827　岩手県盛岡市鉈屋町15番４号
電話（019）624－1374

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2020